
上官殿の申すことには。

此花タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

上官殿の申すことには。

【Nコード】

N0920U

【作者名】

此花タロウ

【あらすじ】

「単刀直入に言う。結婚しよう。」

鉄面鉄皮、軍人の鑑、氷の男などと表現される無表情、でも美形な上官殿はおっしゃいました。直屬上司からの突然のプロポーズ？で危険と背中合わせの軍人生活がある意味キケンな美形上官との背中合わせ？これって身の危険デスカ？？な毎日へと変化した！

真面目な女性士官と無口に空気読まずにグイグイ押しまくる上官殿
とのゆる〜い攻防戦、開戦！

ある日嵐は突然に。

「単刀直入に言う。結婚しよう」

鉄面鉄皮、軍人の鑑、氷の男などと表現される上官殿はおっしゃいました。

場所は執務室、時間は夜、目の前におわすは上官殿。

文字通り目の前10cmの距離に嫌味なほどに整ったお顔、私の両肩には手。

いやいや、近すぎますって！

応接セットの机を挟んで向かい合って座っていたはずなのに、ソファの背もたれにジリジリと追い詰められています。

何がどうしてこういう状況に？

私、シズリ・シノノメ、困惑の窮みであります！（涙）

黒髪の女性士官はその碧い瞳に困惑を浮かべながらも何とか逃げ出す算段をするのであった。

時は遡ること1時間前。

空に明け星が浮かび、辺りを夕闇が覆い始めた頃のこと。

シズリ・シノノメ少尉は夜のお茶を淹れるべく立ち上がった。

デスクワークの1日で凝り固まった身体をつ、と伸ばし、肩にかかると長い黒髪をさらりと後ろに流す。

こんな空気の爽やかな夕には甘い薫りのルウの花弁を混ぜたお茶にしよう、そう考えながら。

こういう書類仕事の日は休憩も兼ねて茶を淹れるのがささやかな楽しみでもある。

殺伐とした軍務や会議、式典に遠征に特殊訓練、魔道実験の立会い等穏やかとは言い難い任務も多い中、ふくいくとした薫りに日常という温もりを感じて癒される。

お茶をどうぞ、と上司にカップを差し出すと、「ありがとう」と簡単な返事が返ってくる。

上官殿の御名はヒューバート・ヴァン・ラーツイヒ、27歳。

階級は中佐で隊を率いる司令官殿でもある。

そしてシズリの直属上司でもあり、彼女が副官として日々仕える人間でもある。

さらりとしたシルバートロンドの髪が濃い群青の瞳にかかり、黒の軍服に映える。

憧れる女性士官も多く、直属補佐として配置されたときには同期の女性陣から羨望の声が上がったものだ。

我が上官ながら相変わらず見目麗しいわ、シズリは内心ひとりごちながらにつこりと微笑みかけ、カップを机に置く。

すると中佐はそのカップを手に取りながら立ち上がった。

空いた方の手で執務室の隅にある応接セットを指し示される。座れ、ということらしい。

彼は普段から寡黙で、必要最低限しか口を開かない。

部下にも細かく指示を出すということがなく、個々の部下の裁量に任せながらも確実に目標達成に導く手腕には舌を巻く。

副官として直属についてそろそろ1年がたつが、シズリには彼という人間が普段何を考えているのか、どういう人間なのか理解しているとは言い難い。

しかし、実際尊敬しているし、彼についていけば間違いないと思うてもいる。

シズリにとってはただそれだけで十分であり、むしろその背についていけるだけで誇らしかった。

私に話とは珍しいな、と内心首を捻りながらもシズリはデスクワーク日用の軍服のタイトスカートと裾を気にしつつ、ソファに腰掛けた。

「そろそろ打ち合わせをしておいたほうがよいのではないか、と」群青の瞳をやや細め、少し薄めの引き締まった唇が少し低めの声で言葉をつむぐ。

「打ち合わせ、ですか？」

シズリは何の件だったか思い当たらず再び内心首を捻る。

そういえばかねてより開催が決まっていた、暗部との合同訓練の選抜者及び実践内容はおろか正確な日程についてもまだ決定していなかったな、と思い当たる。

きちんと組んでおかねばどんな騒ぎになるか、想像するだに恐ろしい。

お互いをライバル視するのはけっこうだが、それを訓練に持ち込むのはご遠慮願いたいところだ。

巻き込まれ、その後の後片付けと報告に奔走する羽目になるこちらの身にもなつて欲しい。

上官殿の言うことも最もだ、とシズリは表情を引き締める。

「そうですね。まずは日程調整から始めなければならないと思います。

おそらく本部の方々も出席を望まれるでしょうし、先方のスケジュールに合わせて日程調整を組むことも要求されるでしょうね」

ヒューは先を促すようにこちらを見つめてくる。

「それが決まりましたら告知と会場の手配はこちらにお任せください。

演目等の内容は中佐殿にご判断いただけたらと思います。

進行をスムーズに行うためにも一度きちんとした行程を組んだほうがよいですね」

「・・・それはそうだが、周囲の都合ではなく、君自身の都合はどうなんだ？」

難しい表情をうかべて上官殿はティーカップを見つめながらつぶやくように言った。

「は？」

きょんととしてシズリは上官を見つめる。

すると今度はカップに落としていた視線をこちらに向けながら、再度同じ質問を繰り返す。

「君自身の希望はいつなんだ？」

珍しく真っ直ぐにこちらを見つめてくる群青の瞳のいつにない視線の強さにシズリはとまどう。

・なぜ単なる一士官である自分の都合が気になるのだろうか、と。ああ、これは上官殿のスケジュール調整を預かる副官としての意見を求められているのだな、と腑に落ちた。

上官殿と自分自身の今後数か月分のスケジュールをざっと頭の中でシュミレートする

「そうですね、さ来月のイの日なぞよいのではないかと思いますがつうん、本部での会議はその翌週だし、来賓予定もない。飛魚組と歩竜組との合同演習という名のお祭り騒ぎは来月だし。

こちらの都合的にはこの日あたりが楽なだけだな、と思いながら顔を上げて驚いた。

普段ほとんど表情が変わらない上官殿が渋面を浮かべていたのだ。

「ど・どうか、されましたか？」

失言でもしたのかと思わず血の気がひく。

それとも何かその日に上官殿が私に愛想をつかしてしまうほど大きな予定があったか？

あー、私の馬鹿、阿呆！！今のなしなし、ごめんなさい！！

表情には出さずとも、内心パニック状態のままシズリは上官の言葉を待つ。

己がどんな失言をしたのか、上官殿にここまでの表情をさせる何かを。

「シノノメ少尉、いや、シズリ」

「…は？（何で名前で呼びますか？）」

「その日は君は…女性の日になる予定ではないのか？」

「…はあ？」

シズリ・シノノメ、21歳、階級は少尉。

ある日尊敬する上官殿に言われた言葉はセクハラ？発言でした。

てか、何で私の生理周期を知っている！？

この日この時より思わぬ方向へと私の軍人生活は転がっていくのであった。

微笑みと言う名の爆弾

「私のせ、生理予定日・・・？」

尊敬する上司でもあるヒューバートの口から転がり落ちてきた思わぬ言葉に絶句するシズリであった。
ラはっけん
セクハ

聞き間違いであって欲しい、いやいや、そうに違いない。

冷たき氷の男ともあだ名されるお堅い彼に限ってそのような発言はありえない。

私の耳が腐ってるんだ、そうに違いないと心の中で無理矢理納得するシズリに無残にもヒューバートの次の言葉が追い討ちをかけた。

「そうだ。私も君が女性の日でないほうが望ましいのだが。まあ、どうしてもその日がよいというのなら構わぬが・・・」

9

あいたたたたたた。

今、心の中の大事なものがいくつか砕け散った気がします！
それとも何か、とても重要な意味があるのでしょうか？
何か女性特有の穢れでうんたらとか。

がつくりうな垂れたシズリをヒューバートは訝しげに見つめる。
テーブルの上に置かれた紅茶は既に冷め、窓の外には既に月が昇り、
星が瞬き始めている。

シズリ自身も眼前に星がチカチカと瞬いているような気分だ。

冷めた紅茶の残りをぐいっと一息にあり、自分よりたっぷり頭ひとつ分は背の高い
ヒューバートをきつつと見返す。

「…なぜ、私の生理周期が関係するのでしょうか？何でしたらいつそ私は欠場いたしますが！」

「君がいなければ意味がないだろうが」
相変わらず無表情のまま、しれっとヒューバートは答える。

「君が主役なのだから」

わずかに視線が和らぎ、口角がふつと上がる。
しかし混乱の窮みであるシズリにはその笑みを浮かべたといってもよい、彼の表情は目に入らなかった。

何より開いた口がふさがらない。

確かにシズリ自身、21歳というこの若さでラーツィヒ中佐の栄えある副官に任命される程度の優秀さと戦闘における実力、功績はそれなりに自負している。

しかし、中佐殿に比べればまだまだひよっこ、ついていくだけで精一杯だ。

その自分自身が主役だと？中佐殿は一体何の話をしているのだ？
暗部との演習ではなく、実は余興の紅茶淹れ競争だとか？？
いや、それなら生理がどう関係する？

まさか、水着コンテストでも開催しようというのか？

ありえない！

…いや、訂正しよう。軍部やしろの男達ならやりかねない！！
むしろ嬉々として提案するだろう。

以前開催された余興という名の「ムキムキ ボディビルディング大会」の光景が、今なお覚めやらぬ悪夢として瞼に浮かぶ・・・。
マッチョどものブーメランパンツ姿を見るのも自分のビキニ姿を晒すのもどちらも趣味ではない！

断る、断固として断るぞ！！

次々と嫌な予感が泡あぶくのように浮かび、背に冷たい汗が流れるのを感じる。

絵に書いたように常に冷静沈着で滅多に取り乱すことのないシズリが黙したまま

赤くなったり青くなったりするのをヒューバートは怪訝そうに見つめる。

「何か問題でも？」

「中佐殿、ビキニはご勘弁下さい・・・」

「・・・一体何の話だ？なぜそのようなものを着る必要がある？」

「違うんですか！」

「当たり前だろう」

天の助けとばかりにシズリは上官殿を見上げる。

あいかわらず無表情なその顔からは感情や考えはつかがい知れない

が、水着大会ではないことが分かり、ひとまず安堵する。
いや、したと思った。

…次の上官殿の一言という爆弾が投下されるまでは。

「…当たり前だろう、我々の結婚式なのだから」

emergency、emergency！総員退避せよ！！
シズリ・シノメ、21歳、地雷を避けたと安心したところに鋭角
45度、方角は中佐より瞬間硬直爆弾^{フリース・ボム}を投下されました！（涙）

窓の外では月は静かに輝き、部屋の中では沈黙という名の静けさが
室内に帳を下ろすのであった。

微笑みと言う名の爆弾（後書き）

シズリの予想もさることながら、上官殿の返事はさらにその上をいっていた、と。（笑）

思いつくがままに書いているのでなかなか話が進みません。。。早く始まりでもある、1話目の冒頭にたどり着きたいのですが。

私の彼は中佐殿??

上官殿から投下された思わぬ爆弾発言に、シズリは言葉を失った。いや、むしろ完全に思考停止、戦意喪失状態といったところだろうか。

一体いつから、そしてどこからこんな話になったのか。

絶句状態のシズリを尻目に、元から無口無表情な上官殿はシズリの心中も知らぬのか、冷めた紅茶に再び静かに口をつけている。

先程の自分の発言などどこ吹く風といった、いつも通りの態度だ。

普段ならその整った容姿と威厳ある空気に見とれることはあっても、散々慌てふためかせられた今晚は、やけに癪に障る態度に見える。

尤も、彼が人をからかったり陥れることをするような人間ではないことはシズリ自身、よく知っている。

だが、もしかしてこれは何かの余興かドッキリではないかと思えてならないのだ。

それほど普段の彼と先程の彼の爆弾発言には乖離がある。

とにかく自分には今夜の彼の言動の理由を知る権利がある、そう自分自身に言い聞かせ、何とか口を開くべく意識を集中した。

「あの、」

思い切って唇を開くと、目の前の群青の瞳がより濃さを増した気がした。

月明かりを背にしたシルバーブロンドの髪が夜気に揺れる。

昼間に部下達を従える威厳ある姿と違う、どこか風情ある雰囲気戸惑う。

男性の、しかも自分より6歳も年上の上官に対しておかしいかもしれないが
色香のようなものを感じて思わずくらくたとなる。

上官殿はその群青の瞳を細め、月明かりの下にその濃い睫毛が頬に陰を落とす。

シズリはその視線に負けるまい、と心の中で故郷の古い文言を唱える。

（…じゅげむ寿限無、じゅげむ寿限無 ごう五劫の擦り切れ かいじやりすいぎょ海砂利水魚の水行末 うんらい雲来
まつ末 ふうらいまつ風来末…）

「えーと・・・あの、その・・・先程、中佐殿と私わたくしがけ、け、結婚する予定だと仰られたように聞こえたのですが・・・」

聞き間違いですよね？、と続けようとしたところにあっさり返事が返ってくる。

「そつだが？」

相変わらずヒューバートは無表情のままだ。

シズリは泣きなくなつた。

なぜ、どうして、こんな訳の分からない羽目になるのか。

誰か説明して欲しい。

ドッキリなら責任者よ出てきやがれ！今なら1発殴つて許してやる！

私も女だ。ここは腹を括ろつ。

そしてきつちり上官殿に説明して頂き、訳の分からない話はどこか官舎の裏でも

犬小屋でもどこでもよいから埋めていただかねば！

「なぜですか？」

上層部が独身の上官殿を憂慮するあまり強制してきた偽りの結婚だとか？

それともあの男の差し金か、はたまた実は故郷の母が危篤で、息子の結婚を心待ちにしているための偽装なんです、とか??

「私が君に結婚を申し込んだからではないか」

さらりと返されたよ。

何を今さらといった風情の上官殿に負けじとシズリは言葉を畳み掛ける。

「いつ!？」

思わず大きな声でがなってしまった。

静かな部屋に自身の声がやけに響いた気がする。

上司に対する言葉ではなかったと、は、と口元を押さえる。

「・・・・・・・・」

今さらながら、辺りを包む静寂と沈黙が怖い。

昼間は多くの軍人達で賑やかな庭も廊下も、そしてこの執務室も今はシンと静まり返っている。

まるでこの世界にシズリとヒューバートしかないかのような、そんな錯覚を覚えそうになってしまう。

まずい、非常にまずい事態だ。

そもそも上官殿が腹を立てたり、感情を曝け出す姿を見た記憶がない。

そしていつもながらに何を考えているのかさっぱり分からない。

故に、この沈黙がよけいに重く感じる。

しかし雄弁は銀、沈黙は金とも言っではないか。

黙したまま様子を窺うべく、上官殿にちらりと視線を向けてみる。そして見たことを後悔した。

・・・笑ってる。

声を出さずに笑ってる。

普段、ちらりとも笑顔を見せない無表情な上司の顔しか知らないシズリとしては、戦慄すべき事態であった。

思わず身をひくと、ソファの背もたれにとん、と背中が当たる。逃げたい、でも逃げられない気がする。逡巡してる間に、沈黙を破ったのはヒューバートの方であった。

「忘れたのか？」

発された声は普段の落ち着いた、低い声とは違い、やけに艶めいて聞こえた。

ぐつと身を乗り出され、思わず後ずさる。その脚が2人の間のテーブルをやすやすと跨ぎ、シズリをソファの背もたれに追い詰める。

「…思い出させてやろうか、シズリ少尉？」

耳朶に直接息をふきかけるかのように囁かれ、全身が総毛だつ。背筋に何か奇妙な感覚が走り、ぶわつと肌が粟立つ。髪が、肌が、伝わる空気の振動が、目の前の男の存在を全身に伝えてくる。

この男は危険だと。

彼の密やかなる願い

シズリは元々首都から遠く離れた、地方の・・・所謂田舎出身だ。士官学校に入学するまでを母親の故郷でもあるヒイツルクニで育ったため、都会の風習や空気に未だに戸惑うことが多い。

母親譲りの真っ直ぐな黒髪に父親譲りの碧い瞳が珍しいのか、周囲の視線を集めることが多かったため、シズリ自身は自分が田舎モノだから目立っているのではと、当初は気に病んだ。

そんなシズリがなぜ故郷を離れて軍人となったのか。理由は簡単だ。

父方が元々軍人の家系であり、父は勿論のこと、兄達もみな軍人となったからだ。

長期休暇の度に帰ってくる父はシズリにとっての誇りであると同時に憧れでもあり、優秀な兄達はその自慢でもあった。

滅多に帰って来れず、たまに会えたとしても寡黙な父が、差し障りがない程度にぼつぼつと話してくれる軍の話聞くのがすきだった。幼き日は共に遊び、学び、守ってくれた兄達から、士官学校で学んだことや教わった内容、同期の友人達や教官達との日々の話を聞くのがすきだった。

ゆえに故郷の初等部を卒業し、次の進路を決める際には迷うことなく軍人を選んだ。

父や兄達の背中を、道を、生き方を追いたい。

守られるのではなく、守ることのできる人間になりたい。

そんな志を抱いて軍人となった。
そして士官学校では信頼できる友や尊敬できる師を得、戦場では共に闘える同士を得、今は心から仕えたいと思える上官を得ることができた。

はずであった。

その上官殿ご自身にこうしてソファに押し付けられるまでは！

そつと頬を指先でなぞられる。

窓から差し込む月明かりに、その群青の瞳が黒曜石のように黒く浮かび上がる。

その瞳にシズリ自身が映るのが見える。

この人は 誰 ？

見慣れたはずの上官殿が全く知らない人のように見えることにシズリは驚き、怯えた。

無口だ、寡黙だ、と思ってきたその人が、今その瞳を覗き込めばその瞳が雄弁に語っている。

欲望を。

これは獲物を狙う、捕食者の瞳だ。
被食者は逃げ道を探した。

＊

＊

＊

シズリの怯え戸惑う様がいかにも初心で可愛らしく、ヒューバートは
思わずふ、と微笑みの吐息を漏らした。

普段は冷静沈着が服を着たようで、てきぱきと仕事をこなし、一の
言葉で十を理解し、実に優秀な部下として重宝している。

配属前に見た彼女の履歴によると、士官候補生の頃より前線にも出
ており、そのときに・・・かなり過酷な戦いを経験しているようだ。
実践訓練時の隙のない身のこなしようからもそのときの経験が窺え
る。

しかし、そんな彼女が甘い薫りの茶や菓子を好んだり、たまに見せ
るはにかんだ笑みが可愛らしく、自然と眼が彼女の姿を追いつめて
いることにいつしか気づいた。
他の部下と親しげに話す様を見ると、妙に落ち着かない気分になる
自分自身にも。

彼女を手放せない、そばにいてほしい。

他の誰かにその笑みを与えないで欲しい。

どうしたら自分にだけ微笑んでくれるだろうか。

そう考えてしまう自分がいた。

だが、彼女は自分より6歳も若く、何より上司と部下という壁もある。

なら、壁があるならそんなモノは壊してしまえ。

そう自分の心が分かってしまえば、心積もりも早い。

さりげなくアプローチもしてみたし、アレに探りもいれたりもした。しかし、これまで女性とは望むものではなく寄つてくるもの、という認識であつたため、自ら追いかけた経験がない故に手応えが分ならず、焦燥が募るばかりであつた。

そうとはいえ、男ばかりの軍部だ。

いつ、誰が、どのタイミングで彼女をかつさらってしまうか分かつたものではない。

勿論、鳥に油揚げは渡さない所存だ。

盗もつとする鳥にはことごとく目を光らせ、さりげなく彼女の目に触れぬよう潰してきた。

だから先日、思い切つて彼女に求婚したとき、応えてくれたときは本当に嬉しかった。

頬を染め、目を潤ませて下を向いた彼女を抱きしめなくなる衝動を必死に抑えたものだ。

その艶やかな髪を撫で、頬を、唇をすぐさま我が物にしたいくて堪らなかったが。

仕事中は他の部下達の目もあり、上官としての立場上からも表面に出すことは適わなかったが、ようやく2人きりになれた今日、照れているのかそ知らぬふりをする彼女がまた可愛らしかった。だが、俺が目標捕捉が完了した獲物を逃がすはずがない。

だから彼女の耳に囁いた。

耳朶をねぶるように空気を含ませ、そのさりとした髪に息を吹きかけるように。

吐息で彼女の肩が震えるのが分かり、ひっそりと笑^えんだ。

「月の朝、この部屋の窓辺で申し込んだではないか？」

ひゅつとシズリが息を呑み、身じろぎをした。

この執務室で何年もの年代を重ねたソファがみしり、と軋む音が部屋に響く。

自分の腕^{かいな}の下で、シズリが伏せていた顔を上げた。

その瞳が瞬き、きゅつと閉じられていた唇が開いた。

君に捧ぐ言の葉（前書き）

今回前半は第三者視点で始まります。

君に捧ぐ言の葉

「それでお前、ほんつとうに言っただんだ!!」

笑いすぎて身体をくの字型に折り曲げ、息も絶え絶えになりながらも、ミナトは眼前に座る、士官学校時代からの古い友人にどうにか視線を向けた。

友人は相変わらずの無表情ではあったが、古くからのつきあいでもあるミナトには、その瞳の中で怒り、困惑、そして焦燥がないまぜになっているのが見て取れた。

何事にも頓着せず、よく言えば落ち着いた、悪く言えば感情の起伏に乏しく見える彼がこうもなるのは実に珍しい。

再びこみ上げそうになる笑いを堪え、真面目な表情を顔に貼り付けて相手に向き直る。

・・・その明るい色の瞳には、相変わらず好奇心と笑い、そして少しばかりの同情と罪悪感が浮かんでいたが。

友人は最近部下の少尉にプロポーズしたらしい。

部下に手をつけるけしからん輩でもないでもない、この軍という組織の中においては珍しいくらい、そういう面においてはある意味清廉な彼らしいというか、何というか。

愛人にするでもなく、飲みという名の誘いをかけるでもなく一足飛びにプロポーズに踏み切るあたり、確かにヒューバートらしいなど、得心がいく。

そして彼、ヒューバート・ヴァン・ラーツィヒの今回の行動に一役買っていたのがこのミナト・シノメ中佐、28歳。

なにをかくそう今回のシズリの災難は、ヒューバートの士官学校時代の同期にして親友、そしてシズリの兄でもある彼が面白半分にけしかけたことでもあるのだ。

そもそも、ミナトとヒューバートのつきあいは十数年来にのぼる。

幼き日より机を並べ、同じ釜の飯を食べ、共に同じ戦場で死線をくぐったこともあれば共に潰れるまで酒を酌み交わしたこともある。無表情で生真面目なヒューバートと明るく洒落っ気に溢れて陽気なミナトは一見、水と油のように見えたがその実、妙に気があった。

氷の男、軍人の鑑^{かがみ}、鉄仮面などと囁かれるこの男が、その薄皮を剥けば冷たくもないし感情に乏しいわけでもないことはよく知っている。

その実、表情に出ないだけで友人・部下想いでもあるし、百を考えて一の行動をする慎重さの持ち主でもあることも長年の友人関係の中でよく知っている。

だが、そんな彼がミナト達兄弟の掌中の珠、シズリに恋をしたと知ったときの驚きといったらなかった。

ヒューバート自身のことをよく知っているだけに、ミナトの住む官舎の自室にわざわざ、しかも夜中に彼が訪れ、遠まわしにシズリの話を持ち出した瞬間にぴんときた。

勿論、ミナトとしては自慢の可愛くて優秀な妹だ、大事な妹を誰か

よその男にかつ攫われるのは面白くない。

しかし、どうせいつか誰かに盗られてしまふのならば自分の認めた男がよい、そう思ってしまうのは兄として当然だろう。

その点、ヒューバートは顔、身長、収入、将来性共に文句のつけようがない。

まあ、性格に難がないとは言わないが・・・シズリに惚れていることは明らかだし、愛人を作ったり、浮気に走ることはまずないだろう。

危険の伴う軍人というマイナス面もあるが、その点シズリ自身が兄達の反対を押し切って、軍人になってしまったという以上、その上官という点では好ましいとも言える。

しかし、どんなに完璧な人間だとしても、兄である以上は面白くない。

だから思わずからかってやりたい、という茶目っ気がでたのだ。

ごくたまに癪に障るほどのポーカークフェイスが崩れるのを見てやりたい、というささやかな、ごくかわいらしい悪戯心とちよつとばかりの好奇心だ。

だから彼にミナト達兄弟とシズリの出身地のヒイズルクニに伝わる、伝統的かつ男らしいとされるプロポーズの言葉だと言い聞かせながら、その文言を教えてやったのだ。

内心にやりと黒い微笑^{笑い}を浮かべながら。

*

*

*

その運命の日の朝、私がいつも通り^{シズリ}1番であろう時間に仕出すると、既に上官殿^{ヒューバート}が執務室に座っていた。いつも定刻どおりの行動をされる方なのに珍しい、とやや訝しく思いつながらもそんな日もあることだろう、と丁寧^{シズリ}に朝の挨拶をするといつも通りの簡素な返事が返ってくる。

ただ、顔はいつも通りに無表情ながらもその声にやや陰りがあつたように感じ、シズリは思わずおやつと見返したが、そこにはいつもと変わらず、きりりと背筋を伸ばして執務席に座る上官の姿があつた。

決してだらけた姿勢をとることがなく、文字通り定規が背に入っているかのようなその姿が。

私の気のせいか、とひとりごちながら自席の椅子をひいて座る。ただ、この時間帯はいつも1人なせい^{シズリ}か、朝から上官殿と2人きりというのも何だか居心地が悪く感じる。

そのとき、後で思い返せばある意味不穏な空気を、予感を私は感じ取っていたのかもしれない。

そもそもその日の朝の私は少々、いや、かなりおかしかった。

同期の友人に無理矢理押し付けられた甘ったるい恋愛小説を夜半まで読んでしまったせいかもしれない。

はたまた、ただでさえ重くてつらい2日目だったせいかもしれない。がたり、と椅子を引く気配がしたと思ったら、上官殿の靴音が室内

に響き、背後で窓を開く音がする。

窓から外の庭を眺めながら、上官殿が私にこうおっしゃいました。

「私のために毎朝味噌汁を作ってくれまいか？」

と。

鳴かぬなら。(前書き)

これで冒頭の部分にやっと戻れるかと。

鳴かぬなら。

「月の朝、この部屋の窓辺で申し込んだではないか？」

囁くように、愛撫するように、私の耳に上官殿の言葉がゆっくりと落ちてくる。

その甘く、誘惑するような吐息が私の耳を、首筋を、そして心の臓を震わせる。

その激しく、射るような強い視線が私の背を、瞳を、そして思考をも凍りつかせていく・・・。

シズリは冷たき氷ヒューバートの男の甘く凍りつかせる視線に、その両肩に落とされた腕いましめに抗うべくその唇を開いた。

*

*

*

そもそもその日の朝の私シズリは少々、いや、かなりおかしかった。うん。

ただでさえ重くてつらい2日めで、前夜は下腹部の鈍痛が酷くて眠れず、同期の友人に半ば無理矢理押し付けられた、甘ったるい恋愛小説を夜半まで読んでしまったせいかもしれない。

主人公と恋人の身分差の恋、訪れる試練、運命の悪戯による別れ、そして運命は再び2人を結びつける...といういかにもな展開にもか

かわらず、だあだあと流れる滝のような涙を拭き拭き読みふけってしまった。

気がつけばほとんど睡眠らしい睡眠をとっていないにもかかわらず、身体は規則正しくいつもの起床時刻に起きてしまう。

こんなときは軍隊で培われた、己の規則正しさに感謝しつつも少々恨めしくも思う。

なかなか覚めやらぬ頭をふりふり出仕すれば、そこにおわすは上官殿。

よりによってこんな日に。

ほとんど寝ていないため、寝不足で頭はぼんやり。

昨夜よりはマシになったものの、女性ならではの鈍痛で霞む思考。

恋愛小説で滂沱の涙を流したおかげで腫れぼったく潤んだ瞳。

慌てて走ってきたため、真っ赤になった頬。

上司の前ではあまり晒したくない姿だ。

よりによってこんな状態のときに限って2人とは。

早く誰か来てほしい、いつそ顔でも洗って来ようかしらと、ぼんやりしていたところに上官殿の言葉が耳に入った。

「 毎朝味噌汁

」

・・・しまった！私に話しかけてた！？？

2人しかいないし、拙い、聞いてなかったよ！！

えっと、えっと、味噌汁っておっしゃいましたっけ？

私の故郷のソウルフードですが、ナニカ？

そのお顔は何か意見を期待されてますか！えっと美味しいかってこと???

シズリはさっといつも笑顔顔を顔に貼り付けて窓辺に立つ上官に向き直った。

「　　そうですね。私は好きです」

「　　！・・・そうか・・・」

ヒューバートは窓の外に向けていた顔を身体ごとシズリに向き直った。

普段は穏やかで、黒っぽくも見える群青の瞳が矢のようにシズリの瞳を射抜く。

「・・・ならいい。　　ありがとう　　」

ヒューバートは一度、二度まばたきをし、その瞳を伏せた。

無表情なので、はたから見ればその感情は表情からは読み取れない。ただ、適当に相槌をうつてしまったことにいたたまれず、思わず俯いたシズリはその氷の瞳にゆらめく情熱という名の炎に気づくことはなかった・・・。

*

*

*

「・・・というわけです。申し訳ありません・・・」

シズリは消えいらんばかりの声で詫びた。

私の不注意です、申し訳ありませんと繰り返し、繰り返し。

ヒューバートに両肩を掴まれ、あわやのしかかられんばかり、という微妙な姿勢のままで。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

薄く、引き結ばれたまま何も言わない唇が怖い。

無表情のまま睨めつけてくるかのような、その瞳が怖い。

シズリの両肩に置かれたままのがっちりとした、大きな手がぴくりとも動かないのがまた怖い。

そして、その背筋から陽炎のように立ちのぼるかのように見える、黒いオーラがととても怖ろしい！！

寒くはないはずなのに、シズリの背をつ、と冷たい汗が伝っていく。

静寂と夜の帳が執務室を包み、しんとした空気だけが残っていた。そして、その空気を破ったのはヒューバートであった。

「わかった。要は私の勘違いであった、と」

肩に置かれた手の力が緩み、その引き結ばれた唇がほどける。

空気が和らぎ、先程まであった淫靡な空気も、緊張感もどこかへー

瞬で離散した。

それに気がついたシズリはほっとする反面、落ち着かない心持ちにもなる自分自身に戸惑った。

（どうしてだろう。ほっとしたのに、誤解がとけたのに・・・私・・・？）

何とも面映い気持ちに戸惑いながらも面を上げると、群青の視線と視線がぶつかった。

そう、その瞳が告げるのであった。

再び狩という名の遊戯が始まったことを！

上官殿は仰いました。

「わかった。あのように、君の顔を見つめながら告げる勇気もないまま、遠まわしな申込をしてしまった私にも非がある」

いえいえ、あのとき話を聞いてなかった私が悪かったんです！

勇気がないなど、らしくない言葉と、同じくらい彼らしくない言葉の多さに思わず笑みがこぼれる。

「だから単刀直入に言う。結婚しよう」

はいいい???

シズリはぼかんとしたまま、上官殿を見つめるのみ。

一方、ヒューバートはいつになく饒舌に言葉をつむぐ。

「それだけは君に伝えておきたかった。だが・・・今は返事は不要だ。何よりも回りくどいやり方で君自信を混乱させて悪かったと思う」

そこでいったん言を切り、唇を引き結ぶ。その双眸に強い感情という名の光が灯る。

「だが 覚えておけ。私はやはり

」

肩を掴んでいた手がシズリの腰に回り、ソファに沈みかけていた身体をぐつと抱き起こされた。

「 ますます、きみがほしい

」

柔らかな接吻くちづけが危険な吐息とともに頬ほにふってきた・・・。

舌なめずりする肉食獣のように囁く、危険な言葉を耳に残して。

シズリ・シノメ少尉、21歳。

尊敬していた上官殿は、めげない・負けない・欲しがりますよ、勝つまでね。鳴かぬなら、鳴かせて見せようホトトギスな方だとううやく知りました・・・。

その晩シズリは、狼に襲い掛かれる子羊になる夢を見たのであった
！！

鳴かぬなら。(後書き)

漸く1章終わり、かな。

まさか6話になるとは思いませんでした。

ここからが中佐殿にとっては恋のスタート地点といつていいでしょうかね。

夢よりも君のそばに。(前書き)

ヒューバート、ちょっと落ち込む。ミナト兄貴まさかの再登場です。

夢よりも君のそばに。

波打つ黄金色きんいろの液体を見下ろせば、底に浮かぶ光が見える。
ゆらり、ゆらりと揺れるそれは、まるで黄金の海原のように思える。
泡立つ様はさながら朝の光に水面みなもが溶けていくかのようだ。

ヒューバートはぐつ、と己のグラスを傾けた。

グラスの中で黄金きんいろの液体が揺れてはじける。

かっつと、喉の奥で液体が燃える。

まるで朝焼けを飲んでいるかのようだ。

喉を、臓腑を一瞬で焼けつくすように広がる熱を感じながら、ゆっくりとその瞳を伏せた。

「相変わらずいい飲みっぷりだな」

半ば呆れ、半ば感心しながらミナト・シノノメ中佐は自らのグラスを傾ける。

既に空いたグラスがテーブルにはずらりと並び、やや遠巻きにこちらを眺める、見知った顔達のその目が言っている。

「障らぬ神にたたりなし」「寄るな、触るな、近づくな!」、と。

相変わらず無表情だが、やや無然とした様子で夕刻、ミナトの執務室に現れたヒューバートを半ばひきずるようにして、軍の人間行きつけのこの酒場に連れ出したのだが、失敗だったか。
そう思いつつも、ミナトは黒い嗤いを口の端に浮かべ、ちびりちび

りと自らのグラスの酒をなめるのであった。

もともとミナトもヒューバートも飲めるクチではあるし、無口無表情な彼も酒をふくませれば多少はその口もほぐれる。

だが、その彼がこの半刻ほど、ひたすら黙って酒を煽っている。ペース配分としては明らかに早すぎるピッチだ。

先程執務室で彼がポツポツとつぶやいた話をつなぎあわせて考えると、どうやらシズリへの告白は首尾よくとはいかなかったようだ。今の彼の様子から鑑みるに、なかなかシズリは手強い相手らしい。我が妹ながら罪作りだな、と言葉とは裏腹に嬉しそうな微笑をミナトは浮かべた。

「まずは彼女の好きな菓子を贈ってみた。」

テーブルにはさらなる酒瓶とグラスの列が並ぶ中で、ヒューバートはその上体をゆっくりと起こしながら突如つぶやいた。顔色には出ていないが、明らかにその瞳がすわっている。

どうやらこれまでシズリに試みたアプローチの話聞いてほしいらしい。

いつもはきつちりと留められている漆黒の軍服の襟元が緩められ、白いシャツの襟がのぞいている。

普段にはあるまじきことよ、と向かいに座ったミナトは相手のグラスにさらなる酒を注ぎながら話の続きを促す。

「で、反応はどうだったんだ？」

「机の上に置いておいたら差し入れと思われ、嬉しそうにみんなに配っていた。

俺にも勧めてくれた・・・」

「・・・そうか・・・」

感情を言葉に表すことがあまりない、無口なヒューバートらしいアプローチといえばそうだが、確かに直接渡さなければ、誰から何の意図で贈られたか分からないだろうに。

実際、ミナトの執務机にも知らないうちに誰かの土産の饅頭などが置かれていることがよくある。

・・・ただ、でかい図体の、特に甘いものを好まないこの男がシズリのために菓子注文している様を想像するだけで笑える。

「次はもう少し直接的に訴えてみようと思い、服を贈った」

ミナトは思わずぶつと酒を噴き出した。

それを浴びたヒューバートがこちらを睨み、ハンケチを取り出す。

「お・お前なあ！・・・それっていわゆる・・・『男が女に服を贈るはお前が欲しい』ぬかせてやりたいってアピールか！？
てか、お前はどこのオヤジだ！！」

ヒューバートは黙したままだ。

ミナトは肯定の意と取り、溜息をついた。
自らの妹に深く、深く同情しながら。

「・・・で？どんな服を贈ったんだ？まさか怪しい服とかじゃねー
だろうな？」

もし変なのだったらぶん殴ってやる、とこぶしを固めながら待ち受
けると、予想外の返事が返ってきた。

「
制服」

「は？・・・何の？（ナースの制服とかじゃねーだろうな？）」

「軍」

ミナトは思わず頭を抱えた。

いくらなんでもそれはないだろう。

いや、ある意味マニアックな趣味なのか？？そうなのか、ヒューバ
ート！？

もしそうなら今後の友人として、シズリの兄としての彼への見解に
差し障りがでるな、と思いつつ、恐る恐る友人の顔を見やる。

ヒューバートは肩をすくめながら、グラスを握り締め、再度中身を
あおった。

シルバートロンドの髪がその瞳にかかり、表情は見えない。

「・・・事務作業デスクワーク日用のものが欲しいと言っていたのを耳にしたから、丁度よいかと思ったのだが・・・支給品だと思われてしまったよ
うだ・・・」

・・・彼女用に作らせたものではあつたんだが」

ミナトは眼前の不器用な友人に同情と哀れみの涙を禁じえなかった。
・普通、上司から制服を渡されたら贈物とは思わないだろうに。
素直なシズリのことだ、裏の意図など気づきもしないに違いない。

ミナトが内心頷きながら、この不器用な友人を慰めようとその肩に
手を伸ばしたとき、だが彼はその顔にかかる前髪をさりとはらい
ながら艶然えんぜんと、蠱惑こわくてき的に微笑んだ。

「だが 制服とはいえ、彼女が私の贈った衣服を纏ってい
るというのは 悪くない」

エロ顔エロ発言でたよ、これ!!
ここに危険な生き物がいますよー!
この笑顔、要R指定です!

ミナトも男ではあるし、その気持ちも分らないではない。
ただ、シズリは彼の妹でもある。
可愛い妹をそんな視線で見ているとの発言が、兄として面白いわけ
がない。

ヒューバートは優秀な男だし、いつか義弟になるのもやぶさかでは

ないとは思いつつも、それとこれとは別だ。

ミナトは事務作業日デスクワークのシズリの制服姿を思い出し、机に突っ伏した。それは深めのバックスリットの入った、膝を隠す程度の丈のタイトスカートの制服。

詰襟なので、肌の出る部分などほとんどないにもかかわらず、女性特有の曲線がやや過剰気味なシズリがそれを着ると、妙にあちこちにピッタリしていて・・・むしろ卑猥だ。

「・・・てか、お前！何で服のサイズ知ってんだよ。
あそこまでピッタリということは絶対スリーサイズ目測して発注しただろ！！」

このムツツリが！と叫びながらミナトはガラスの中身をあおり、追加を注文する。

やはりこの友人は・・・思考と行動がよめない。
自らの人選に若干疑問を覚えつつ、更なるガラスを重ねるのであった。

*

*

*

ヒューバートの瞳が焦点を失いがちになり、ややぼんやりとテーブル上を彷徨う。

先程までなにやら煩く喚いていた親友も、今はテーブルの上で気持

ちよさそつに寢息をたてている。

後で送り届けねば店の迷惑になるな、とちらりと頭の端で思いながらも上手く思考がまとまらない。

グラスに残った黄金色きんいろの液体をあおると、自嘲めいた溜息が漏れた。

ざわつく店内には同じ軍服姿もちらほらと見受けられる。

さすがにこの時間帯となると客の数も減り、夕暮れ時ほどの喧騒はない。

ミナトをつれて帰ることを考えると、そろそろ帰ったほうがよさそうだ、と自分の中の冷静な部分が囁く。

だが、まだだ。

まだ足りない。まだこの渴きは癒されない。

むしろ、癒されることがあるのだろうか？

こんなことで。

自嘲的に唇を歪める。

空になったグラスを弄んでいた指が、何かを追い求めるようにテーブルの上を辿る。

求めるのはひとつだけ。

自分でもおかしいと思う。今までこんな思いにかられたことはなかった。

彼女に求婚したことは後悔していない。

むしろこれからどうしてくれようか、とついにほどに心がもえる。

しかし一度、想いが通じたという歓喜を味わった分、それが自らの勘違いであったという気恥ずかしさ、そして落胆の気持ちがないまぜになっているというのも事実だ。

己が言葉足らずなところは自分自身、よく知っている。

こと、そういった情緒的な面において感情をあらわすのが下手だということも。

ぼんやりと思考の波に漂いながらグラスに手を伸ばすと、その手を柔らかな手が遮った。

「帰りますよ？」

今まで心の中に浮かべていた女性の顔が今、眼前に、自らの瞳に映っている。

酒で濁っていた視界にぼんやりと映る彼女は、少し、困ったような微笑を浮かべている。

「
どうしてここに？」

「こちらで飲んでいた同期から連絡を貰いまして。

兄が漬れている、と。・・・中佐殿も少し飲みすぎではありませんか」

ほら帰りますよ、とシズリは呑気に眠るミナトをゆさぶり、その細

い肩にかつぎあげようとする。

彼女が迎えに来てくれた。

それだけで急に視界が明瞭になり、心臓が酒とは違う作用でどくどくと波打つ。

喜びが心の杯に溢れ出しそうだ。

先程までの乾きが、飢えが、嘔のように満たされていく。

「私がかつこう」

口から出てきたのはぶっきらぼうな言葉だけ。

もつと気の利いた言葉が言えない自分が齒痒いが、勘定を済ませ、肩に友人を

背負って店の外に出る。

「っ！中佐殿、私も手伝います！」

小走りに後ろから追いついてくるシズリの声が、涼しい夜風にのり、酒でほてった身体に
気持ちがい。

「私と君の身長差では、私がかついだほうが効率がい。
だが・・・上着だけ持っておいてくれないか？」

軍服の上着を脱ぎ、シャツ姿になって彼女に渡す。
これでもし、ミナトが目を覚まして吐いたとしても、上着だけは助かるだろう。

せっかく彼女と2人なのに（ミナトは勘定にいれない）甘い睦言むつごを囁くでもなく事務的なことしか言えない己が憎らしい。

見れば、彼女は薄いコottonのシャツに膝丈のパンツという簡素な姿で、秋の若干冷たく感じる夜気には心もとなさそうにしている。自分は酒で身体がぬくもっているが、彼女は服装から察するに、部屋をそのままの格好で飛び出してきたらしい。

一旦預けた自らの上着をシズリの手から取り上げる。

不思議そうな表情を浮かべるシズリにそっと着せかけると、何かを言おうとしたので言葉を重ねる。

「私のためにも着ていてほしい。女性
は身体を冷やさないほうがいい」

シズリが一瞬、何か言いいかけたが、こくん、と頷いた。

「ありがとうございます。温
かいです、中佐」

ヒューバートの上着はシズリの身体をすっぽりと覆い、まるで外套のようだ。

自分の上着の中で、頬を染め、うつむくシズリの姿に一瞬理性が飛びそうになるが、背中の邪魔なイキモノのおかげで抱きしめることも適わない。

こういったささやかなことで心が浮き立つ一方で、早くも手の中に閉じ込めたいという、ほの昏い欲望をも感じる。

ただ、今は、彼女と並んで歩く喜びをかみ締めながらゆっくりと歩を進めるのであった。

翌朝、部屋の床に転がったままのミナトを外へ蹴りだした後、上着を羽織ると、それにかすかに残る、シズリの残り香にしばし煩悶するヒューバートではあったが。

夢よりも君のそばに。(後書き)

どうでもよいことですが、ヒューバートさんの飲んでいるお酒はウイスキーっぽいイメージです。

ミナトさんは清酒かな？

2人ともワインだとお上品にデキャンタージュして、ワイングラスでカチーンなんかではなく、コップにガバガバ注いで飲むタイプです。

酒は量があつたらいい、みたいな。どうでもよいイメージですがw

上官殿の気まぐれと踊らされるわたし。(前書き)

今回はシズリのターン。

上官殿の気まぐれと踊らされるわたし。

「どうしよう・・・」

「どうしようもない」

「何か他の方法を・・・」

「他に選択肢はない」

「・・・はい・・・」

シズリは眼前に立つ、背の高い上官殿の背中を見上げながら困惑していた。

彼はいつも通り静かな、感情の読み取れない表情のまま、テキパキと事務手続きをしている。

上官殿の操るペンが、紙の上でサラサラと奏でる音だけがその静かな空間にこだまする。

その表情を見る限り、彼は一切、まったく、毛ほども気にしていないようだ。

それもそうだろう、彼は軍人の鑑^{かがみ}、冷たき氷の男とあだ名されるヒューバート・ヴァン・ラーツイヒ中佐だ。

シズリは些細なことを気に病み、未だに些細なことですぐに心乱る未熟な己を恥じ、軍人としての在り方、姿勢を尊敬する上司のその背にみるのであった。

そう、上官殿と同じ部屋に泊まることなど野営と思えばたいしたことがない！

むしろお前は野宿でもしてると放り出されて然るべきほどだ。
したっぱ

それだけ上官殿は紳士で部下想いなのだから。
うん、雑魚寝と同じ、遠征と同じ、と己に言い聞かせつつ・・・。

*

*

*

そもそも、その日は昨日の上官殿のお言葉によって始まった。

「明日、ローザンヌへ行く」

「は。」

「最近あそこで魔道銃のよい品ができているようだ。・・・君も行くだろう？」

「は、お供いたします。ぜひ同道させて下さい！」

ローザンヌと言えば首都から少し距離があるが、魔道銃に使われる魔鉱石の良質なものが出ることで有名な街だ。

剣よりも魔道銃を好むシズリとしてはかねてから一度は訪問してみたいと思っていた街でもある。

たとえ任務であろうと、行けることには変わらない。

思わず瞳を輝かせるシズリを眺めるヒューバートの表情に変化はない。

とんとん、と机を指で叩きながらこう付け加えた。

群青の瞳が若干怪しげに煌き、シズリに視線を向ける。

「・・・言っておくが、私服で来るように」

「・・・は」

「なお、この件は他言無用で」

ヒューバートは視線をシズリから引き離し、磨きぬかれた執務机に視線を落とす。

恐らく隠密の任務なのだろう、さもありなんと納得し、シズリは「承服いたしました。では、失礼いたします」と、踵を返すのであった。

そんな彼女の後ろ姿を見送りながら、彼が ヒューバートが
こう呟いたのも知らずに。

「・・・黙っておかねばどんな邪魔が入るか分かったものではないからな」

もしここにミナトがいればこう言ったであろう、「悪魔降臨」と。

そして翌朝、シズリは己の不徳の致すところを後悔するのであった。思わず自らの身体を見下ろす。

白いシャツに黒のショートパンツ、膝上までのニーソックスに焦げ茶のブーツといういでたちだ。

私服で来いと言われたから動きやすい実用的な服装で来た、つもりだ。

そのまま目を上げると、若干眉間に皺を寄せたまま、こちらを見つめる上官殿の顔に視線がぶつかる。
私、何か不味いことしました??

軽装すぎます？

これは任務であって、遊びに行くんじゃないぞと思ってるのか？？
こう見えても愛用の魔道銃はシャツの背に隠してあるし、魔符も袖
口に仕込んである。

短剣も胸当ての下に入れてあるのだが。

それとも招待状に「楽な服装で」「軽装で」「平服で」と書かれて
いるからといって、真に受けて適当な服装で行ったならば

「なにあれ」。ばつかじやないの？超KYって感じー」

と後ろ指を指されるという、例のアレだったのでしょうか？

私、実は試されてるとか？？

一方中佐殿はというと、白いシャツに黒のパンツ、黒の短靴といっ
た服装で普段きっちりと襟元まで留められた軍服に比べると若干ラ
フな印象を受ける。

勿論、一見スマートなシャツの下には鋼の筋肉があり、己の絶対不
可侵領域内に彼愛用の魔剣が隠されてはいるのは周知の事実だが。

「イケメン
美男は何を着ていてもイケメン」

こっそりシズリは嘆息しながらひとりごちる。

ヒューバートは何を着ていようが彼本来の魅力でびしっと決まる幸
運な人物だ、たとえば彼が海パン一丁だろうがそれはそれで決まって
しまうに違いない。

かといって見たいか、と言われるとご遠慮したいところではあるが。

そうはいつでも、いつまでもこんなところに突っ立っているわけにもいくまい。

「参りませんか？」

声をかけるとヒューバートはその眉間によせた皺を解き、もとの無表情に戻っていく。

「ああ。．．行こうか」

ローザンヌまでは鉄道で約3時^{とき}ほどだ。

鉄鉱で有名な街なので、配送を目的とする鉄道が街の入口まで延びているのが幸いだ。

今回の任務は足の面では楽だな、と思いつつも上司と列車の座席で顔と顔をつきあわせ続ける3時間というのもなかなかどうして考え物だ。

視線のおき場所に困る。

蓮向かいに座っているのだから、目があってしまうのは仕方がないことではあるが、こつも相手の視線に晒されると、どうにも困ってしまう自分に驚く。

単に緊張するというだけでなく．．．とにかく落ち着かないのだ。

やはり自分の何かが変なのだろうか？

気になる、すぐくすぐく気になる。

心臓がばくばくと脈打ち、目が思わず泳ぐ。

窓から吹き込むさわやかな秋風にシズリの黒髪とヒューバートのシルバーブロン드가さらさらとなびき、流されていく様を目の端に納めながら思わず窓の外に視線をそらせた。

・・・やはり、彼が何を考えているのか私には分からない。
だから、思わず口にしていた。

「・・・あの、私の今日の服装に何か問題でも？」

ヒューバートの濃い群青の目に光がつかぶ。

静かな車内で車輪の軋む音ととんとんと彼が膝を指で叩く音だけが聞こえる。

風になびくシルバーブロンドの前髪の下で目が、薄めの唇が細められ弧を描くのに思わず見とれた。
その唇がつむぐ言葉を聞くまでは。

「・・・あえていうならば、ミニスカートがよかった」

君は脚が綺麗なのだから、と。

・・・やはり、彼が何を考えているのか私には分からない！
ええ、分かりませんとも！！

貴方の瞳に胸騒ぎ

白き炎矢となりて蒼穹に射し、緑の炎地に萌え天を衝き、蒼き
炎その舌もちて海路を開く

まるで詩のようだ。

謡うように言葉を、音を声に出さずに唇にのせ、飴玉のように舌に
転がす。

眼前に広がるその緑に、碧さに圧倒されたから。

シズリは高山列車と駅をつなぐタラップに脚を踏み出しながら、思
わず見仰いだ。

白く燃えるような陽光に輝く鉾山とそれを守るように包み込む深い
緑は美しく、遙か眼下を見下ろせば、彼方に水面の地平線が広がる。
訓練、実験、指令、死線・・・多くの場所に行き、多くの物を見て
きたと思っただ、自分はこの広い世界の一体何処まで行ったのか？
何を見てきたのか？

いや、何所にも行けていないし、何も見てはいない、と改めて思う。

（ 見るべきものは見つ、今はとくとく首を切れ 、か。 ）

思わず故郷の古い物語の若武者の科白が頭に浮かんだ。

こんな自然のうつくしさを前にすると、自分がいかに矮小なものを
感じ、無常観というものがこころを苛む。

ただ、自分はまだ何も見ていないし、知ることまでできていない。
だからまだ死ねないし、死ぬつもりも予定もない。

若武者のように潔く諦めることはできない。

滅びの美よりもただ、この生あるうつくしさをしばし胸に抱えて生きたいとただ乞い、願うのだ。

そのために多くのいのちをこの脚の下に踏み拉^{した}いて。

タラップに乾いた音がこだます。

2人分の足音を響かせて。

2人分？

振り返ると、目の前に星が2つ下りてきた。

「シノノメ少尉？」

背後から覆いかぶさるように、窺うようにこちらを見つめるヒューバートの群青^{ひとみ}の星が。

頬に炎がとるのを感じながらシズリは慌てて向き直った。

「失礼いたしました！・・・少々・・・景色に見とれておりました」

「いや、　　気にするな。・・・確かに美しいな、ここは・・・」
シズリの横に並びながらヒューバートが鉾山を仰ぎ見てつぶやく。

君と来ることができてよかった　　。

そう呟いた彼の言葉は、風に舞い、列車から降りる人々の喧騒に溶けて消えた。

駅から街への道は意外なほどに綺麗に舗装され、滑らかだった。これも輸送経路が命である鉱山の街特有の恵みとも言えるのだろう。先程仰ぎみた自然とは裏腹に、便利に整備された道がアンバランスさを際立たせる。

自然の恵みと魔導石がもたらす繁栄を享受する街 それがここ、ローザンヌだ。

魔導石とは通常の鉱石とは異なり、内にチカラを溜め留めることができる稀有な鉱石だ。

溜めるといだけでなく、伝導にも優れており、魔導銃等の火器、魔導光など、様々なものに利用されている。

もともと、普通の人間にとってはただの鉱石であり、正しく扱うためには精製に調整、研磨等は勿論全て魔導鉱土に魔導技術者など、専門の者の手にかかる必要があるのだが。

ゆえに鉱山の街には自然と腕のよい技術者が集まるようになった。魔導石の精錬者等の石専門の技術者だけでなく、魔導銃の技術者達だ。

これらの者達がローザンヌを支え、繁栄させ、線路をこの鉱山まで呼び寄せたのだから。

シズリは軍人というだけでなく魔導銃の使い手としても興味深い、この由緒ある街に足を踏み入れたことに改めて気を引き締めた。

ハズだった。

慇懃丁寧な給仕が空いたティーカップに手を向け、囁くように問いかける。

「紅茶はお注ぎいたしましたでしょうか、お嬢様？」

嗚呼、何て優雅な仕草。

そして軍のティーパックとは違う、ちゃんとした茶葉の薫りがいたします。

「・・・はあ・・・お願いいたします・・・」

押し合いへし合う軍の食堂とも、酔っ払いがかなりあう飲み屋とも違う、静かな給仕の声。

リネンのクロスのかかったテーブルにはシミ一つ無く。

「デザートはいかがいたしましたしょう、お嬢様？」

いえいえ、もうお腹いっぱいです。
ていうか、むしろ胸いっぱい??

「では彼女には『蕩^{とろ}けて 愛^{ラブ}恋^{リー}心^{ハート}・ローザンヌ風』を。いや、私は結構」

ちよ、中佐！何さらつともものすごい名前のもの注文してるんですか！
え、特製の自家製フォンダンシヨコラ？

焼きたての熱々で中からベリーとシヨコラのソースが！？

・・・まあ・・・はぁ・・・では頂きます・・・。

・私は何でこんな優雅な所で上官殿とご飯をしているのでしょうか。
・。

・・・えーと・・・任務は・・・？

今、何してますか？

私服でおでかけ イケメン上司と遠い街でのんびりお茶してまーす
やっぱり素敵なお庭を眺めながらの美味しいお茶とお菓子って和み
ますネ

・・・じゃないし！！

慌てて立ち上がろうと身を起こすと、薰り高いカップに静かに目を
伏せていたヒューバートの瞳が「もう行くのか？」と問うてくる。
きちんと椅子に座り直しながら、テーブルの向こう側の上官殿に向
かって改めて口を開く。

「そ、そろそろ参りませんか？確か、魔導銃のよいものを作るとい
う、工房の視察でしたよね？」

静かな群青の瞳がこちらに向けられる。

え、と、何でそんなにゆったりしてるんでしょう？

「私もぜひ見てみたいです。願わくば、鉾山の内部もぜひ視察したいものですし！」

思わずたたみかけるように続ける。

上司と二人だからなのか、それとも相手がヒューバートだからなのか、こうして二人でいると　　妙に居心地が悪いというか座り心地のよい籐の椅子に腰掛けているのにもかかわらず、むずむずと、奇妙な感覚が走る。

この眉目秀麗な上官といると、その沈黙がつらく、いたたまれない言葉がなくなるともその瞳が、まなざしが、たまにふ、と笑むその唇が問いかけてくるのだから。

目は口ほどに物を言うというけれど、中佐殿の場合、口の代わりに目で物を言う、だな

なので、ついつい思わず馬鹿なことばかり口に行っている気がする。いつもペースが乱れてしまい、彼の副官として到底至らない点ばかりなのではと。

彼は、そんな自分を一体どう思っているのだろうか？

そして、そんな自分自身に内心腹が立つし、常に泰然自若とし、一分の隙もない上司に対し、己の心身の修練の足りなさを突きつけられているようで焦り、苛立つ。

そんなシズリの内心を分かっているのかいないのか、当のヒューバートはどこ吹く風といった、相変わらずの寡黙ぶりだ。

私ばかりが意識して、慌てているみたい。自意識過剰みたいだ
思わず唇を噛み、下を向く。

足元に広がる緑の芝生が目眩しい。

正午の陽があかるく、まあるく自らを照らしているのを背中と後頭部で感じる。

一瞬その眩しさに、思わず瞳を閉じてしまう。

瞳を閉じると、自身の内側で自己嫌悪や何か 自分自身でもよく分からない名状しがたい感情が渦巻くのを感じ、思わずその顔を伏せた。

だが 足元に人影がさすのを感じ

その瞳を開く。

目の前に差し出されたその手に。

思わず見開いた目が、次に丸くなる。

途惑ったのは一瞬だけ。

大きく筋張ったその手 普段は白手に包まれているそれ

をおずおずと掴み、立ち上がると その手は包み込むようで、彼の持つ氷の通り名に

そぐわず、温か^{あたたか}でさえあった。

そして、この手に感じる掌は剣^{つるぎ}を扱^{つか}うせいで皮が硬く厚ぼったくな

り、タコさえできていることにシズリは不思議と安心した。

ああ、この手は私と同じだと。

そして温かいのだと。

その群青の瞳が誘うように、なだめるようにまたたき、微笑んだ、気がした。

貴方の瞳に胸騒ぎ（後書き）

何気にヒューバートのペースに巻き込まれてるシズリの図、と。
ヒューバート氏は無表情仮面の下で、上司部下の粹など

取っ払った意味で距離を縮める気マンマンですが、シズリ嬢は
そんなことは露知らず、尊敬する上官との差を真面目に考えてます

ww

つないだその手を離さずに。

こくりと唾を嚥下すると、その音が乾いた空気に思わぬほどに響いた気がし、その泡立つ心の波をさらにかきたてる。

相手に気づかれぬよう、こころを押し殺しつつ、視線の端にその端正な横顔を映してみるが、その表情には動揺は勿論のこと、曇りも変化も、何の感情の兆しすらも表れない。

シズリが乱るる心を面^{おもて}に、所作^{しよさく}にだすまいとこれだけ四苦八苦しているというのに。

それをずるい、と思ってしまうのはおかしいのだろうか。

中佐殿はずるい、と。

いつでも涼しい表情で、思いもがけないことを言ったり行動したり。それに振り回されるこちらの身にもなってほしいものだ。

心臓が保ちません、全く。

そう内心で嘆息し、相変わらずばくばくと震える心の臓の音を抑えようとしつつ、今度は右下にちらりと視線を走らせる。

普段なら中佐殿と同じく、黒の軍服と白手に包まれているはずの自らのその右手に。

その手は今なお、何故か中佐の左手に包まれたままなのだから。

先程の喫茶室で差し出された手、その手をとったはいいいけれど、つなぎっぱなしってどうなんでしょう？

軍人らしく皮が硬く厚くなった掌、ごつごつとした大きな指、剣でできたたこ、この温かで、男らしい彼の手がシズリの右の掌を包んでいる。

その掌の温もりが今度はシズリの頬に燃え移ったかのように熱く、燃えるようだ。

そんなシズリの内心なども気づきもせず、ヒューバートはまるで・
・まるで何一つ変わったことなどないかのように、しごく当然のことかのようにシズリの手を握りしめたまま歩を進めている。

中佐殿はずい、と改めて思う。

これでは手を離してください、と言えないじゃないですか。
そしてシズリ自身、本当に離してほしいのかどうか、自分でもよくわからないのであった。

*

*

*

喫茶室より数ブロックさらに街の奥に進み、いくつかの角を曲がると、この街の繁栄の要のかなめの一つでもある、マイスター・エリア工芸地域が広がる。

空の青と鉾山の緑に対比するかのように造られた、赤で彩られた街並みは鮮やかで、技術者の街らしい喧噪と賑わいに満ち溢れる。

各工房や工房運営による店舗の前の歩道には白い石畳が敷かれ、その工房の名を意匠としたマークが扉に彫られ、鮮やかな色でもって描かれたプレートを軒下に下げている。

この街の人々のモットーは実に簡単だ。

「よく働き、よく食べ、よく寝ろ」

恵まれた土地というだけでなく、人々のこの健全なる精神が繁栄を生み出している、と言われる所以とも言えよう。

シズリは初めて訪れるこの街並みの風景を楽しんでいた。

駅からの景色は筆舌に表しがたい美しさではあったが、この人々の活気ある様子にも、戦場と軍に身を投じた人間としては素直に心が和む。

珍しい工芸品や細工、被服店に染物、毛織物の店など様々な品に溢れる店を興味深く眺めていると、そこはシズリもやはり年若い女性、知らず知らず心が躍るのを感じる。

そのとき、未だつながれたヒューバートの手にくん、と手を引かれ、見ると彼は

ある店舗のショーウィンドウにじつ々と視線を向けている。

・・・嫌なものをを感じる。

見ないほうが幸せかもしれない。

でも見ないと後で後悔しそうだ・・・。

上官殿が注意を払うことは部下として当然知っておくこと、これ即ち正しい副官としての役目、任務だ。

うん、そうだ、そうに違いない！！

括目せよ、この目は節穴ではないはず！

シンプルながらも凝ったデザインのワンピース（ミニスカート。ここ重要！）

薄いラベンダーブルーの身頃にぴったりとしたデザインで、きゅっと絞られたウエストからヒップにかけて身体のラインに沿うようにスカートが広がり、裾の部分だけフレアーなシルエットを描いている。

（繰り返すがミニスカート。）

スカートの裾部分はティード上に生地が重ねられ、細かいプリーツの襞で飾られた、一見シンプルながらも、凝ったデザインのワンピースだ。

（何度も言うが、ミニスカート。）

まあ、とっても素敵なワンピース！

上官殿にとっても似合うかと思えますわ

その輝くシルバーブロンドにラベンダーブルーがとっても素敵。

・・・じゃないし！！

つながれたままの手をこれ幸い、馬を引くように、むずかる飼い犬を引っ立てるようにヒューバートを引きずりながら、ずんずんと道を進むシズリであった。

つないだその手を離さずに。(後書き)

タイトルの意味、ご理解いただけましたでしょうかw
前々回だったか(自分で忘れてる・・・)ミニスカ云々の話を書いたとき

予想外にミニスカへの食いつきがよかったので出してみました。

そして予定通りに全然話が進みません・・・。

少尉殿は・・・見た！！

石でできた床には多くの機械が並び、油と金属、そして魔法反応による独特の鼻につんとくる、今となれば嗅ぎ慣れた匂いがその工房には漂っていた。

窓は開いているが、熱気と匂いはすでに室内に染みつき、しみ込んだその独特な空気が何年もの年月をその工房で起きた数々の事柄を共有しているかのようだ。

まるでしつくりと馴染んだ毛布のように、やわらかく包みこむかのように。

しかし、精密かつ繊細な技巧と高度な技術を要する魔導銃というものを扱うだけに室内は埃の一片すら舞わぬように清潔に整えられている。

なぜなら、この工房こそが彼ら技術者の城であり、守るべき皆であり、財産なのだから。

その工房の入口に足を踏み出したシズリは思わず深い吐息をつく。

本部で魔導実験や武器の開発に携わることはあるが、実際に魔導銃の工房に足を踏み入れるのは初めてだ。

期待に高鳴り、ときめく胸の音が自分自身、やけに響いて聞こえる。

単に自身が魔導銃の使い手というだけでなく、こういった繊細な技術を実際にこの目で見てみたいという純粋な興味と好奇心と知識欲によるものだ。

すべてを正確かつ的確に捉え、確認することを賡けられた軍人氣質というよりも、元からの性格なのだと自分では思う。

そしてそんな自分も嫌いではない。
単なる軍の人形ではない、個としての自分なのだから。

先に室内で工房の人間と会話をしているヒューバートに続くべく、
ドアの向こうへと足を踏み出し・・・そこで止まった。
いや、止まったというには語弊がある。
固まった、だ。

ぎぎぎ、と目線を下に向ける。
視界に入るはやや陽に焼けた二つの手。
手はあるだろう、街なのだから。当然人も大勢いる。

ただ、いかんせん、その手の置き場所に問題がある。
そのけしからん手は、シズリの身体の中で一番やわらかでポリウー
ムのある箇所、人よりやや大きめのそれをわきわきと揉んでいる。

「うーん、Eの65ってどこ？姉ちゃん、着痩せするタイプなんだ
ね。」

首だけで振り返ると、20？ほど下から見上げるように、その幼い
顔はにつこりと邪気のない笑顔を浮かべて見せた。
11・2歳くらいか？
赤みのかった、くしゃくしゃだが艶のある髪に草色の瞳が子鬼のよ
うに悪戯っぽい表情をたたえている。

・・・子供か。

今さら子供の悪ふざけに怒る気もしない。

むしろ街中で油断したとはいえ、いくら殺気がなかったとはいえ、子供ごときに後ろを取られた己に腹が立つ。

シズリは気を抜いた己を恥じ・・・そして、不届きな悪戯をする子供の手を外すべく、前に向き直りかけ・・・漂うその殺気に再び固まった。

こんな冷たい、研ぎ澄まされた刃のような殺気を出せる人は一人しか知らない。

そう、例のあの^人だ。

振り返りたくない・・・振り返れば・・・あの人がいる。

しかし己が^{あの}意志に反し、殺気には条件反射で振り向いてしまう、軍人という職業の悲しい^{さが}性。

そして少尉は・・・見てはいけないものを・・・見た。

普段無表情でにこりともしない彼の^{ほほえみ}微笑を。

上官殿から突然の求愛を受けた、あの日あの晩以来見ていないはずの^{ほほえみ}微笑を！

ただその微笑はあの晩の蕩かすような蠱惑的な^{もの}微笑ではなく、その目が、その唇がその美しい顔と表情を残酷に、酷薄に裏切る。凍れる薔薇のように美しく、剣の切っ先のように鋭く・・・。

先程までの好奇心によるときめきが嘘のように、胸が別の意味でさ
らなる早鐘を打ち始める。

冷たいものがじんわりと這い登るような感覚に背筋が震える。

じよ、上官殿が微笑^{わら}ってるうううう！！

でも目！

その目、ぜんっぜん笑ってませんから！！

しかも！

貴方の頭上で旋回してるのって貴方の魔刀「天冰^{あめこおり}」でしょうが！

いきなり印も結ばず、媒介もなしに喚びだすってどれだけ凄^{すご}いんですか！

しかも、ここ室内ですから！ちょ、冷氣吹き出してますよ、それ！！

75

ヒューバートの魔刀から吹き出す冷氣が工房内を白い炎のように烟^{けむ}
らせ、埋め尽くしていく。

主の周りをゆらり、ゆらりと旋回しながら宙に漂うその刀身は白銀^{しろがね}
に煌めき、その恐ろしいまでの美しさゆえに、工房の人々の表情を
恐怖に歪ませ、空気を凍りつかせる。

一方、当の本人は自らの愛刀には気にも留めず、黙したまま真っ直
ぐに立っている。

再び無表情となったその顔には感情の揺らめきも心の動きすらも見
られない。

その右手が顔まで上がり、ゆっくりと自らの唇をなぞった後に顎の

下にあてられた。

その眼光は決して少年から外さぬままに。

彼はその群青の凍れる瞳を薄く細め、再びその笑顔を口の端に浮かべてみせた。

滴水てきすいてきとつ嫡凍の如き空気を纏ったまま、怯え戦慄わななきながらシズリの背にしがみ付く少年を毒の視線で睥睨へいげいする。

「殺すぞ、小僧ガキ？」

地を這うような、その一言が凍れる空気に裂ヒビをきざんだ

少尉殿は・・・見た！！（後書き）

上官殿・・・心せまつ！

ところで、上官殿の刀の名は「雨氷^{あめこおり}」という
自然現象から取りました。

だから「氷のヒューバート」なんです。
単に無表情だからというわけではなく。

色は匂へど 散りぬるを（前書き）

戦闘および流血描写があります。

苦手な方、15歳未満の方はリターンでお願いします。

色は匂へど 散りぬるを

・・・何がどうしてこうなったのか・・・。

諸行無常の響きあり、と人生という名の鐘の音が頭に響いている気がする。

そもそもここ最近、上官殿のありえない姿ばかり目にしている気がする。

近寄りがたく 侵しがたい鉄壁、氷の男。

そんな風に思っていたというのに。

一遍の感情すら滅多に顕わにしない、その上司が思わず魔刀を喚ぶほど激昂する姿を目の当たりにすることなど・・・まず、ありえない。

しかも、たかが部下が胸を子供に揉まれたぐらいで。

こんなことで怒るなど如何なものか、と自分の中の冷静な部分が囁くが、あれほど怒ったのが自分のため、ということが甘やかな甘美として、胸の内側をこそばゆくもくすぐる。

座して沙汰を待つといった風情のヒューバートと少年 クリスピンというらしい を前にしてシズリは溜息をついた。

まあ、いい。

怪我人が出たわけでも工房に被害が出たわけでもない。

幸い、工房の職人達はいきなり現れて大騒ぎを始めた彼らを快く許してくれた。

尤も、ヒューバートの魔刀？天冰^{あめこおり}？に興味津々でぜひ検分したい、というのが本音のようだが。

それもそうだ。

いきなり空中に刀が出てきたら誰もが驚く。

まさによばれて飛び出てジャジャジャジャーン！！だ。

しかもただの刀ではない、

炎のように白くけふる冷気を発する魔刀だ。

滅多にお目にかかれる代物ではない。

ここは上官殿に自分のケツは自分で拭いて頂こうではないか。

Yes！シズリはどんどんやさぐれつつあった。

結果、沙汰は降りた。

シズリが下すまでもなく、工房の職人達によって。

他でもない工房長の息子、クリスピン少年の提案によって。

1：クリスピンはシズリに坑道の案内をすること

2：ヒューバートは工房の職人達に魔刀についての即席講義をすること

もう一度あの魔刀を出せ、触らせる、構造を教えろとやんややんやと次から次へと山となして己を取り囲み、詰めかける職人達に無表情のままで固まるヒューバート、ただただ啞然とするシズリ、誰のせいかとどこ吹く風で素知らぬふりを決め込み、何やら笑顔のクリスピン少年。

シルバードロンドの美貌の青年のシャツを掴もうと、我先にとにじり寄り、詰め寄るむくつけき筋肉隆々の男達の集団の輪。
それがどんどんヒューバートへの包囲網を縮めていく様は別の意味で恐ろしく、凄惨さを極めた……。

だが、そこは軍人、氷の男とも呼ばれしヒューバート。

己が内に秘めし刃、いわば身体の一部とも言える魔刀をおいそれと人に触らせるわけがない。

第一、天氷がそれを認めるはずもない。

ということ、魔刀についての即席講義を行う、ということに相成ったわけだ。

その間シズリは当初の希望でもあった鉱山見学にクリスピン少年の案内で行くということ。

秋空は雲ひとつなく蒼く、風は涼しげに爽やかに澄み、工房から広がる喧噪が窓の外に吹く風に乗ってまた空へと還るのであった。

＊

＊

＊

ざっ ざっ ざっ

長靴ちようつかの下で砂利がはぜる。

白黒しろくろの石が入り混じる隙間から顔を出す、柔らかな草ごと飛んでしまえとばかりに踏み分け、ただただその両の脚を機械的に交互に動かし、歩を進めた。

昼下がりの午睡を誘うかのように陽はやや雲の隙間に陰り、鉾山への入口で一旦歩を止めたシズリの艶やかで長い黒髪と、シャツの白さも目に鮮やかにコントラストを描くその背をやわらかに照らす。

「姉ちゃんってばよ」

はるか後方より息を弾ませ、やや情けない様を呈して追いかける、クリスピン少年の声だけが漸くその背に追いつく。

「は・はええよ、足。やっぱ怒ってんのかよ？」

漸くたどりつき、背を丸めてぜえぜえと息をつきながらも、目線だけようつやとシズリに向けて息を整える。

一方当のシズリは息ひとつ乱さず、涼しい表情でクリスピンを見下

ろしている。

その瞳はむしろ穏やかに碧く、静かな湖面のように落ち着いたまま
で、浮かぶ表情すらない。

いくら歩道として均ならされたとはいえ、この街の住人でも徒歩ではき
つい、この鉾山への厳しい坂道を歩を休めることなく、走ったわけ
でもないのにあつという間にはるか彼方へクリスピンを引き離れた
シズリの驚異的な
推進力に少年はただただ、目を丸くするばかりだった。

しばしばうっとしてしまった後に慌てて追いかけ・・・結果、この
様ザマだ。

これではどちらが鉾山の街の住人かわかったものではない。

さイケメンっきの美形の兄ちゃんもタダ者モンじゃないけど、姉ちゃんも
一フツウ般人じゃない

今さらながらも悟るクリスピン少年であった。

「ごめんなさいね」

シズリの唇が開き、ぽつり、と謝罪の言葉が転がり落ちた。
考え事してたの、貴方のことを忘れてたわ、と。

クリスピンは再び目を丸くした。

なんだ姉ちゃん、兄ちゃんのことを心配なんだ。

そばにいらなくて不安なんだ……。恋人同士、には見えないけれど。

兄ちゃん、脈はなくなはないかもね、とかき乱した張本人ながらもクリスピン少年は心の中でにんまりするのであった。

その路はほの暗く、手にした魔燈火がぼんやりと辺りを照らすのみだった。

だが、ある地点を超え小さな、通常ではまず気づかない、横穴のような路を抜けて進むとさわさわという何か、ざわめきのような音と青く光る鉱石でできた鍾乳洞達がシズリを迎えた。

お詫びにとっておきの場所に案内するよ、と言うクリスピン少年の言にのり、魔燈火が規則正しく並べられた通常ルートではなく、少年の先導する路を進んだがこの美しさには圧倒される。

まるで……。まるで青い色をした緑柱石のようだ。

どうやらさわさわというこの音は鍾乳洞の中に含まれている、青く光る鉱石から発せられているらしい。

そっと耳を柱に持たせかけてみる。

ざわめきが増した、気がした。

「すっげーだろ？ここ、俺のとおっておきなんだ。俺も偶然見つけたんだけどさ」

クリスピンが得意そうにその子鬼のような顔をくしゃくしゃにして笑う。

その笑顔にシズリもつられて微笑む。

「そうね・・・とても綺麗だわ。ありがとう。こんな風に光る鉱石^{いし}は初めて見るもの。

・・・でも、いいの？私なんか連れてきて。貴方にも特別な場所だつたんじゃないの？」

「いいんだよ、姉ちゃんには悪いことしたし。

どうせなら綺麗な姉ちゃんに綺麗なものを見せてあげたかったし」

少年の無邪気な言に思わず笑顔になる。

この青い光は恐らく 魔導の光 。

どこから溜められたのか、魔導の光が水のようにこの鉱石達に溜められ、溢れている。

自然の力でこうも綺麗に結晶化し、固められているのは初めて目にする。

一体どういう原理なのか 膝をつき、掌で鉱石の光を辿りながら自らの内側に隠した魔力を掌に集めて撫でてみる。

その瞬間、かっつと鉱石から光が溢れ 背後から響いた音が耳に届くと同時に咄嗟にクリスピンを胸に引っ掴んで横っ飛びに転がった！

間一髪！

シズリとクリスピンが立っていた場所に突き立てられた剣がざらりと青の光の中にその刀身を煌めかしていた。

シズリは咄嗟にクリスピンを背に庇い、瞬時に剣の飛んできた方向に目を走らせる。

・・・いち、に・・・よん、か。

徽章はなし・・・他国の暗部か？それとも？

闇の中からゆらり、ゆらり、と陽炎のように現れたのは4人の覆面の男達。

シズリの背中でクリスピンが恐怖と威嚇の悲鳴を上げる音が坑内に響き渡った。

「な・なんだよ、こいつ等！シズリ姉ちゃん、逃げよう！！」

その瞬間、4人のうち3人の男が同時に襲い掛かった。

だがシズリが体勢を整えるほうが素早かった。

クリスピンを背後に突き飛ばし、瞬時に低く屈み、掌を地面につけ、思い切り足払いで薙ぎ払う。

よろめいた1人に手刀を叩きこみ、1人は裏拳で顎ごと砕く。

その流れで最後の1人に膝蹴りを食らわせ、身体を半分に折りながらよろけた所に両のこぶしを固めて後頭部から脳天めがけて地面に

叩きつけた。

あっという間の出来事であった。
どうつと3人の男達が倒れ伏し、最後の1人が剣を引き抜いてシズリに斬りつけたのも。

ざっつ

避けきれなかった刃がシズリの肩をかする。

咄嗟にシズリが投げた仕込みナイフが男の頬をかすめ、覆面に切れ目が入る。

猫のように背後に跳び退り、魔導銃を構えながら間合いを取ったシズリに再度男が剣を構える。

男の持つ剣より青い焰が細く、煙のように立ち上るのが目に入り、思わずシズリの背筋に衝撃と恐怖が走る。

魔剣？

でもまさか！こんな・・・こんな所で！

「女・・・よく避けたな・・・名は？」

半ば切れた覆面の下から意外なほどに涼やかな、若さの感じられる声が問いかけてくる。

その声には一点の感情も感じられず、無機質な機械のようなざらり

とした冷たさがシズリに凍るような恐怖感を与えた。

銃では・・魔導銃では魔剣には圧倒的に不利だ。
特にこんな狭い、視界の悪い場所では。しかも、クリスピンも、
いる・・・。

肩にかすった傷からどろりと流れる生あたたかい血が掌まで伝わり、
指を濡らす。

背中に流れる汗が冷たく、背筋を凍らす。

そして、そのシズリを見つめる2つの眼から放たれる光が・・・。

だが、その感情に打ち勝つように、強気な言葉を吐き捨てる。

「顔も見せぬ奴に名乗る名なぞない！」

「ほう、これでもか？」

細い煙のように、陽炎のように剣から立ち上っていた青い焰がいつ
の間にやら辺りをゆらゆらと包んでいる。

青い焰は魔の焰。

魔気を含んだ気は訓練を積んでいない者には・・・毒となる。
クリスピン！！

先程まであれほど悲鳴を上げていた少年の・・・気配がない！！

「この焰・・・子供には毒であろうな？」

御前、^{おまえ}その強さ、気に入った。俺とともに来ぬか？」

冷たく脅すように、怪しく優しく誘うように、響く声が青い焰と共にシズリを包む。

幻惑するような双眸が煙る空気に光を放つ。

脳髓が痺れ、眩暈がする。

だめだ、黙れ！聴いてはいけない、惑わされるな、魔に吞まれるな。でも、このままではクリスピンが・・・でも！！

足元がぐらぐらと震え、大地が、天が揺れる。

しまった、と思った時には指先が痺れ、青い煙が体中に纏いつく感触が襲う。

魔導銃を構えたはずの手が震え・・・下に落ちた。

銃が地面に転がる音が乾いた床に響き、シズリの耳には絶望の音として届いた。

ラーツイヒ中佐、ヒューバート中佐・・・ごめんなさい・・・

身体が震え、ゆらめく青い焰の煙の中膝をつく。

男の瞳が細められる・・・捕えた、と。

あの人がいれば・・・
ヒューバート中佐・・・

せめて、せめて水が・・・液体があれば・・・そうだ！

震える指にありったけの力を籠め、ナイフを一気に上から下におろし、掌から肘にかけて切りつける。

紅^{あか}が鮮やかに飛び散った。

シズリ自身の紅^{あか}が。

シャツに仕込んであった魔符をシャツごと破りとりと、それが紅^{あか}く朱^{あけ}に染まる。

震える唇に吐息を込めて、思いを言に籠め、朦朧とする意識の中で詞^{ことば}を紡ぐ。

「　　いろはにほへど　ちりぬるを　わかよたれそ　つねならむ
うゐのおくやま　けふこえて　　」

刹那。

魔符から光が挿し、円となり　　白い焰のような冷気が青い焰を蹴散らすように包む

その光と白い冷気の中に浮かび上がる人影。

低い、低い、背筋を甘く蕩かす、その懐かしい声が最後の詞^{ことば}を引き取る。

「 浅き夢見じ 酔ひもせず 」

光にシルバ―ブロンドの髪が、白銀しろがねの刀身が、群青の瞳が
煌めいた

色は匂へど 散りぬるを（後書き）

今回はコメディではなくシリアスで。

どうしても最後の場面までたどり着きたかったので長くなってしまいました。

紅と白銀と漆黒と。(前書き)

今回も戦闘シーンあります。。。戦いの決着！

紅と白銀と漆黒と。

ああ、紅^{あか}が見える……。。

もう見慣れたはずの色なのに。

なのに、こんなにも鮮やかに紅く、燃えるように熱い……。。

掌から腕にかけて滴り落ちる紅い雫がシズリの白い手とシャツを染めていく。

紅よ、白^{あけ}を朱に染めるがいい。

焰よ、この身の内を熱く燃やすがいい。

そして、朱に染めきれないほどに白く、焰も凍るほどに冷たい彼を此方^{こなた}へ！！

万感の想いを込めて詞^{ことば}をつむぐ。

ただ彼の名を 心の奥底から彼を喚んだ

。

それだけが、今できる、全てだったから。

「……己が血と魔力を媒介に氷の魔刀とその主^{あるじ}を喚んだか」

覆面の切れ端から覗く双眸が、立ち塞がるヒューバートを一瞥した後、

荒い息をつくシズリに、いかにも興を引かれたといった視線を送る。朱に染まったシャツが汗に色づいた白い肌と黒い髪とのコントラス

トを際立て、
碧く潤みながらも光を失わない強い瞳と相まって、儚くも強く、
清らにも淫らにも映った・・・。

覆面の下で男の眉が弧を描き、瞳が細められる。

黒衣の男の揺れる感情を表すかのように、一旦蹴散らされた青い焰
が野火のように

じりじりと、踊るように再び湧き立ち始める。

挑発するように、誘うように跳ね、踊り、円となり、また弾けた。

だが、再びヒューバートの冷気が白い焰のように広がり、青の焰と
煙を

蹴散らし拡散させた。

まるで押さえつけ、攻め立てるように。

己が身の内を守るように。

坑内の魔鉱石を含む壁がその魔力に煽られるようにざわざわと音を
立て、

風に凪ぐ草のような音を立てて震え、軋み始める。

青と白が壁に映り、煌めく。

一振りの魔剣と魔刀。

その相反する、大きな魔力が誘い水となり、坑内に潜む魔鉱石全て
に共鳴を

起こし始めているのだから、この狭い坑内では場自体が長くは保たないだろう。

暴走すれば、ひとたまりもない。

言葉に出さずとも全員がそれを瞬時に理解していた。

ヒューバートの群青の瞳が、黒衣の男を見据える。

男の覆面の切れ端に隠れた瞳の色は分らない。

ただ、鋭く光る双眸がその強さを示していた。

お互いの間には未だ言葉はない。

視線だけが交差するその沈黙の中、白の冷氣と青の焰だけが争うように

周囲を包み・・・そして、弾けた。

ヒューバートの構えが守り払いの型から、魔刀を顔の横で構える一の太刀、

突き払いの構えへとゆっくりと円を描くように流れた。

黒衣の男も身体の重心を低く下げ、魔剣を両手に持ち替え、切っ先を地面と

平行に構える、守よりも攻に徹する型に入る。

あれほど渦巻いていた冷氣も、焰も、今はもうない。

あるのは沈黙と殺気、お互いの息遣いのみ。

どれほどこうしていたのだろう

1分か、10分か、はた

また1時間か。
睨み合い、構えたままの姿勢の2人は微動だにしない。

そして、瞬間は突然、動き始めた

ぎいんっつ

魔刀と魔剣がぶつかる音が響く。
二振りの白銀しろがねが煌めき、銀髪と黒衣が巻き起こる疾風かぜにたなびく！
白い冷氣と青く冷たい焰が2人のまわりに巻き起こり、渦巻き、ぶ
つかりあい、爆ぜた！

青い焰と白い焰が火花を散らし、凧いだ後に再び2本の白銀がぶつ
かり合う。

弧を描くように滑らかに強い剣さばきで、鋭く、煌めく凍れる魔刀。
疾風かぜのように迅く、激しい荒々しさで、吹き荒れる魔剣。

舞うように、円を描くように、打ち付け、ぶつかり合い、また弾け
る！

うごめく力と魔力に魔鉱石達がさらなる反応を起こし、青く、蒼く
光を

放つ様はまるで・・・さながら、螢火の浮かぶ夜の闇のようだ。
闇の中に煌めくは光、うごめくは力。

そして、また 嵐が巻き起こる。

シズリはその場にぺたんと座り込み、夢現のように呆けたようにただ、

見つめるしかできなかった。

腕と肩からどくどくと流れる血も、痛みすらも忘れて。

ただ・・・その光景を見つめることしかできなかった・・・。

やがて…

…。

夢は醒めにけり…、見えつる夢は醒めにけり

氷の魔刀がぴたり、と動きを止めた。

黒衣の男の喉元で。

刃の切っ先を向けたまま。

涙のように、雨露のように、一滴の雫が露となり刀身を伝わり・・・
地面へと落ちていった。

一滴の落ちる、その音だけが、坑内に響く・・・。

魔剣の男が呟いた。

「？氷のヒューバート・ヴァン・ラーツィヒ中佐？か…。見事だ。

その強さ・・噂に違^{たが}いなし、か

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そのとき、静寂を別の男の声が破った。

「動くな！小僧を殺すぞ！」

先程シズリに気絶させられたはずの1人が、いつの間にかクリスピンを抱え、

その喉元に剣を向けている。

太い、筋肉の浮き上がったその腕は、クリスピンの細い首など一瞬で容易く

折ることができることを示している。

しまった　シズリは唇を血がにじむほどに噛み締め、己が不覚と

不注意を呪った。

クリスピンは魔剣の焰に中てられたのか、ぐったりと意識を失ったままいる。

ぴくぴくと震える睫毛と時折苦しそうに呻くその声が、彼の命の灯が未だ

消えていないことを示してはいるが、この状態が子供にとってよいはずがない。

シズリは思わず叫んでいた。

「その子を離さない、捕える者が必要ならば私にするがいい！」

ヒューバートの声が追いかける。

「やめろ、シノノメ少尉！」

「いいだろう。男、お前はその刀を下ろし、小僧を受け取るがいい」

ヒューバートは黒衣の男の喉元から刀を下げ　唇を噛み締めながら、苦悶の表情を浮かべてシズリに一瞥を投げかけた。

男がクリスピンを抱えたまま、その手をシズリへと伸ばす。

一目で軍人と分かる、戦いに慣れ、血に染まった手だ。

その手がシズリの無事な方の腕をつかみ、身体を引き寄せた後にクリスピンをヒューバートの方へと突き飛ばす。

ヒューバートがクリスピンを抱き止めるのを認めながら、男に腕ごと肩を掴まれながら、シズリはなぜか、同じ男で同じ血に染まりし軍人ながらも、全く違う手のことを考えていた。

マメでこつこつと硬くとも優しく、温かく包みこむように掌を握りしめてくれた、大きな温かいあの手の感触を。

男が乱暴にシズリの両手を拘束したため、腕に走った痛み思わず

顔を歪める。

ぼたり、ぼたり、と更なる紅い滴^{しずく}が床に垂れ、不規則な模様が床に描かれた。

ヒューバートが息を呑み、その群青の瞳に怒りの焰が揺らめく。

場に冷たく、巨大な魔力が沸き起こり、床を、天井を震わしたが・
・彼は懸命にそれを抑えた。

シズリがいるのだから。

シズリを拘束したまま男が魔剣の男に叫ぶ。

「少佐、今なら俺がこの女を掴まえてます。だから

!!」

そのまま、男は言葉が続けることはできなかった。

その胸を、肩を、先程までヒューバートと対峙していたはずの黒衣の男の剣が切り裂いたのだから。

「・・・下衆^{げす}が。・・・無粋な真似を・・・」

ただ一言、吐き捨てながら。

シズリを捉えていた男がどつと床に倒れ伏す。

その瞬間を、シズリはまるでスローモーションで見るかのように・

・見ていた。

黒衣の男の破れた覆面が、坑内に吹き込んだ一迅の風に舞い飛ぶ。

男は美しい顔をしていた。

漆黒の髪が風になびき、露わになったその眼が
闇のように濃く深く、冷たい黒の瞳がシズリの瞳を捉える。

男が血にまみれた剣を片手にシズリに近づく。

シズリはただ、その闇色の瞳を見ていた。

その瞳から目をそらすことができずに。

恐怖なのか、それとも死への諦めか？

「死神ってこんな顔をしてるのだろうか・・・」

驚くほど心が冷えている自分に驚く。

遠くでヒューバートが呼ぶ声がする。

その声を耳に・・・胸に心に大切にたたむように、目を閉じた。

おとがい

頭にそつと手をかけられる感触に思わず目を開き・・・そのまま、見開いた。

闇色の瞳が、シズリの碧い瞳を見つめている。
驚くほど近くで。

そして・・・その唇が静かにシズリのそれに重ねられた。

紅と白銀と漆黒と。(後書き)

コメディのはずなのに何だかシリアス風味になっててすみません！
最後えらいことになってますし・・・。

上げて落とす、落として投げる、とww

次話こそ皆様ご期待&ご要望のシーンが出せれば、と思います！

黒い悪魔が言うことには。(前書き)

話の展開上、シリアス風味？です・・・

黒い悪魔が言うことにや。

ああ、闇の、夜の色だ・・・。

霞む意識と腕の痛みの中、ぼんやりとその色を見つめていた。
痺れる身体に、血の滴る腕に指一本動かせないまま、その闇色の瞳に縛られる。

半ば諦めのような、どこか他人事のように冷える心で自分自身を見つめる自分がいる。
だから夢現のまま・・・その瞳をゆっくりと閉じた。

柔らかで 冷たいそれが唇に下りてくるまでは。

「!」

ぐつと顎を引き寄せられ、唇をこじ開けられる。

思わず目を見開き、叫びそうになるが、湧き上がる叫びは、恐れは・・・
・・・して戸惑いは、男の唇に消えた・・・。

見開かれた碧色の瞳の前に闇色が伏せられ、ふうつと甘やかな吐息とそれに混じった何かが流し込まれる。

その吐息にのせて、身の内に燃えるように熱い何かが吹き込まれ・・・
それが膨れ上がり、広がり・・・全身を貪るように蹂躪した後・・・
・・・消えた。

一瞬、何が起きたか分からなかった。
脳髓が痺れ、思考が止まる。
何が起きたのか理解しようとする部分が麻痺したかのように止まり、
起きたことを認めまい、拒否しようとしている。

が、・・・やがて思考が回復し・・・理解した。
己に何が起きているのかを。

「っ！」

闇色の髪と瞳の男の唇に紅い雫^{しずく}が浮かび、口の端に紅い筋がつうつ
と伝わる。

顎から男の手が離れた瞬間、シズリの左足が弧を描いた！

「退^どけっ！！」

だが、シズリの脚はあっさりと空を切り、いともたやすくその攻撃
を避けられた。

瞬間、男の闇色の瞳と怒りの焰に燃える碧い瞳がかちり、と合う。

男はシズリの怒りに、熱い感情をたぎらせたその表情に目を細める。

そして、噛みつかれた唇に浮かんた紅い血を、わざと思わせぶりにもぺろり、と舌で舐めとって見せた。

淫靡なまでに艶めかしく、茶化すように、翻弄するかのように。

その唇でつい今しがたまで何をしていたのか、シズリ自身に思い知らせるかのように。

そのからかう様な仕草にかつと羞恥と怒りがないまぜになった熱がシズリの頬に燈る。^{とも}

「・・・何をっ！」

だが、怒鳴りかけて気づいた。
動くことができる、喋れる・・・。

先刻まで、この男の青い焰の魔気と煙に侵され、喋ることはおろか指を動かすことすらもままならなかったはずなのに。
魔気に全身を蝕まれていたはずなのに。

肩に受けた魔剣による傷は時と共に熱く、痛みを増しているが、全身を内側から攻め立てていた魔気が消えている。

・・・もしや・・・先程吹き込まれたのは・・・解呪の・・・??
でも何故　　？

その瞬間

とき
時間が止まった……。
いな
否、凍りつく空間に身動き一つできなくなった……。

冷やかに刺すような冷気が肌を苛み、ぞわり、と首筋の産毛まで逆立つ。

呼吸すら奪いそうな圧迫感が胃の、臓腑の淵まで締め上げる。
思わず膝をつきたくなるようなプレッシャーが脚を震わせる。

これは……。既視感デ・ジャヴですか？

それとも？

地面に転がった石ころの一つがピシッと音を立てて凍りつき……。
そのまま碎け散った。
希望という名の胸に宿る石とともに。

*

*

*

< 以下、シズリ少尉による心の中のマル秘メモからの抜粋 >

上官殿はキレると無表情から超絶笑顔になるらしいということを知りました。

美形すぎると笑顔はむしろ凶器・武器となるようです。

でも・・・瞳が一切笑ってないのが怖いです。

あれは・・・もごもご。(以下省略)

上官殿はキレると所構わず魔刀を無意識に出現させます。

歩く危険人物、傍から見れば銃刀法違反者です。

(実際は軍人だから許可はあるけれど・・・でも街中では如何なものかと・・・)

魔刀出現および暴走における被害の一部は

? 凍れる焰が周囲を埋め尽くす 凍傷になります。やめて下さい。

? 石をも砕く絶対零度の暴走 器物破損行為です。やめて下さい。

? 周囲の魔力を吸い取る効果 近所迷惑です。やめて下さい。
ブレッシャー

? 強制圧力による威圧効果 威嚇行為は迷惑です。やめて下さい。

以下省略

上官殿は女性を丁重に扱う、紳士的な方だということがよく分かりました。

（少々部下に対して過保護かとは思いますが・・・。）
あ、手が大きくて温かくてとても素敵です、はい。

*

*

*

空気が震え、未だ冷氣がくすぶり、坑内の魔鉱石がすすり泣きをやめない。

ヒューバートは身の内にたぎるそれを納めるべく、肩で息をつく。

「
落ち着け、ラーツィヒ中佐。魔鉱石が反応する」

冷めたような窅めるようなその口調がヒューバートの神経を逆なでする。

先程までヒューバートと白刃を切り結んだ男、今しがたも暴走しかけたヒューバートの魔力を青の焰で鎮めた男、シズリの身体に傷をつけ、唇までをも

奪った忌々しい男に厭悪の感情が止められない。

この男は気に食わない

本能が、心が、頭が全身がそう訴えている。

男は焰の消えた剣を拭い、鞘に納めた。

再び静まり還った坑内に金属のこすれあう独特な音がきん、と響き渡る。

これ以上やりあう気はない、ということらしい。

ヒューバートは改めて男を眺めた。

闇のように深い、漆黒の髪と瞳、年齢は恐らく25、6 少佐と呼ばれていたこと・・・そして、何よりも？の焰をたたえる魔剣。このことから頭に納められた情報から隣国のある人物と符合がいく

「 シノブ・カンザキ 神崎 忍少佐か ？」

口調は問いかけるようであったが、確信を持った瞳で男を見やった。当然、男からの返事はない。

覆面をしていたのは名を、立場を隠すためであろう。バレたからといって正直に答えることはあるまい。

何のために境界地であり、自由区でもあるここローザンヌに現れたのか、なぜこの魔鉱石の場にいたのか 　そして、なぜたまたま居合わせたシズリ達を襲ったのか 　聞いたところで素直に話すことはないだろう 　たとえば、力づくであろうと。

そして、自国の直轄地ではないここ、ローザンヌでは拘束及び同道を命令する権限はヒューバートにはない。
当然あちら側にも、ではあるが。

だが、おめおめと逃がす気はない。
尤も、それは何よりも自分自身の私情・私怨によるものが大きいのではあったが。
再び魔刀を構えるヒューバートに男が冷たい視線を向ける。

「よせ。こんな場所でこれ以上やりあう気は俺にはない。俺もお前も自殺行為だ。死に急ぐなら一人でやれ。
それにその女　早く手当をしてやらねば傷が塞がらぬぞ？いくら俺とて腕の魔傷までは癒せぬ。
特に魔剣の傷は・・・跡になるやもしれぬ。　まあ、俺の痕跡を身体に残したくば、好きにすればよいのだが。」

それもまた一興、と男が薄く笑みながらシズリを見やる。
壁に背をあずけ、焰の魔剣による傷ゆえの燃えるような痛みと熱い疼きに、荒い息をつきながらも耐え、気丈に立っている様が目に映る。

その肩から腕、掌にかけて未だ血が流れ、白かったシャツは朱に染まり、破れた布地から血に染まった白い素肌がのぞいている様が痛々しくも艶めかしい。

歯噛みしつつも、溢れそうになる感情を抑え、ヒューバートはゆっくりとその魔刀　天冰を下した。
ぎりりつと歯噛みする音と魔刀が冷たい鞘に収まる音だけが坑内に響き、沈黙が辺りを包んだ。

そんなヒューバートを他所に、男 カンザキ シノブ は
倒れ伏したままの兵士達を自らの足元に集め、懷から転送陣らしき
魔符を取り出した。
その瞳にかかる前髪を払い、魔符に印を結んだ両の掌をかざし、帰
還の詠唱を始める。

ヒューバートはその、いかにもてきぱきとした、無感動な仕草に再
び苛立ちがつのる。
自分でもわかつている。
奴と自分は驚くほど似ている。同族嫌悪なのだ。

故に、あの掌がシズリの顔に触れ、あの唇が柔らかな、ヒューバー
トすら未開の果実を奪ったのかと思うとそれだけで心の内にどす黒
いものが湧き上がる。
ただ見ているだけ。
一矢報いるでもなく、おめおめと見逃すしかできない自分自身も許
せない。

魔力反応による独特の重い、厚みのあるような空気が彼等を包み始
め、魔符から放射線状に光が走る。
周囲の魔鉱石がその魔力にひかれて再び共鳴のざわめきを始める中、
ヒューバートに助け起こされるシズリに漆黒の双眸が向けられた。

「顔は見せたぞ、名を教える」

シズリは思いがけない言葉に面喰い、まじまじと相手の双眸を見返す。

そういえば、先刻名を聞かれたときに顔も見せぬ者には名乗らぬ、と言った気がする。

シズリの沈黙を拒否と取ったか、忍は焦れたように更なる言葉を続ける。

「まさか、言を違える気か？」

「・・・シズリ・シノノメ。東雲 雫璃」

肩に走る痛みと熱に堪えながら、口早につぶやき、視線を強めた。ヒューバートには止める間もなかった。

男の無機質な双眸に光が宿る。

「東雲・・・やはりそうか・・・」

シズリの名を口に含み、口内で舌で転がすように、確かめるように呟く。

その瞬間、青い光が彼等を包み、転送陣が完成した。

一閃の輝きが走る！

そして・・・彼等は・・・消えた。

まるで何事もなかったかのように
光も魔法反応も消えた坑内に男の言葉だけが残されて。

「これも運命。雫璃^{シズリ}、そしてラーツィヒ中佐、また相見え^{あいまみ}ようぞ・
」

それだけがこだまし・・・風に交じって消えた。

・・・張りつめた緊張の糸が途切れ、急速に疲労感がシズリの全身に広がる。
崩れ折れかけたところをあたたかでがっしりとした腕に支えられ、見上げれば群青の瞳が気遣う様にこちらを見下ろしている。

「ラーツィヒ中佐・・・申し訳ありません・・・」
「・・・いや、よく頑張った」

そのごく簡単な、彼らしい簡素な一言に、胸がじいんと温まり、泣きそふになる。頬を撫でる手は、身体を支えてくれる温かで大きな手は、記憶通りのあの優しい手で。

あのクリスピンを人質にし、シズリを拘束した兵士の手とは全く違う。

ただ、そのことに安堵した。

その掌がシズリの肩に優しく当てられた。

「肩に魔傷が広がっている。仕方ない、応急処置をする。少し痛むが我慢しろ。」

ひんやりとした感触を肩に感じたかと思うと、冷たい無数の針が刺さるような痛みを感じた。

ぐっつと歯を食いしばり・・・痛みに堪え・・・脱力する。

力の抜けた肩を優しく、その手が支えてくれた。

瞳を閉じると思わずため息が漏れる。

そのまま、謝罪の言葉を囁くような声で口にした。

「すみません・・・ご迷惑をおかけしまして・・・」

「いや・・・こんなことになるとは私も予想外だった。今は気にせず休め。街に戻って傷の消毒と手当をせねば・・・それがまず先だ」

魔剣の前にあつさりと敗北した自分がふがいなく、腹立たしい。

突発的事態に対処できなかったことが情けない。

拳句の果てに守るべき上司に助けを求め、介抱までして頂くとは・・・。

震えるシズリの唇をヒューバートの指がそつとなぞる。

「・・・ここも、消毒してもよいだろうか・・・？」

そのまま囁きかけるように、宥めるように・・・そして請うように

尋ねた。

黒い悪魔が言うことにや。（後書き）

なぜか長くなり、前回ほんのり予告していたところまで、全然辿りつけませんでした・・・。

続きを早めに書いてUPしたいとは思っていますが。

話の展開上必要とはいえ、真面目なシーンばかりで申し訳ないです。

次こそ楽しいお約束&コメディを！

蕩ける・・・（前書き）

前回14話の最後部分をヒューバート視点で。
少々・・・R15??

蕩ける・・・

彼女が肩に受けた魔傷の痕に、ヒューバートは氷の秘術で応急処置を施した。

焔で受けた痕なぞ、この冷気で消して見せる。痕なぞ決して残してたまるかと。

これでさしあたり傷は・・・あの男の痕跡は残るまい・・・。

胸の中で暴れまわる、嫉妬という名の緑色の目の魔物を押さえつけながら、表面上は努めて穏やかに、処置の痛みに脱力した彼女の体を抱き止める。

痛みに、悔しさに震えるその身体を労わるように、そっとその頬に手を当てると、彼女が漏らした震える吐息が掌をくすぐり、ヒューバート自身をも震わせた。

普段、あれほど気丈に落ち着いた彼女が自分に見せた弱さが甘美な誘惑となってヒューバートの心を貫く。

今はこれほどに脆くも儚い・・・。

いっそ、つけいりたい、手に入れてしまいたい。

まるごと全て、今すぐに。誰かに奪われてしまう前に。

そして。

ヒューバートの長い指がシズリの唇のラインをそつとなぞり・優しくそれを撫でた。

その柔らかさを確かめるように、あの男の唇の痕跡を拭うように。

今日は幾度となく噛み締めたせいとその唇はむしろ蠱惑的に、誘うように紅く、あかく色づいている。

親指で押さえると、弾む熟れた果実のやわらかさに溜息が出そうになり、とどまる。

これにあの男が・・・！！

そう思い出すだけでも腸が煮えくり返り、あたり一面をまたもや凍らせてしまいそうだ。

だが。

左の腕と胸板でシズりを抱きとめ、支えた体勢のまま、その指は再びシズリの唇を優しく撫でた。

指でこの柔らかくも繊細な唇をたどれば・・・熟れて湿った感触が甘やかで・・・身の内に湧き上がる本能と嗜虐心をそそられる。

白い頬に汗で張り付いた、黒い艶やかな髪を空いた方の右手でそつとほどこいてやる。。

朱に染まり、破れたシャツから覗く素肌と乱れた胸元に官能的な痛みを覚え、蕩けそうになる。

気がつけば碧く、潤んだ2つの瞳が丸く、驚いたように見ひられ、ヒューバートを見上げていた。

その、やや怯えたようにこちらを窺う瞳の中に、熱っぽく、濃く深く色づいた自らの群青の瞳が映っているのが見て取れ・・・吐息をついた。

その瞳が映す己の姿こそ、真実の自分を映し出していたのだから。

それは・・・

刀を交えた後の高揚感か、天氷を振るったせいかな。
はたまた掻き立てられた嫉妬心のせいかな。

たまらなく彼女を喰りたいと思う自分がある。それこそ肉食獣のようにな。
うに。

彼女はこんなにも疲れ、傷ついているというのに。

それこそ、カンザキと同じ穴の貉・・・。
同類の匂いを感じるはずだ。
。

思わず自嘲し、瞳を閉じ、ぐつと自分の中の猛る獣を氷の深淵に鎮める。

籠った熱を冷ますように。

氷の面^{おもて}で隠した、残酷で我儘な己自身を押さえつけ、黙らせるように。

まだ、その時じゃない。

逃げる兎は追いかけても、無理矢理閉じ込めるものではない。

可愛いからこそゆっくりじっくりと追いつめ、飼いならし・・・自ら進んで罠に飛び込ませるべきではないか？

そして腕^{かいな}の中という永久の檻に閉じ込めてしまえばいい。

兎自身も気づかないうちに。

だから・・・今はまだ、だ。

やがて、長々と嘆息^{たんそく}し・・・閉じた瞳をゆっくりと開き、またたかせた。

瞼の奥で暴れる灼熱を押さえつけ、いつもの色の瞳をのぞかせながら。

せめても、とシズリの唇をヒューバートの左親指がそっとなぞる。

「・・・ここも、消毒してもよいだろうか・・・？」

囁きかけるように、宥めるように・・・そして請うように尋ねた。
ヒューバートの瞳が誘惑するかのような光を浮かべる。

群青の瞳が夜空の深淵のように濃く、瞳に浮かぶ光がそれに浮かぶ星のように。

シズリの喉がひゅっつっという音を立てる。

碧い瞳がなんともいえない光と涙で潤んでいる様子に、ただ、甘やかに背筋が震えた。

親指で愛しい兎の唇をなぞりながら、顎に当てた掌で愛撫するように、宥めるようにくすぐり・・・おとがい頤を持ち上げ、その瞳を覗き込んだ。

静寂が、青い魔鉱石の光が周囲を満たす。

シズリの瞳にヒューバートが映り、ヒューバートの瞳にはシズリが映る。

その唇を味わおうと、己をシズリの唇に上書きしようと、ヒューバートはそつと唇を寄せた・・・。

が！！

「シズリねえちゃん」

情けない声が・・・坑内に響き渡った。

蕩ける・・・（後書き）

シズリが真面目にスルーなスキルがデフォなせい、中佐殿がKYであさつてなアプローチばかりするせいなのか・・・このお話は糖分控え目すぎないか？色気なさすぎじゃないか？？と思ひまして。

少しは中佐に飴を・・・と思ったものの、こうなりましたww

そしてクリスピン少年、すっかり忘れられましたww

仮にも民間人、しかも子供をほったらかしちゃだめだろう、中佐！

春の足音は未だ遠く。

こついう有名な詩がある。

時は春、

日は朝（あした）、

朝（あした）は七時、

片岡（かたおか）に露みちて、

揚雲雀（あげひばり）なのりいで、

蝸牛（かたつむり）枝に這ひ、

神、そらに知ろしめす。

すべて世は事も無し。

生命の誕生と始まりの春、そして朝。

蝸牛はのたりのたり、とのんびり薔薇の棘の上を進む。

彼の路はどこまでも平坦に、^{かのみち}なだらかに続き、悩むことも惑つこともなく開ける道をただ進むのみ。

鋭い荊の棘も彼を傷つけることはないのだから。

・・・あやかりたいもんですね！！

私も精神的な意味で荊いはらの路みちを進んでいる気がします、いえ、むしろ棘いばらなんぞ驚おどろ掴つかみの勢いきりい？

前後に迫る棘を切り払い、避けては進み・・・こけつまろびつしながら必死に走っているような気がします。

一体私が何をした！！

今日は厄日ですか、神様？

空から見てるといふならば、ぜひ聞いてみたい。

「何事もない平和な日ってあるんですかね？」、と。

やっこの思いでたどり着いた宿屋にて、ぼたり、ぼたりと自らから垂れる雫が渴いた床に水たまりを作る音を聞きながら・・・じつとりと水分を含み、すでに衣服としての役割を放棄した服を雑巾のよ

うに絞りながら・・・シズリは車軸を流すような豪雨を降らす天に向かい、心の中で拳こぶしを振り上げるのであった・・・。

時は半時ほど前に遡る。

ごうごうと雷鳴が響き、稲妻が轟く。

一瞬の間が空いたと思えば、大粒の雨が一齐に頬を叩き始めた。

つい数時間前までは目も覚めるような蒼穹の空が広がっていたというのに。

降りしきる雨は時と共に勢いを増し、足元の土を溢れ、ぬかるむ泥の河に、木々の枝のカーテンをばたたとしなる鞭へと瞬時に様変わりさせた。

山の天気のみまぐれぶりは、春風の気まぐれさに、女心のうつろいやすさにたとえられるが、これでは浮気にもほどがあるだろうに。

ヒューバートがクリスピンを抱え、飛ぶように泥水の路を駆け抜ける。

そのすぐ後ろにシズリがぴったりとついてくる様はまるで2つの影

が風を切りながら飛んでいるかのようだ。

焰の魔剣に中てられて意識を失っていたかと思われたクリスピンだが、どうやら単に魔剣に驚き、後ずさりしたところを石に躓いた、と。

したたかすつころび、後頭部に大きなたんこぶを作ったものの、気絶していたおかげで魔気に侵されることもなく、ぴんぴんしている。

・・・いささか元気がよすぎるくらいだ、とヒューバートは苦々しく思う。

ヒューバートとしては彼のおかげでシズリがどんな目に遭ったかを考えると、文句の一つも言ってやりたい様子であったが、当のシズリがヒューバートの肩にそっと手をそえ、目だけで窺めてくる。

そんな風に？お願い？されては、ヒューバートも何も言えなくなってしまう・・・。

かといって、彼個人の？クリスピンに対する数々の私怨？が消えたわけではないのだが。

そこはそれ、ここはこれ、というわけで。

もつとも。

カンザキ
神崎・・・隣国の指揮官級クラスが何らかの思惑でここ、ローザンヌの魔
鉱石採掘場に

現れた、そのことから鑑みるに民間人クリスピンが気を失っていたというのは
ある意味幸運であつたかもしれない。

強盗だつたとしても言っておけばよいのだから。
そうすれば・・・下手に巻き込まれずに済む。

知らないことが幸福、ということもある。
伏せられることが温情、ということもある。

何も知らなくてよい、それが彼の進むべき真っ直ぐな路への
正しき道なれば。

だから 何も、言わなかった 。

稲光と横殴りの雨の中、ようやく3人が鉱山から街へ辿り着いたと
きにはすでに濡れ鼠もいいところ、まさに歩くボロ雑巾のような恰
好になっていた・・・。

まず、一番近かった工房にクリスピンを送り届けた後、とりあえず濡れた服を乾かすためにも宿を探す。

さすがにこのような時間、状態では帰還は無理だと判断したためだ。

クリスピンを始め、工房長達が熱心に引き止めてはくれたが、この大雨だ。

急がねば宿も早仕舞いしてしまうかもしれないと挨拶も話もそこそこに再び飛び出したところ・・・これだ。

要は、部屋がない。

それもさもありなん、ただでさえ観光客の多い街、ここローザンヌ、しかもこの嵐だ。

当然列車は止まり、誰もが帰ることを諦め、宿に腰を落ち着けようとするに違いない。

「・・・ないわけではありませんよ？」

お客様さえよければですが、と宿屋の主人が帳簿をめくる手をとめ、意味ありげな視線で見やる。

床に水滴を垂らしながらも真っ直ぐに立つ背の高い、シルバールロンドの美貌の男とその男のものと思しき上着ですっぱりと身を隠した黒髪の美女を。

怪訝そうな表情を浮かべる、いかにも軍人らしい風情の彼等を見るその瞳に茶目っ気めいた光が浮かび、告げた。

あることにはあるが・・・？一部屋だけ？だと。

たっぷり10秒。

短くも長く感じたその時間、シズリは二の句が告げれず・・・
ずきずきと痛む腕がこれは現実と訴えてはいるが、頭がついていない。言葉が理解できません！！

そして・・・気づきもしなかった。

背後に立つ上官殿の口の端がすつと上がり、瞳が蠱惑的な光を、唇が艶然と微笑^{えみ}をきざんだことに。

以下、8話の冒頭に戻る。

「どうしましょう・・・。」

「どうしようもない。」

「何か他の方法を・・・。」

「他に選択肢はない。」

「……はい……。」

シズリは眼前に立つ、背の高い上官殿の背中を見上げながら困惑していた。

彼はいつも通り静かな、感情の読み取れない表情のまま、テキパキと宿の主人を相手に宿泊の事務手続きをしている。

上官殿の操るペンが、紙の上でサラサラと奏でる音だけがその静かな空間にこだまする。

その表情を見る限り、彼は一切、まったく、毛ほども気にしていないようだ。

それもそうだろう、彼は軍人の鑑^{かがみ}、冷たき氷の男とあだ名されるヒューバート・ヴァン・ラーツィヒ中佐だ。

シズリは些細なことを気に病み、未だに些細なことですぐに心乱る未熟な己を恥じ、
軍人としての在り方、姿勢を尊敬する上司のその背にみるのであった。

そう、上官殿と同じ部屋に泊まることなど野営と思えばたいしたことがない！

^{したうば}むしろお前は野宿でもしてると放り出されて然るべきほどだ。

それだけ上官殿は紳士で部下想いなのだから。

うん、雑魚寝と同じ、遠征と同じ、と己に言い聞かせつつ……。

[illegible]

シズリは異議を唱えるべく、再び上官殿に向き直った！

春の足音は未だ遠く。（後書き）

・・・だらだら状況説明ばかりですみません・・・（汗
ようやっと8話冒頭へ戻ってきました。

熱闘狂想曲

「　　まずは服を脱いで貰おうか。・・・それとも脱がされるほうがお好みかな？」

・・・ええつと・・・この人は誰ですか？

その低くて甘い声、腰にくるんでやめていただけないでしょうか？
積極的に、切に願います！

そして・・・何で私はこんな状況なのでしょう？

ちよっ！後ろ手にドア閉めないで下さい！！

え、何で鍵までかけるんですか！！

女性と2人きりになるときはドアに置物を挟むものでは・・・え、
泊まる場合は別だ。

しかも上司と部下だから問題ない？

はぁ・・・そういうものでしょう・・・か・・・？？んん？？

その濃い群青の瞳からじつっと見つめられると背筋が震える。

伶俐な美貌は相変わらぬ無表情で・・・ゆえに何を考えているのか分からなくて。

その口の端がふつ々と上がり、私の背筋に電流のような何かが走った。

思わず一歩、二歩・・・後ずさったところで、とん、と何かが膝裏にぶつかり、バランスを崩した。

幸い、倒れこんだ先は柔らかな何かで。

・・・この感触は・・・。

シズリの体重で柔らかなマットレスが弾み、掴んだそれは滑らかなシーツのさらさらとした感触で。

部屋中央にでん、と鎮座したダブルベッドに倒れこんだ状態で、シズリは混乱する頭を必死に宥めようとする。

再び背筋に悪寒が走る。なのに頬が熱い。

暑いのに寒いつてどういうことなんだろう！

雨の中走ったせいで風邪をひいたのでしょうか？
それとも腕の怪我のせいで熱がでてきたとか？

・・・シズリ・シノメ少尉、ある意味人生最大のピンチ、な気がします・・・。

*

*

*

話は30分ほど前に遡り、宿屋の受付に戻る

そもそも上官殿に異を唱えようとする事自体が間違いであり、無謀なことであり。

それぐらい私もよくわきまえておくべきで。

ヒューバートは書き終えた宿帳を宿の主人に渡し、部屋の鍵を受け取ると、立ちすくむシズリにぴたり、とその視線を合わせた。

絞り切れなかった雨露が未だ服からポタポタと垂れ、カウンター前の床を濡らす。

水分を含み、濡れた髪をはらえば、灯りの下で透明な雫とシルバーブロンドがきらきらと煌めき・思わずシズリはうっとり目を奪われた。

そのシルバーブロンドの下でこちらを真っ直ぐに見つめる2つの群青の星に気づくまでは。

「・・・よく聞こえなかったがもう一度言ってくれるかな、シノノメ少尉？」

ぴたり、とシズリにその視線をむけたままヒューバートが問いかける。その声は静かで・・・例の如く感情のこもらない淡々とした口調ゆえに何を考えているのか分からず、シズリを戸惑わせる。

「・・・ですから。私はどこか・・・ええと、その椅子とか廊下で

仮眠を取ります、と申し上げました。

中佐殿はぜひお部屋でお休みくださいませ。

もし酒場等が開いておりましたら、私はそこで一晩過ごしてもよいですし」

この大雨ですから閉店するよりもむしろ、風雨を避けるために人が集まっているかもしれません、と努めて何でもないことかのように朗らかに言ってみせ・・・了承を取り付けるべくヒューバートの顔を見上げ・・・そして、後悔した。

例の、あの冷たくも美しい微笑をその顔に浮かべていたのだから。

「・・・私と同じ部屋は嫌だと、そういうことかな？・・・シノノメ少尉？」

「！いえ・・・そんな。決してそうではなく・・・」

シズリは言葉に詰まる。

まさか男女2人で同じ部屋というのが困るんです、貴方と2人では緊張して気が休まりません、何か・・・嫌な予感がするんです、なにと仮にも上官、しかもヒューバートに言える由もない。

これでは貴方を警戒しています、貴方が嫌なんですとも誤解されかねない。もしくはとてつもなく自意識過剰な女だと。まるでヒューバートがシズリに手を出すと思っているとでも。

シズリ自身、士官候補生時代や下士官に上がったばかりの頃の遠征では、何度も野営や雑魚寝の経験もある。乱雑な行軍の中、男性士官に強引に言い寄られたこともある。

・・・もつとも、例え相手が先輩であろうが、上位の士官であろうが容赦なく反撃し、叩きのめしてきたが。

どうせ、シズリのような下っ端の小娘に手を出そうとし、撃退されたなど、恥ずかしくて言えるはずもないだろうから。

・・・って、そうではなく！

勿論、ヒューバートのことは信じている。

敬愛する上司であり、人間としても軍人としても心から尊敬している。

何せこれだけ部下思いな上に、常に紳士的な方なのだから。

そしてこの件はヒューバートではなく、シズリ自身の感情の問題であって。

他の男性ならともかく・・・ヒューバートだから戸惑うし緊張するのであって。

この複雑な心持こころもちを誤解なきよう、失礼のないように一体どうやって伝えればよいのか・・・。

「ではなぜだ？」

「私なぞと同じ部屋では中佐殿にご迷惑かと」

「なぜだ？迷惑なぞない。むしろ君がいないほうが心配だ」

「いえ、そう言っただけ頂けるのはありがたいのですが・・・中佐殿のご厚意に甘えるわけにはいきなそうですし・・・」

「分かった。では同じ部屋にしよう」

「もーしーもーしー？」

「おい、だから貴方と同じ部屋なんて無理だと言ったでしょーが。ぶんぶん首を振って辞退すれば上官殿が畳み掛ける。」

「なぜだ？やはり君は私と同室なのが嫌なのか？」

「いえいえ、そんなことはありません！」

「なら、同じ部屋で問題なからうが」

「それもやはりちよつと・・・。実は私、床で寝るのが好きなんです。あとイビキと歯軋りが酷くて！」

「分かった。私もだ。なら部屋の床で共に寝ればよい」

「中佐殿を床に寝やすませるなんて！！それにそんなお話、信じられませんか！！」

「奇遇だな。私もそう思っている」

以下、延々と続く攻防と「なぜだ」「なぜだ」「なぜだ」の嵐・
・。

永遠に続くかと思われる攻防にいい加減頭が朦朧としてくる。

普段一切言を発しないというのに、なぜこっぴどく変な状況のときばかり口が回るのか。

いい加減反撃の弾も切れてきた。

鳴らす喇叭^{ラッパ}も撃ちだす砲弾もすでに潰^{つぶ}えた。

このまま歩兵、砲兵もろとも敗走という事態になり得る！！
そればかりは・・・。

さて、一体どう言えば逃がして・・・もとい、納得して貰えるのだろうか・・・。

よし、ここはズバツと本音、核心を言うしかない！

正直な気持ちを言えば・・・納得して貰えるだろうか？

「分かりました。正直に申し上げます。実は・・・同室では緊張してとても寝つけないのです・・・」

シズリは頬を染め、視線を自らのつま先に漂わせながら正直に告げた。

中佐殿が嫌なのでない、ただ・・・緊張するのだと。

その姿は・・・普段凜とした表情の彼女には珍しくも可愛らしく映った。

ヒューバートはつくづく、その初々しい姿を、初心^{つひ}に色づいた頬

を見下ろし・・・肩をすくめた。

「・・・そうか。分かった」

よしやった！

心の中で快哉を叫び、小躍りしそうになるシズリだったが・・・ふいに両肩をがっしりとした両手に押さえつけられ、はたと気づく。いつの間にやら上官殿の顔が目の前10センチの例の危険領域にあることに。

雨露でしつとりと濡れ羽色に輝くシズリの黒髪を弄びながら、その吐息とともに危険な囁きという爆弾が耳元に投下される。

「では・・・私が寝かしつけてやろうか？」

甘い吐息が耳朶じだをくすぐり・・・一瞬、息が止まりそうになる。上官殿に添い寝され、子守唄を歌って貰う自分の姿を想像し・・・あわわわわ。

歩兵、砲兵、一気に総員退避！！

硬直し、放心状態のシズリとそれをにんまりと見下ろすヒューバートの間にしばし、沈黙が落ちる。

窓の外では嵐が吹き荒れ・・・雷が轟き、ガタガタと宿屋を揺らす音が響く。

シズリの心中の嵐と同じように。

その沈黙を破ったのは神の声か、はたまた悪魔のささやきか。
無論、誰にとってそうなのか・言うまでもないが。

「お客様・・・できれば受付前じゆきではなく、お部屋でご相談さうだんいただければ有難いのですが」

いつの間にやら彼等の背後にできた客の列を掌で示しながら、宿屋の主人がやや怯えるような、戸惑ったような口調で口をはさんだ。もつとも、その瞳はやや・面白がっているような印象も否めなかったが。

ちらり、とシズリにやや同情的な視線を向けながらも言葉を付け加える。

「お2人ともたいそう濡れておられますし、お部屋でお身体を乾かすのが先決では？」

と。

熱闘狂想曲（後書き）

色んな意味ですみません・・・。

上_ナに浮かぶは二つの月（前書き）

カンザキ少佐、再び登場。新キャラも出ます。

上下に浮かぶは二つの月

結局、受付前ですぐ濡れのまま押し問答を繰り返す、という迷惑極まりない客だった私と上官殿は、宿屋の主人自らに有無を言わさぬ剣幕で部屋に放り込まれてしまった。

ででん、と部屋の真ん中にダブルベッドが鎮座する、明らかにカップル向きだろうが！！とツツコミたくなるこの部屋へ。

「どうかこちらで濡れたお身体をお拭き下さいませ。」と、大きなタオルを２人分、押し付けるように渡してくれたので、風邪をひかないように、との純粋な親切心だとは思っただけけど・・・逃げるように立ち去るその背が・・・やや怯えていたように見えたのは気のせいだろうか・・・？

・・・きつと忙しいんだな、うん。

この大変な天候の日に時間を取らせて申し訳ないことをしてしまった。

で。

何が何だか分からないうちに、いつの間にやら摩訶不思議にもこういう状況なわけで。

「まずは服を脱いで貰おうか。・・・それとも脱がされるほうが好みかな？」

上官殿の・・・その不穏なお言葉に、その伶俐な微笑を称えたその美貌に・・・そして、その甘くも腰にくる声に。

・・・思わず数歩、後ずさる。

だが、つまずいた拳句に倒れこんだその先は、リネンと（なぜか）白いレースとリボンをふんだんに使って美々しく飾られた、同じく真っ白な羽毛布団の海で。

普段の自分なら喜んで飛び込むそこが、なぜか危険な・・・何よりも危険な底なし沼のように思われる。

そのやわらかで弾力のある立派なマットレスに沈みこんだ身体が、足を取られ、めえめえと鳴きながらずぶずぶと沈みゆく子羊のよう

で。
本能という名の第六感が告げる。何かが変わだ、危険だと。
なぜならば。

見上げた先に蒼穹そうらはない。
見つめる先に星空そうらもない。

そう、ここは宿屋の部屋なのだから。

シズリは仰向けに転がったまま、となかなかどうして無防備な姿勢のまま、コンマ1秒で自問自答を繰り返す。

それなのに、と。

室内なのに、あるべきものが視界に入らず、あるはずがないものがまさに目の前、至近距離のここにある。

白い天井の代わりに煌めく銀の海、橙の魔導灯の代わりに群青の星2つ。

その2つが指し示す状況は明確で・・・。

さて、施錠された部屋とかけて、ヒューバートと解く

その心は如何に？

その心は、滅多なことでは逃げられない！！

・・・さしずめ貴方は獵師さんですか、それとも・・・？

シズリが何とか半身を起こそうとしながらも後じさりを試みる、という、非常に困難かつ無駄な努力に励もうとじたばたする様を、ヒューバートのその手があっさりと封じた。

だが、ゆっくりと抱き起こされ、改めてベッドに座らされると・・・

・シズリはおとなしく従った。

・・・・もつとも、その左手が腰に回されたまま、という点が非常に気になったが。

ヒューバートの右手がシズリの左手を捉え、指の腹で掌から肘にかけてのラインを確かめるように、そつとやさしくなぞる。

その動作のもたらした意味に・・・感覚に・・・どこかむず痒いよう

な、こそばゆいようなものを感じつつも・・・、ヒューバートに物問いたげな視線を向ける。

視線があつと・・・ゆつくりと頷かれ、ようやくシズリはほつたと安堵の溜息をつけば、強張った身体からふ、と力がぬけた。

・・・どうやら我ながら相当気を張っていたらしい・・・。

シズリの身体から力が抜けたことに安堵したのか、ヒューバートはシズリの左手に沿えたその右手をゆつくりと頬へ、頭へと移動させた。

「暴れるな。こういうときこそ・・・私に任せればよい」
私は君の上官なのだから、と。

ゆつくりと囁きながら、安心させるようにやわらかく、シズリの頭を撫でるその掌から、その声から・・・ヒューバートのシズリを労う心がじんわりと伝わってくる。

彼の手は魔法のようだ・・・。
あれほど無口な人なのに、その手は不思議と雄弁で・・・穏やかで優しい。

シズリは頭から頬へとゆるやかに流れながら、相変わらずやわらかく撫でてくれる手の感触をしばらく楽しみ・・・ようやく心が落ち

着いた頃にそつと送り返した。

雨で冷え、冷たくなってしまったシズリの指先とは異なり、その手はやはり大きくあたたかで。

やっぱりこの手、好きだな・・・安心する

だから、ヒューバートが貸してくれた彼の上着が肩からするり、とベッドの下に滑り落ち、その手がそつとシャツのボタンに手をかけても、もはや抵抗はしなかった。

武骨な手から、指先から彼の優しさが、シズリを心配するあたたかな気持ち伝わったのだから。

その群青の瞳を窺うように下から覗き込めば・・・安心させるような頷きが返される。

・・・シズリはようやつと・・・若干恥らいながらも・・・彼女の傷の手当をしてくれようとする彼の、その手の厚意を受け入れた。もっとも、さすがに袖なしの、ぴったりとしたアンダー1枚の半身を仮にも上司に、男性に、何よりもヒューバートに晒すのは・・・いささか・・・いや、かなり恥ずかしいものではあったが。

その左の掌から肘にかけての傷は・・・ヒューバートとその魔刀を招喚するため　触媒である水の代わりに血を使うために自ら切り裂いたためのもので。

・・・上官殿はそれを気にしているのかもしれない・・・シズリは薬湯を用意しているその背を眺めながら・・・そう思った。

先

一方、大嵐に襲われたローザンヌからはるか数百里
その国の夜は穏やかな月夜であった

月影さやかにあたりを照らし・・ほのかに枯葉の匂いを含んだ秋
の風がやわらかく頬を撫でる。

水面にくつきりと浮かび上がった月も足元から照らしてくるよう
で、秋虫の鳴き声が静寂の中、静かにこだます。

そんな穏やかで、明るく爽やかなその夜に男はいた。

白い道着に黒の袴を着け、闇夜のような髪と同じ色のその瞳は今
夜の夜空と同じく曇りひとつなく見える。

ただひたすら前を、眼前を見つめるその瞳には一欠片の感情もな
いかのようで、男をよく知る者以外にはその瞳の奥底に、さざ波の
ように揺れ動く感情があることは分らないだろう。

男は月の明るさを、今なお鮮やかな緑の色を、穏やかな風をなじ
るかのようにひたすら剣を虚空に向かって振るう。

上段から斬りつけ、払い、また下段から切り上げ、剣の切っ先が
呼ぶ音だけが、その静けさを震わし、乱す。

巻き起こる風が周囲の草花を、空気をゆらし、水面の月の姿を歪ませ・弾けさせた。

やがて、月が厚い雲に蔭り・・・辺りを再び暗闇と静寂が包んだ頃、ようやく男は剣を鞘に納めた。
きん、と冷たい音が周囲に響く。

「今晚はずいぶんと熱心だったな」

タイミングを見計らっていたのだろう、足音と共に声の主が現れる。

短く切った金茶色の髪と広めの肩幅を持つ大柄な男で、頬にうつすらと白い傷痕のようなものが残っている。

その表情は誰もが気を許してしまいそうなほど人懐っこく穏やかで、黒髪の男とは対照的に、白いシャツにくすんだ茶色のパンツとあった、ごく普通の服装だ。

だがその朗らかな姿とは裏腹に、シャツの下の鍛えられた筋肉と隙のない身のこなし、腰から下げた剣と短銃が彼が軍人　しかも相当の実力のある男だということを物語っている。

そして髪の色と同じ金茶色の瞳は穏やかで、興味深げに漆黒の男を見つめるそれは面白そうに躍っていた。

声をかけられた黒髪の男 シノブ・カンザキ少佐 はつ、
と一瞬だけ視線を向けた後、汗を拭き、衣服を整えると金茶の男を
無視してくるりと背をむけ、すたすたと歩きだす。

「ちょ、おいおい、無視すんなよ。今日はずいぶんとご機嫌だな？」

「・・・五月蠅い」

「昼間のことでまだ機嫌が悪いのか？・・・いや・・・はあ・・・さて
はシノブちゃん・・・女だな？」

「・・・って！おい、殺す気か！！」

金茶の男 ラタトスク・フォン・フォースリンゲン少佐
は電光石火のスピードで抜かれた剣を紙一重の差でかわしながら
情けない声をあげてみせる。

もちろん、加減されたのは分かっているし、これぐらいをかわせ
ないようでは軍人は・・・いや、この男の友人は務まらない。

「ああ、そこにいたのか。・・・虫がいたものでつい、な。羽音の
煩い、やけにけたたましい羽虫だった。」

それにあの程度がかわせぬお前ではあるまい、あとその呼び方は
よせ、心持が悪くなる、と付け加えながらもしれっとそっぽを向く、
いつも通りに落ち着いたその横顔が憎たらしい。

だがそれは、普段なら無視するはずのラタトスクの軽口に今回ばかりは反応するということは、それがおおよその外れではない、と

いうことで。

ちらり、とその秀麗な顔を見やれば、やや無然とした表情でひたすら歩いている。

いつも皮肉るような、斜に構えた腹立たしいほどに余裕たっぷり
の態度の彼には珍しい態度だ。

（・・・まだまだ青いね、シノブちゃん

コイツに女、か・・・？こんな面白いネタ、逃す手はないな・・・。

）

ラタトスクは内心にんまりとしながら作戦を切り替える。

丁度いい、退屈していたところだ。

ラタトスクはその穏やかで人好きのする外見と裏腹に、常に刺激を好み、何よりも退屈が嫌いだ。

だから、今回のシノブの珍しい様子は彼に十分な刺激と楽しみを
与えてくれるだろう。

そのためには、と　。

「なあ、シノブ。さっきの任務　ローザンヌで隣国の奴と出くわ
したって聞いたけど、誰だ？」

「・・・氷の魔刀の主、ヒューバート・ヴァン・ラーツイヒ中佐・・・
その部下らしき女。」

簡潔に、質問の答えだけだが返ってきた。

だが、そのぶっきらぼうな、棒読みのような口調の中からにじみ出る色は明らかで。

その黒い瞳に剣呑な、危険とも言える光が宿る。それで分かった

負けたのだな、と。

かの魔刀の使い手、氷の男の二つ名を持つヒューバート・ヴァン・ラーツィヒ中佐に、青い焰の魔剣の使い手、シノブ・カンザキ少佐が土をつけられたのだと。

だが、最後に付け加えた？部下らしき女？という言葉にぴん、と耳がそば立つ。

シノブはたとい味方だろうと彼にとつてどうでもいい者、興味のない者は記憶にも残らず、視界にすら入らないといった男だ。

その男が隣国の佐官階級の部下・・・しかも女を気にしてる。

・・・ということは。

「へえ・・・。あの？氷のヒューバート？に会ったんだ。あの見た目に若さのくせに、すげー使い手なんだってな。俺も一度は手合せ願いたいもんだ。

・・・でもそんな隊長級の奴が何でたった2人で、しかも女の部下を連れただけで、ローザンヌにいたんだ？
実はデートだった、とか？」

半ば冗談、半ばシノブにかまをかける目的で言ってみただけなのに、その黒い瞳が不穏な光を帯びたことで・・・ラタスクのかまかけが正鵠を射たと、ビンゴだと教えてくれたことに思わずにやり、

とする。

尤も、旧知のつきあいでもあるラタトスクだからこそ、その微妙な表情の機微に気がつけるのでもあるが。

すぐにその感情の揺らぎは消え、相変わらず前だけを向いて歩いているが、若干歩く速度が速まったことでいらいらとしていることが分かる。

（・・・まったく分かりやすい・・・俺にとっては、だが。）

ラタトスクは内心苦笑しながら一人ごちる。そしてそんなシノブの、らしくもない、珍しい反応に、ややもすると手を貸したくなる。

分かったところでこれ以上探りを入れるのをやめ、単刀直入に聞くことにした。

「・・・なあ、その部下の女、どうだった？綺麗系か？それとも可愛い系か？」

カンザキの足がひたと止まり、くるり、と後ろに向き直る。

ラタトスクにぴたり、と視線を向けた後、何か言いかけ・・・思い直したように口を閉じられた。

漆黒の瞳が様々な感情がないまぜになったかのように色づき・・・揺らぎ・・・再びもとの色に戻る。

そして・・・再び開かれた口から出てきた言葉は思いがけない言葉であった。

上下に浮かぶは二つの月（後書き）

なかなか話を途中で切れず・・・なんとか短くしようと努力はしたのですが

5,000字超、と長くて申し訳ありません・・・。

人の恋路は邪魔するな！

ローザンヌは元々は山と海に挟まれた小さな街であった。
街の人々は鉱山と共に生き、山の恵みを糧とし、海を幸さいわいとしてきた。
だが年月を経としつきて 現在はこの国における自由特区という自治都市的な位置づけになっている。

それはローザンヌという街がひとつの街としては特殊な、街そのものが強い力と影響力を備えていることを意味している。
そしてそれは魔導石の恵み豊かな鉱山を背に、高台の眼下に広がる美しい海原を足元に持ったという、恵まれた土地独特の事由に依ることが大きい。

確かに繁栄の第一歩はその美しい景観と魔道鉱山のもたらす恵みからで。
だが、その街としての大きな躍進となった歩みはその街に生まれ、育ち、生きてきた人々が築き、受け継ぎ、練磨を重ね、磨きに磨いてきた独自の技術力と努力の賜物に依るものだ。

特に魔導石を利用した技術、繊細かつ職人の匠の技の賜物による魔導銃を始め、魔燈火などの必須用品などの工房は他に追随を許さない、独自の技と修練を修めている。

ゆえに、さらなる高みを目指す技術者や職人を志望する者達が国境に関係なくこの街の工房の門戸を叩くため、自由闊達としながらも職人の街特有の一種厳格で、独特の雰囲気を持っていた。

そう、ローザンヌという街自体がすでに一種の？国家？なのだ。

技術とその精神という名の神の前に頭を垂れ、^{ムツ}跪いた者達の。

そんな者達に果たして国や、まして民族、出身などが関係あるうか？

肅々と？掟？を守ること。勤勉、努力
そして自尊^{プライド}心。
それが彼等の持つ精神という名の国だ。

だから媚びない。
そして揺るぎない。

ゆえに浸食も妥協も許さない。

それが街の、人々の規範となり、力となって直通鉄道の開通を呼び、さらなる技術と観光客を呼び寄せた。

直通鉄道の力もあり、鉾山の街、職人の街が観光の街としても不動の地位への階段を駆け上がるのも瞬く間の出来事であった。

鉾山が真っ白な鎧に閉ざされる真冬を除けば、季節を問わず街への人々の客足は止まる^{とど}ことを知らない。

そうして必然的かつ自然と飲食・宿屋業も繁盛^{かなめ}し、それも立派な街の伝統産業となって、より街を盛り立てる要^{かなめ}となつていったのだから。

そして　　そんなローザンヌに長年、老舗の宿屋として看板を連ねてきた「白い兎と月と亀」という伝統ある宿屋が歴史ある趣を構えていた。

勿論、単に信頼される老舗、というだけでなく、居心地のよさ、部屋の質の良さ等でも確固たる信を得ており、街でも指折りの宿屋としての地位を築いていた。

だが・・・突然の大嵐が起きたその日、「白い兎と月と亀」の五代目、ジョシユア・リントン（28）はある部屋の扉の前でうろつろと行ったりきたりを繰り返す、という不思議な行動をとっていた。

彼はふさふさとした栗色の髪とそれに似合った青い瞳を持つ好人物で、その優しい、人好きのする容姿が彼の穏やかな雰囲気によりいっそう引き立てている。

そして、若いながらも丁寧かつ細やかで親切な応対ぶり、上品で清潔な伝統ある宿屋としての古来からの評判をよりいっそう高めていた。

ジョシユアは宿屋の主としての仕事を愛し、助けてくれるスタッフ達を信頼し、宿を訪れ去っていく　二度と会わないかもしれないいし、再び会うこともあるかもしれない　客達を大切にしてきた。

？常に心は穏やかに？

？お客様は神様です？

？誠心誠意お仕えします、貴方の幸せは私の幸せ！？

これを自らとスタッフ達の心のモットー、魔法のマントラとして唱えながら１８のときからこの１０年、熱心に仕事に励んできた。

だが、そんな正直で優しい彼の真っ白な心に蔭る雲、不定愁訴は

先程来店した二人連れの男女について、だ。

部屋に通したものの・・・彼等に関するある葛藤と自責の念を腹におさめたまま　　落ち着くこともできず、さりとてどうすることもできないまま、足はうろつろつとその部屋の前をふらつくのみ、という・・・。

そもそもこの日は突然起きた大嵐で鉄道が止まり、観光客の多くが足止めされる憂き目となった。

ゆえに宿の仕事はてんでこ舞い、この近辺の宿屋の中でもグレードは当然のこと、それに応じた宿代も数本の指に入るここ「白い兎と月と亀」でさえも、あつという間にほぼ全ての部屋が埋まってしまったほどだ。

そんなところにやってきたのは、降られに降られ、濡れに濡れた若い男女のあの二人。

男の方は丈高く、シルバートロントの髪に群青の瞳の端正な顔をした青年で、突然の嵐でしとどに濡れた姿は・・・まさしく？水も滴るいい男？といった風情で。

ストイックな雰囲気ながらもどこか・・・むしろ匂い立つような色気

を漂わせたその様が受付ラウンジにいた女性客の視線をそれこそ釘付けに、一身に集めていた。

一方女性の方は年若く、すらりと高い背にこの国では珍しい、長い黒髪に蒼い瞳が印象的で。

濡れ羽色に艶めく髪色がその繊細な面差しと相まって、しつとりとした不思議な色気を放っていた。

その細い肩には多分に余る、男のものらしき上着を頼りなく着込んだ姿は清楚な中にもどこか淫靡な魅力すらあり……。

だが、二人に共通して言えることはある種、独特な雰囲気があり、隙のない身のこなしをしていることだ。

（……軍人だ。特に男はそれなりの役職の。
会話の様子からして恋人同士というわけではなく……上司と部下、
だろうか。）

幼少時より宿屋家業を手伝い、客商売をしてきた経験と勘ですぐそれと気づく。

職業柄、さっと全身に目を走らせるが、見たところ帯刀しておらず、丸腰のようにも見える。

尤も、女性の方は男性客の上着ですっぽりと覆われているため分からないが。

部屋が一室しか空いていない旨伝えたところ、しきりと男性との同室を避けようと懸命に、生真面目に反撃？する様が、その繊細な顔立ちとアンバランスで何やら可愛らしい。

感情が高ぶっているのか、白い頬に紅く色が燈り、うっすらと色づいている様がいかにも初心で。

その様はまるで・・・懐く銀色の大型犬に啜えられ、じたばたともかく黒い子猫のようだ。

本人は至って懸命に、必死にもがく様が愛らしくも微笑ましい。

その一方で、その身に余る男の上着からのぞくうなじは白く、細く・・・濡れた後れ毛が首筋に張り付く様が色っぽくて不謹慎にもときめいた。

こんなに困っているのだから・・・とジョシユアは女性を哀れに思い、普段は客室としては使っていないが、唯一空いている部屋の鍵を引き出しから取り出す。

だが　ジョシユアが思わず職務を忘れ、やにさがった表情を浮かべながら男に反論が続けている女性に見とれた後　鍵と部屋
の存在を知らせるべく、ようやっと表情を引き締めたところでざくり、とした。

件の男性客　　宿泊帳簿に記帳していた上司らしき男性客

がジョシユアと・・・その手に持った別室の鍵にじつと視線を落としていたからだ。

怜悧、とも言えるほどに整ったその顔に表情はなく、感情の一片すらも表れていないが・・・その瞳が違った。

はい、ぜんつつぜん違いました！！

その瞳のたたえる感情は明白で。

無表情の中に浮かぶだけに、それは意味深かつ雄弁で。

その群青の視線がジョシユアの瞳にひたり、と合わせられた。

すう　　つと腹の下の辺りが冷えていくのを感じる。

首の後ろの産毛が逆立ち、思わず後じさりするとカウンターの後ろの壁に足がぶつかる。

視線がおよぎ、喉にかたまりがこみ上げてくるような・・・何とも言い難いものが皮膚の内側から冷たく這い登り・・・倒れそうなほどの恐怖感にずぶり、ずぶりと沈んでしまいそうだ。

既に男の視線はジョシユアから外れ、むしろ甘やかな、美貌の悪魔といった表情を彼女に向けている。

彼女をその悪魔の囁きで、甘い美貌で追い詰め、囲い込み・・・その黒髪を弄びながら何事か囁いている。

にもかかわらず・・・一方で彼からちくちくと刺すような、切り刻むような意識が放射線状に飛んでくるのを感じる。

そして冷たい空気が変わらずにジョシユアを包み・・・臓腑をゆっくりとじわり、じわりとえぐられるような恐怖感に苛まれる。

(・・・こ・殺される・・・下手すれば夜明けまでに殺^ヤられるうう！?)

このときの感情・恐怖感を後々、ジョシユアはこう語る。

逃げたい、という本能の前には？お客様は神様？ではなく・・・？生贄の羊、またの名を溺れる者が掴む藁？でした、と。

ジョシユアは逃げたい、何とかこの場を納めたい一心で言いました。何とかその瞳に、表情に宿屋の主人たる表情を、感情をはりつけながら。

そう、女は恋の前に女優になると言うが・・・男もわが身・わが命のためならば名役者になれるのだと自らに言い聞かせながら！

「お客様・・・できれば受付前^{ごちう}ではなく、お部屋でご相談いただければ有難いのですが」

と。

それはジョシユアが生まれて初めて、そう、初めてわが身可愛さに悪魔に身を売り渡した瞬間であったと　　当人はそのときをこう振り返る　　・・・。

ヒューバートの腕に捕らわれたシズリの顔がさらに紅く染まった一方で……彼の瞳が満足げにきらめき……その背に赤い薔薇と黒い羽が飛び散る様をありありと見た気がする、と……。

心の中で？生贄シズリの羊？に礼と詫びを唱えつつ、何とか彼等を部屋に押し込み、ガチャリと鍵を閉められた音に安堵さえするジョシユアがいた。

「俺、生きてる ！！」

と。

その後、やはり心配で、己のしたことに罪悪感を抱きながらも部屋の前をうろつくこと30分。

だが、やがて やや薄いドアの向こうから聞こえてきた、囁くような言葉にすたこらさつさと逃げ出した。

顔を真っ赤に染め、必ずしも走ったせいではないと思われる左の胸からばくばくと響く、うるさくも激しい音を胸に抱えながら。

それは。

「……君にあの男の痕は残させない……残させるものか。
君に刻む印は俺のものだけでよいのだから……」

という甘く・・・囁くような男の言葉で。

見ざる、聞かざる、言わざる。

ジョシユアの口は貝の口、ええ、なあゝんにも聞いてませんよ、知りませんよ、と。

以後、この宿の秘密のモットーに付け加えられた言葉がひとつ。

？人の恋路を邪魔するものは、馬に蹴られて死んでしまえ？

宿屋の主人自らが掲げた言葉だそう。即ち、？死にたくなければ邪魔するな？と。

人の恋路は邪魔するな！（後書き）

18話でなぜ宿屋の主人がさっさと彼等を放り込んだのか・・・の理由ですw

尻馬にのる男と禁句（タブー）

ちやぷん、ちやぷん . . .

室内に水音が響く。

外の嵐がまるで他所事よそことであるかのように、この部屋の内側はしんと静まり・静けさに満ちていた。

小机の上に置かれた湯桶の前に立つ男と、その背を見つめる女の間
に横たわるものはベッドと沈黙のみで。

ヒューバートはシズリをベッドに座らせたまま、こちらに背を向けた状態で薬湯の準備をしている。

仮にも上官殿にそんなことはさせられない、と一度は腰を上げたものの、その目で制されてしまったため、ありがたくその好意に甘えることにする。

さすがに肩には魔剣の傷、そして肘から掌にかけての裂傷がある状態では、いくら両利きだといってもタオルを絞るといった作業にはいささか無理があり。

シズリは手持無沙汰のまま、その広い背をぼんやりと眺めていた。
これまで常に付き従い、見てきたその背は いつも黒の軍服に包まれ、すっと伸びた背筋はいつも威厳に満ちていて。

どこか遠く、ある意味自分とは違う世界の特別な人間のように感じていた。

彼は佐官階級の中佐であり、シズリの上官であり、そして氷の魔刀

の主という稀有な人間であり・・・遙か隔たれた場所にいる人間なのだと。

でも今は・・・その背が今はこんなにも身近く感じる。
それは・・・どこか不思議な感覚で。

近しく感じるというよりも・・・彼の人が草を踏み分け、花をも散らし、シズリが立つ野へと確実に歩を進めて来ているかのようだ。それはどこか甘やかで・・・でも、胸につんとした痛みを与え伸ばされる腕に、その手に・・・ある種の恐れすら覚えるような感覚だった。

だから・・・。

激しい雨音が窓をうがち、吹き荒れる風が獣のような咆哮を上げている。

一方、からりと乾いた室内で、シズリのまだ乾いていない、湿った黒髪から一滴の雨露が髪を伝わり、襟ぐりが広くあいたアンダーの胸元に落ちてきた。

シズリはその生温かくも肌を伝わるぬるい感覚に先程までのぼうつ

としていた意識を取り戻し・・・息をついた。

一旦自らの身体を見下ろし・・・傷の手当のため、先程ヒューバートに脱がされたシャツをそつと膝の上に広げてみる。

それはやはり　洗ったとしても着るには少々・・・いや、かなり躊躇われるような代物になってしまっていて。
まさか泊まりがけになるとは思わなかったので、当然衣服の替えなどない。

明日、上官殿に時間を頂いて街で調達するほかないだろう。

指の腹で布をつ、となぞると、つい先ほどまで汗と雨と血でねばつくように肌に張り付いていたそれは未だじつとりと湿っている。

特に左の袖部分は朱に染まり・・・仕込んでいた魔符を取り出すために自ら引き裂いたとはいえ、ひどい状態で。

ここまでヒューバートが上着を貸してくれて本当によかったと思う。

あの人の好い工房の人達や親切そうなの宿の主人にこの腕と肩を見咎められようものなら・・・一体どんな騒ぎになったか分かったものではない。

さすがに焰の魔剣を受けたのは初めてだったため、かすった程度であれほどのダメージを受けるとはシズリ自身思いもしなかったが。
むしろ、今後のよい経験と教訓となったかと思う。

無事、戻れた今となれば、だが。

銃で魔剣に相対^{あいたい}するのはたとえ魔導銃であろうと、一定の距離がなければそのスピードと魔力においては圧倒的に劣る。

あのときのシズリは銃が使えない狭い坑内であつたとはいえ、魔剣相手に歯が立たず・・・最終的には焰の魔剣から烟^{けぶ}りたつ魔気に絡め取られ、地に膝をつかざるをえなかった。

尤も　魔剣自体、この大陸に数本存在するかしないかの希少な存在であるし、あの闇のような色の髪と瞳の男　シノブ・カンザキ少佐　と再び相見えることがあるかどうかすらわからない。ただ、彼の去り際の言葉も気になるし　対策を講じておいて損はないだろう。

シズリの脳裡をあの闇色がちらつく。

濃く深く・・・あの焰と同じく燃えたつようにシズリを見つめた瞳、重ねられた唇に思わず歯を立てたときでさえ・・・唇に浮かんだ血を舐めとりながら薄く、からかうように笑っていたあの男。

そして・・・あの闇色はシズリと同じ色で・・・あの声は故郷を思い出させた。

だが・・・シズリは思考を止め、頭からあの男を、あの闇色を締め出すべくゆっくりと目を閉じ・・・再度まばたきを繰り返し、思考を切り替える。

上官殿と魔剣について再度検討する必要があるだろう、とシズリは改めて頭に刻み込むのであつた。

そして今回は上官殿への道が一瞬で開いたがそれはたまたまで。

ヒューバートが言うには、そのとき（間違いなく、きつとたまたま！）彼がシズリへと意識を集中していた（らしい・・・）からで、すぐさま2人の波動が同調したから瞬時に道が拓^{ひら}き、召喚できただけで。

次は・・・ないかもしれない。

何よりもシズリは守られる存在ではなく、守ることができる存在でありたかった。

彼女に課せられた職務はヒューバートの副官であること。

それ即ち彼の手足であり・・・彼を守る一振りの剣であり、楯であること。

でなければ故郷を飛び出して従軍した意味、父や兄を困らせ、悲しませた意味、自らが選んだこの道への意義がなくなってしまう。

掌から肘にかけて広がる刃傷をそつとなぞってみる。

血は固まり、そのおかげで表面上の裂傷は何とか塞がれてはいるが・・・無理をすればすぐさま口をひらきそうだ。

だが、この程度、どうといったことはない。

見た目は派手に血が流れたが、傷自体は浅く、些細なものだと自らの経験で判断する。

荒っぽい軍の前線ではこの程度の傷などさしたるものではない。

だが 意識のないクリスピンをこの手に抱き起こしたときの絶望・恐怖感がまざまざと甦り、胸の内側を震わせる。それは人生の半分近くを軍で過ごしたとはいえ・・・年若いシズリにはいつまでたっても慣れることができぬ感覚で。このような傷は民間人には見慣れぬものだろうし、むしろ慣れてなどほしくない。永遠に無縁なものであってほしい。

未だ、自分の身一つ満足に守れぬ者には傲慢な願いかもしれぬが・・・せめて手の届く範囲のものを守れる人間になりたい。彼の未だ幼い色をたたえた草色の瞳がゆっくりと開き、シズリの顔を映したとき、その小さな唇が彼女の名を呟いたとき・・・心から切にそう願った。

タオルを絞る音が止み、かちやかちやという金属音がした後、再び静寂が室内を包む。

シズリが顔を上げると、タオルと包帯一式を持ったヒューバートの群青の瞳とばかり、と目があつた。

その群青がより濃さを増し・・・北に輝く一等星のように煌めいて見えたのは・・・果たしてシズリの気のせいだったのだろうか。

* * *

・・・き・気まずい・・・。

そう、ものすごく居心地が悪い。

今すぐでんぐり返り、のたうちまわりたいぐらいに恥ずかしく、そして気まずい・・・。

思わず喉の奥から洩れた溜息が・・・まるで・・・そう、甘やかな吐息のようにも聞こえ、喉の奥からくううという声にならない音が漏れる。

それすらもまるで・・・まるで私が・・・！！

（以下自主規制）

シズリは先程までの真剣かつ真面目な心持と雰囲気が一転した、何か・・・決してよくないと思われる今の状況に内心首をひねる。

そもそも！

いくら上司・部下の関係とはいえ、妙齡の若い男女が二人っきりで夜の宿屋の同じ部屋。

しかも私の方は上官殿手ずからにシャツを脱がされ、上半身は軍特製のアンダー１枚という何とも破廉恥極まりない姿。

（膝上丈のショートパンツも濡れているからそれも脱いだらどうだ、
とのお気遣いを頂きましたがそこは断固、それこそキツパリ・ハッ
キリ・スツキリと固辞することを死守いたしました！さすがにそこ
まで恥知らずにはなれませんとも、ええ。）

しかも、しーかも！

私が腰掛けるここは、華やかなレースとリボンをドバーンと、あか
らさますぎるだろう！とツツコみたくなるほどふんだんにあしらっ
たベッドの上。

その私の隣に腰掛け、丁寧に左腕に包帯を巻いて下さる部下思いで
お優しい上官殿。

そのお気遣いっぷり、部下の身を案じるお心遣いっぷりに涙がでそ
うなほどにその手つきは優しく・・・丁寧で。

でも。

・・・この状態をおかしいと言わずして、何をおかしいというのだ
ろうか！

まるで・・・まるで私が上官殿を誘惑しているみたいじゃないです
か！！（心の叫び）

ちよちよ、（生腕を）すうっと撫でるのはやめて下さい！！

わざとじゃない？血の跡を拭いただけで手が滑った？？

分かってます、でも、でも・・・。

いえ、けっこうです。

自分の身体ぐらい自分で拭けますから。

でーすーからー・・・せめて向こうでご自身のことにだけ専念していただけるとありがたいのですが・・・。

ヒューバートの瞳がやけに熱っぽく潤んでいるかのように見えてならない。

まるで・・・まるで彼女の面倒を見るのが楽しくてたまらない、というかのよう。

きつと彼を招喚するために切り裂いたこの腕を気に病んでいるのだろっ・・・シズリはそう自分に言い聞かせる。

でもこんな場所（レースでフリルなダブルベッドの上）でこんな姿（上半身はアンダーのみ）でこんな風に2人きりで・・・普段軍服できつちり首元まで指先すらも白手で覆われた素肌を上官殿に晒すだけでなく、あまつさえ手当をさせるなんて！！
これ以上に恥ずかしいことがあるだろうか・・・。

かあああとまるで音が聞こえそうな勢いで赤らむ頬が、思わず震える背筋がそれは自意識過剰の表れだと自分自身を咎めているかのよう。

包帯を巻きながら、時折素肌に這わされるその指はあくまでも優しく、むしろ気持ちがいらいら。

ゆえにむずむずとこそばゆくもあり・・・。

そんな自分が気まずくて、恥ずかしくて・・・シズリは何とか気をそらすべく、真面目な仕事の話題に切り替えるべく、霞みそうになる思考の断片をかき集め、働こうとしない頭に必死にムチ打つ。

きよろきよろと視線を移動させた結果・・・ヒューバートが処置してくれた肩に残る魔剣の痕が視界に入った。

そこは氷の魔刀の主であるヒューバートのこと、魔剣の威力を熟知しており、その処置はいかにも適切で鮮やかだった。

痕は残らないだろう、とは言われたが・・・全身まで燃え広がり、蝕むかのような熱や傷の痛みはこの身に刻まれ、忘れはしないだろう。

ゆえに、魔剣との相対の仕方について使い手としての上官の意見をうかがうべく、シズリは口を開いた。

だが・・・他の者には正しく、適切であろうとも、対ヒューバートのには話題を・・・言葉を、タイミングを間違えた。

「中佐、少々よろしいでしょうか？」

ヒューバートの瞳が、彼の魅力に慣れていなければ瞬時にぐずぐずと蕩けてしまいそうなほどに艶美な色を浮かべてこちらに向けられ、言葉の続きを促す。

シズリはその色気にうつつと気圧されつつも・・・頬を真っ赤にそめながらも何とか言を続けた。

「あのう・・・カンザキ少佐と焰の魔剣についてなのですが・・・
！！え、あの、中佐・・・？」

「手当」という名の名目でシズリの素肌を辿るという悪戯を楽しんでいたヒューバートにとってその名はまさに、ヒューバートという名の虎の尾を踏む禁句^{タブー}で。

しかもそれが思わぬタイミングで、しかも真っ赤に頬を染めたシズリの唇から転がり出たということが・・・先刻にようやと押さえこんだ燻^{くすぶ}りにあつという間に嫉妬と言う名の炎^ひをつけた！

ヒューバートはその端正な顔に微笑^{ほほえみ}を浮かべてみせた。

だが、その瞳に浮かぶ焰が彼の心情を真実に語り、暴き出しており・・・シズリは・・・思わず退路を探るが・・・それは無駄な徒労と
いうことで。

上官殿はおっしゃいました。

その顔に凍れる薔薇の如き冷たくも美しい微笑^{ほほえみ}を浮かべながら。

「では、その前にひとつ、君に大事な質問をさせて貰おうか。
シノノメ少尉・・・君はあの男^{カンザキ}が初めての接吻相手だったのかな？」

と。

その声は甘く冷たくも響き・・・シズリの背を、いまこの瞬間をも凍らせるのであった。

ゆるゆると響くその声が、腕に這わされたその指がシズリの退路を奪い・・・閉じ込め、締め付けていく。

退路ないし、船は暗礁に乗り上げました。

しかも前方には大艦隊、進路退路八方ふさがり、ドツボにハマった袋小路の行き止まり。

さて、どうしましょう

・・・

尻馬にのる男と禁句（タブー）（後書き）

何とか削って5,000字！

本当はヒューバート視点のものも盛り込みたかったのですが・・話がコロコロ変わり、文章構造がさらにおかしくなるので別話として公開するかも、です。

（ご要望があれば、ですが・・・）

しかも前半、シズリ視点にするという真面目になってしまいました。

ムーンライトで掲載中の現代恋愛モノも更新したかったのですが、時間が足りなくて。

明日更新できれば、と思います・・・。

嵐

それはまだ人々が力のなんたるかを知らなかったその昔

人々は雨は天からの恵み、乾いた大地と作物を癒す豊穰の幸いとして敬うと同時に・・・天からの暴力として恐れた。

荒れ狂う風雨は雨の神と風の神の降臨だと。轟く稲妻は雷神の振るう鎚の鳴り響く音であり、そのきんらめく火花なのだと。

そして魔法科学と技術の発達した今日こんにちでも、自然というものは未だ抗えない力であり、畏怖いふの対象であつた。

そう、外は嵐。

渦巻く風はさらなる風を喚び、降り注ぐ雨粒は砕けよとばかりに大地を叩く音が響く。

牙をむく自然と言う名の獣は窓の外で絶え間なく咆哮を上げているかのようで・・・人々は荒ぶる獣を諫める術もなく、ただ、ただその怒りが静まるのを願うしかない。ただ座し・・・時を待つしか術はない。

だが・・・その日、そのとき、その瞬間　　シズリの中に巻き起こったのは全く違う・・・様々な感情の渦という名の嵐で。

その内面とは裏腹に、周囲を包む空気はまさに嵐の前の静けさ。

音のない、乾いた静謐な空気の中お互いの　　ヒューバートとシズリの　　息遣いだけが、空気に震えを呼ぶように思え・・・シズリは我知らずと、唇をぎゅっと引き結んだ。

今日は幾度も噛み締め続けたおかげで、ただでさえ紅い唇がなおさら朱を帯びて色づいている。それが彼女自身に熱い眼差しを注ぐ、眼前の男の目には艶めくも誘っているかのように、都合よくも扇情的に映るとも知らずに。

脈打つ心臓が煩い。自身の頭の中で鳴り響く警鐘音が喚くように煩い。

寒いというわけではなく・・・むしろ身の内から熱く燃えるようで・・・脈打つ感覚に戸惑う。

震える指先を胸の上でぎゅっと握りしめるが、どくどくと熱い鼓動を感じるだけで何も押さえてはくれない。

シズリは内に沸き起こる何かに蓋をすべく、霞む思考に必死にムチ打った。

だが、乾く唇を舌で湿らし、何とかして唇を開いても出てくる言葉がない。形にするべき音が出てこない。ひたすら口を開け閉めしている己の何と滑稽なことが。

この過剰すぎる意識を仕事の話に逸らせようと、この雰囲気^{ほかのこ}を打破すべく、何とか浮かんだ話題を舌にのせてみる。

雷よりもなおうるさい、自らの鼓動の音から耳を塞ぐかのように。ひたり、と向けられた熱っぽくも煌めく群青の瞳から必死に目をそらすかのように。

嗚呼、^{ああ}それなのに・・・。

嵐は外に在らず、内にこそ在りて。中佐殿こそがまさに嵐そのもので、

その名を口にした途端、一氣に部屋の温度が1、2度ほど下がった気がしてならない。

ヒューバートの周囲を？不穏な空気？と？静かなる怒り？が包んでいるような気がしてならない。

シズリは必死に己が失言が何なのか、頭の中で振り返る。

親切にも手当をして下さっている上官殿に対して・・・何とも自意識過剰な、恥ずかしいことを考えていたのがバレたのだろうか・・・。

何が上官殿の氣に障ったのか・・・必死に考えれども、考えれども・・・思い当たるところがない。

神様、やはり私には平凡な日常など望むべくもないのでしょうか？のったり、のたりと薔薇の上の散歩なぞを楽しんでいる蝸牛を羨ましいと思う日が来るとは思いもしませんでしたよ、ええ・・・！！

秀麗、としか言いようがない顔はつい先ほどまで、相手の爪の先まで蕩かすかのような艶美な微笑を浮かべていたのに、今は再び、いつもの無表情に戻っている。

その瞳も黒みを帯びた群青色に戻り、内なる心情どころかどんな感情とて、読み取ることができない。

だが、その纏う雰囲気は明らかに剣呑さを帯び・・・徐々に周囲の空気を圧迫するような威圧感を醸し出す。室内の空気が重く、息苦しい。

シズリはその威圧感に思わず膝と腕で後じさりしかけた。

逃げたい、切実に逃げたい！！

本能が、これまでの死線で鍛えた第六感が逃亡せよ、と頭の中で警告する。

だが・・・肝心の身体がまるで縫い止められたかのようにぴたりとその場から動くのを拒む。

己自信の不甲斐なさに愕然とすれば、いつの間に捕えられたのか、無事な方の右腕がその右腕にしっかりと掴まれていることに、自らの腰を抱き止めるようにその左腕が廻されているという現状に、ようやくと意識が向いた。

その腕はがっちりとした檻のようで、離すまい、とばかりにシズリを捉え、包みこんでいる。

手首を掴んだその掌から伝わる熱は熱いほどで、硬い皮膚やマメの感触すらも肌に伝わる感覚がなお鮮やかに、これが現実だと訴えている。

腰に廻された腕は楽々とその細腰を巻き取り、さらに絡め取るかのようにぐっと力がこめられたため、男性らしいしっかりとした筋肉が流れる動きをダイレクトに感じた。

咄嗟に逃れようとするそばから一息で引き寄せられ、その広い胸に抱きこまれる。

それはあつ、と言う間の出来事で・・・抵抗する間も、驚く暇もな

いほどだった。

すらりとした体軀に似合わず、その胸は意外なほどに厚く　　堅
い胸板と鋼の筋肉をぐっと押しつけられた自らの頬で感じとる。

まだ少し湿ったままの髪に指を差し込まれ、うなじのあたりまで梳
かれると再び背筋が震える。

髪の中を指が通り、やがて差し込まれた指の腹で背筋のラインを確
かめるように辿られると思わずため息が漏れた。

不快じゃない、むしろその逆で。

だから・・・怖かった。初めて臨んだ戦場で感じた怖れとはまったく
違った意味で・・・シズリは震えた。沈黙が部屋におち、その静
けさすらも怖ろしい。

そして短くも長い　　実際はほんの数分だったが　　沈黙の後、
彼の人が口火を切った。

上官殿はおっしゃいました。

先程までの無表情から一転、その顔に凍れる薔薇の如き冷たくも美
しい微笑を浮かべながら。
ほほえみ

「では、その前にひとつ、君に大事な質問をさせて貰おうか　　。
シノノメ少尉・・・君はあの男カンザキが初めての接吻相手だっ
たのかな？」
と。

捕えられた胸の中で落とされたその問いへの答えの持ち合わせなど当然あるはずもなく。魔剣の話をするつもりだったのが、なぜそんな話に転じるのか・・・皆目その意味が分からない！

シズリは内心パニック状態になりながらも必死に考える。返す刀を探して、打ち返す球を探して。

ええっと・・・そもそも。

なぜゆえ、こんなに密着した体勢で、そんな私的な話題を私にふるのでしょうか？

そしてそれを知るのが上司の義務なのですかね？答えることも部下としての義務なんですかね？？

ちょ、もーちよつと離れて下さると嬉しいのですが・・・。息苦しいし、鼻がむずむずします。

・・・あのカンザキとの一件とて・・・私も最初は驚き腹を立てましたが　結局は人工呼吸のようなものだったではないですか。

もつとも、彼の魔剣のせいでもあるから感謝gするとは言えないけれど・・・敵に塩を送るとも云える彼の行為は・・・不思議としか言えないけれど。

でも、でもでも・・・なぜ、どうして中佐殿はこんなに怒っているのだろう。一体誰に対し、何を怒っているのか。・・・やはり分からない。

その胸板にぎゅうぎゅうと押し付けられていると・・・何だか思考がどこか・・・はるか彼方へと飛んでいってしまったかのように感じる。ちょ、私は猫じゃありませんよ　　！！

何とかその腕の中から逃れようと頭を振れば、自らの黒髪がさらりと頬にかかる。その黒が・・・否応なくあの黒髪黒目の男の顔を思い出させる。シズリが齒を立てた唇から滴る朱い雫を舐めとりながら、からかうような表情を浮かべたあの顔、思わぬほど真っ直ぐにシズリを射抜いたあの闇色の瞳が脳裡に浮かび・・・ふり払うかのように再度頭を振った。

カンザキ 神崎 神裂き :

そのとき、不意に脳裡に浮かんだあの風景。

涙にけぶる草の野原の向こうに浮かぶは白い月、月が浮かぶは闇色の空、空から降り積もるは燃えたつような紅の葉・・・踏みしめた足元でほろりと崩れた土の匂いと伸びた影。忘れる、と囁く声、視界を遮った掌の感触 : . .

憶えていないはずの、あるはずのない記憶。
は、と一瞬飛びそうになった意識を再びたぐり寄せる。いけない、思い出すな、あのことは・・・忘れたのだと。

何とか今の現状に意識を集中させる。つい先ほどまで呑気な、能天気なことを考えていたのが嘘のようだ。割れんばかりだった心臓は一瞬、意識が逸れたせいかやや治まり、頭も少し冷えたような気がする。

だから気づいた。

・このままでいるわけにはいかない。

不思議と居心地がよい……。だけど明らかに心臓に悪そうなのこの檻の中は　自分シズリなぞのいてよい場所じゃない。そう、ここはシズリのものじゃない。お前のような者はわきまえよ、と内なる自分が自分に囁く。

「何を考えている？」

黙するシズリの耳に、普段ではありえないほど近い距離から再び声が落とされる。耳に被さる髪をすくわれ、後ろに流されるとさらさらと音をたて、その掌に束となってこぼれた。

しばし髪の感触を楽しんでいたその指がそつと首筋を辿り　顎に当てられたかと思うと唇をなぞられた。

唇で感じたその指は優しく　はるかな郷愁をも思いおこさせた。それは……。未だ残る、ほの甘くも苦く、後悔ばかりの記憶。押し込め、鍵をかけたはずなのに。どつと記憶が、感情の渦が堰を切つて押し寄せる。

「シノノメ少尉・・・質問の答えは？」

そんな風に呼ばないで。微笑いかけないで。優しくしないで。抱きしめたりなんてしないで。そんな瞳で私なんかを見ないで。・

たかが唇、それだけじゃないか。それに一体どんな意味がある？私はそんなたいそうなものじゃない！
惑乱・困惑 ややもすれば怒りのような感情が胸を衝く。やがて・・・そんな思いが上官殿へと矛先を向け、ぞろりとした感情がかま首をもたげる。

そもそも 貴方だって。

ローザンヌの街でエスコートしてくれた姿勢はいかにもスマートで・・・女性の扱いにもさぞかし慣れているのだろうと思われた。そしてたとえ部下であるとはいえ・・・女性と同室でもいつこうに構わない、といった様子で焦ることも疑問に思う風でもなく。つい今しがたも・・・男女ではシャツの合わせもボタンの位置も逆なのに、驚くことも戸惑うこともなく、シズリのシャツのボタンをあっさりと、するすると手慣れた様子で外してみせた手つきも鮮やかで。

その手は女性をよく知っている。
そう、感じた。

ふつつつと内側から急速に、ありえないほど沸き立ち、煮えるものを感じる。先程までの震えはいつのまにやら止まり・・・その替わりに燃え立つように熱く、こみ上げる何かを感じる。

きつと顔を上げ、ヒューバートを見上げた。抱き止められたままの状態だったため、その群青の瞳がつかないほど間近くこちらを見下ろし、目と目があう。

その瞳を強い視線で見返せば、やや驚いたような色が浮かび、シズリの右手を捕らえたその手の拘束が緩んだ。

急激に沸き立ったその衝動にどつと流された。ヒューバートが何か言った気がしたが、それも耳には入らなかった。膝立ちになり、右手でそのシャツの襟首を掴み、ぐつとこちらへ引き寄せる。

そして・・・シズリはその唇に噛みつくような接吻を落とした。

嵐（後書き）

更新、遅くて申し訳ありません！！

今回は少し、シズリの過去の記憶を匂わせてみました。

あと、上官殿・・・シズリのためにけっこう頑張ったことが逆に

「・・・この人女慣れしてる！！」と不信感を持たせたようにww

でも結局、シズリのファーストキスが誰か、今回は答えになってませんね・・・。

<閑話>彼の想いは彼女の戸惑い（前書き）

第20話「尻馬にのる男と禁句」^{タブー}のヒューバート視点の箇所です。

<閑話>彼の想いは彼女の戸惑い

ちやぷん、ちやぷん . . .

室内に水音が響く。

外の嵐がまるで他所事よそことであるかのように、この部屋の内側はしんと静まり・静けさに満ちていた。

小机の上に置かれた湯桶の前に立つ男と、その背を見つめる女の間
に横たわるものはベッドと沈黙のみで。

無口・無表情、氷の男、軍人の鑑などという二つ名で呼ばれる我らが上官殿・・・ヒューバート・ヴァン・ラーツイヒ氏（27歳）はその夜、ある意味絶好調であった。

彼が秘かに恋する副官シズリ・シノノメ（21歳）とひとつ屋根の下、同じ壁の中、後ろ手にドアの鍵がチャナ、え！何ですかそのラブシチュ、それって袋の鼠？まさに鴨ネギとことですか？？な状態で。

この状況に心が躍らないと言ったら それは嘘だ。大いに間違いない。
なく嘘だし、そうじゃない男がいたならぜひともその正気を疑いた

い。
尤も、ヒューバートは無口・無表情が標準デフォ装備なもので、いたって真面目な顔にしか見えないが、宿屋の主人を目線のみで脅したあたり・・・いやはや、なかなかどうして・・。

そのとき、ヒューバートは例のごとく無表情という名の面を顔に貼り付けたまま、しかしその実、心はついていないほどに浮き立っている自分自身に若干驚きつつも躍る心を極力抑えようとしていた。そう、冷たき氷の男、と呼ばれている（らしい）自分が、だ。こんなことは確かに非常に珍しいことで。彼女と出会ってからこういう自分がいることを知り　正直、自分自身驚いている。

先程までのシズリとの攻防の末、彼女の怪我の手当をすることを了承させ、今は宿の主人が準備してくれた薬液で消毒薬と傷薬の調合にとりかかっている。

調合という作業自体、久しぶりだ。だが、薬液などの独特の香りで気分が落ち着いていくのを感じる。

冷静に、そう、冷静に。自分にそう言い聞かせながらひたすら手順通り、正確に手を動かす。

宿の部屋が他にないという公明正大な理由をもとに彼女を説得し、宿屋の主人にご理解頂き（別室の鍵を出そうとしてきたが・・・目で？お願い？をしたらこちらの気持ちをよく理解して貰えた模様）、傷の程度を確かめるついでに彼女のシャツのボタンを外すという栄誉に与ることができたのは僥倖と言えよう。

そう、これは怪我をした大切な部下、しかも年若い女性を一人にするわけにはいかないからだ。そして、シャツを脱がせたのもあくまでも怪我の具合を診るため、であり。

決してけしからん、不埒な目的なぞない・・・たぶん。そう自らに言い聞かせる。

勿論、誓って何かやましいことをする気はない。今はまだ、そういった関係ではないし、負傷した上に疲れ切った彼女につけこむようなことはしないつもりだ。

上司として、男として、そして理性ある人間として。

ただ・・・先程まで彼女も今の状況に少なからず警戒をしていた様子だったが・・・その様子は傷ついた子猫が爪をたてるようで可愛らしくて・・・少々苛めてしまった気がする。

何より彼女自身、気づいていないようだったが、これまでの？上司？としてではなく、？警戒すべき異性？として漸く自分を見てくれたようで・・・内心その実嬉しかったりもする。
警戒されて喜ぶ、というのも変だが。

だが　　広げたシャツの下の肩口に広がる魔剣と魔気の痕、左の掌から肘にかけて切り裂いた傷を改めて目の当たりにしたときは・・・
・痛いほど胸が軋み・・・じわりじわりと怒りが湧き立った。その荒ぶる感情を努めて抑え・・・心を鎮めた。

これでは　　彼女をまた怯えさせてしまうだろうから。

もし一緒にいたならあんな痕は決して受けさせなかったし、自分を喚ぶためにあんな傷を決してつけさせはしなかった。

ヒューバートを喚んでくれたことはそれだけ信用されている、頼られているということが実感でき　　嬉しいことではあったが

自らより上位の存在を2つも召喚するには大量の魔法力と媒介を必要としたはずだ・・・それが彼女にどれほどの負担を、痛みを伴わせたことか！こんなことは二度とさせたくない。

そう、二度と。

綺麗な腕だというのに・・・白く、滑らかな手だというのに・・・。今は大きな傷がその左腕の掌から肘にかけて走っている。肩にはひきつったような傷痕がある。

痕は残させないよう治療するつもりだ。そして、二度とこんな傷など彼女にはついて欲しくない。

彼女の白い肌に痕なぞ残ってほしくない。

だが 軍人という常に危険を伴う職に就いている以上それは難しい。若い彼女は辞めることなど考えもしていないだろうし、やはり・・・彼女には信頼できる副官としてそばにいてほしい。

彼女を愛しく思う気持ちと同じ軍人として、重宝する副官としてそばに留め置きたいという相反する気持ちがせめぎ合う。

答えは出ない。そして何よりも彼女自身の解は聞くまでもなく明らかで・・・その選択に自分が関わる隙すらないことが分かっているだけに秘かにもどかしくも悔しい。

だからせめて、いついかなるときも最も近くで彼女を守れる存在でありたい。

そう、心からそう思うのだ。

思わず握りしめた拳に力がこもり、自分自身の感情の強さに改めて驚かされる。

この俺が、と。

あまり感情が高ぶれば、また無意識で魔刀が出てきかねない。

今日などは感情の振り幅が大きかったせい、無意識のうちに出生てしまい、それは軍人として、魔刀の主として不適切なことだったと改めて自分自身を戒める。

ゆっくりと拳をほどき、引き結んだ唇をゆるめ、高ぶりかけた感情を抑えるべく再び作業にとりかかる。

ようやくお湯の温度も人肌に近い温度に下がった。温度を確かめながら、薬液を分量通り垂らし、手でかき混ぜながら湯桶の中でタオルを絞る。複数の薬液の入り混じった独特の薬草と薄荷が入り混じったような清涼感のある香りが鼻腔をくすぐる。

それは嗅ぎ慣れた香り、下士官時代の自分を思い出させる。未だこの身体に染みついたあの血と土と魔力反応独特の重みのある空気の入り混じった匂い。

それは戦場の、死と生の匂い。暗い記憶の匂い。消毒薬や傷薬の調査は前線では日常的にやっていたことだ。時には手負となった上司・同僚のために、またあるときは自らのために。

だが・・・淡々とこなしてきたこの作業が、彼女のためとなれば、こんなにも心が浮き立つことに思えるとは思ひもなかった。何かできるということ、彼女の面倒をみるのがこんなにも嬉しいことだとは。

親友にも、お前は無表情すぎる、お前の表情筋は他の筋肉に全部持っていてかかれたんじゃないのか、と言われる自分だが、彼女が下に就いてくれたこの一年で、随分感情の起伏が大きくなり、面に出ることも多くなつた気がする。

そして、そんな自分も嫌いではないとさえ思える。だが今は。今さらながらも頬が緩んでいるのでは、と表情を確かめ、引き締め

薬液を含んだタオルから一滴、雫が湯桶に落ちる音が静かな部屋にやけに響いて聞こえた。

てきばきと作業をこなす自分の背中に、彼女のとまどったような、落ち着かない、といった視線を感じ、強く意識する。

いつも控え目で真面目な彼女は腕に負傷したとはいえ、上司に面倒を見て貰うということに抵抗を感じるらしい。

確かに、今の二人の関係は「上司と部下」。

尤も、彼女さえ許してくれるなら、喜んで「上司と部下」以外の関係になるのだが。

いや、むしろ切望していると言えよう。・・・だが、彼女はなかなか手ごわい。

それはこの不調法な自分自身にも大いに理由があるのだろうか。

そして。

ヒューバートは一旦作業をする手を止め、考え込む。

こうして二人きりで無駄に華やかな寝室にいと・・・妙な気分になる。そもそも何だ、このレースとかリボンの少女趣味な寝台は。

昔、当時は幼かった妹に無理矢理読ませられた絵本の挿絵に載っていた物語の王女の寝台のようだ。確か眠りの森の城で眠り続ける姫に王子が接吻したら云々・・・とかいう話だったような。

だが、この純白なりネンの白さ、清純そうな乙女趣味なベッドが・・・今はむしろ淫靡に誘う城のように見える。

・・・自分の理性を試してるのか、と聞きたくなる。

再び手を動かし、作業に没頭しているふりをしながら、もやもやる気持ちを抑えようとすれば、先ほど彼女の肌に（さりげなく）触れた自らの指が視界に入る。

傷を検分するために脱がせたシャツの下の肌が白く、そしてこの指先で辿った肌がしつとりと滑らかだったことなどが思い出される。

再び手が止まる。全身がかつと熱くなる。

未だ彼女の視線がこの背にあるというのに。

あの碧い、緑と青の入り混じったような、不思議な色あいの瞳は純粹な信頼感という色でこの俺を見上げていたというのに。

・・・やはり自分の理性を試しているのだろうか。

不穏なことを考えていたせいか、思わずタオルを絞る手に力が入り・・・最初の一枚は手の中で糸くず状に裂けてしまったことは・・・ここだけの話だ。

それに・・・親友であり、彼女の兄でもあるミナトにこの姿を見られたら一体何と言われるだろう。

奴のことだ、間違いなく腹を抱えて笑うに違いない。ヒューバートは濃いこげ茶色の髪に空のような青い瞳の親友の顔を思い出す。

「氷のヒューバート、据え膳喰らわず、おあずけ喰らう！こりゃいーわ！！座布団一枚持ってこーい」

とか何とか言いながら。

いや。

さすがに・・・同室の部屋に持ち込んだこと、怪我の治療のためとはいえ、彼女のシャツを手ずから脱がしたことなどなど・・・もしミナトが知ったなら・・・ただでは済まないだろう。

いや。

正面切って殴りかかれたりするならまだいい。喜んで、言えば特殊な性癖があるようで語弊があるが・・・彼女のためならいくらでも殴られよう。

そもそも、彼女が負傷したことはそばにいなかった上官である俺の責任でもある。

殴られても文句は言えない。そう思う。

だが　　確か、奴の特技は投げナイフのはず。あんな顔であんな

性格の奴だが・・・腕は確かだ。

へらへら笑いながら、まっすぐ前を向いて歩きながら、後ろにぱいっと投げて仕留めているのを見たことがある。殺気の一つも出すこともなく、だ。

できれば背後からぶすり、はぜひご遠慮願いたいところだ。

ヒューバートは親友の、その人懐っこい、いかにもいい人でござい、と言った顔が瞬時に軍人のそれになったときの表情を思い出す。

瞳を薄く細めながら敵の寝首を搔くのなぞお手の物だ、と物騒なことを言いながら黒く嗤っていたときの表情を思い出す。

一体、なぜ奴は暗部に行かなかったのか？

そしてミナトは28歳という年齢や中佐という役職にそぐわず・・・まるで20代前半のような童顔をしている。

しかも常に笑顔を絶やさず、社交的で明るい性格のため、知らない者の中には甘く見て取る輩もいるが・・・なめてかかった者は死ぬほど痛い目に遭う。

下士官時代、急遽壁と親友になった相手をその身体から僅か数ミリという絶妙な僅差でナイフで縫い止め、綺麗な人形ヒトガタを作ってみせたことを覚えている。

しかも、にこにこ微笑みを浮かべながら、だ・・・あれは確か、こともあるうにミナトのことを「くさい、×小僧！」と野次った残念な頭の奴だったが・・・そういえばあれから姿を見ないな・・・。

物騒なことを考えていたせいか、思わずタオルを絞る手に力が入り・・・次の二枚目も手の中で糸くず状に裂けてしまったことは・・・こ

こだけの話だ。

そう、ヒューバートとしては誓って、無理に迫ったり何かするつもりは（一応）なかった。

同じ部屋で彼女の様子を見守り、少々世話をやき、彼女をゆつくりと休ませ、自分はその休息を傍らで、最も近い位置で守るつもりだった。

薬湯でシズリの素肌を清めたり、うつかり手が滑って腕を撫でてしまうというアクシデントがあったりなど、役得とばかりにシズリの初心な反応をこっそりと楽しんだりもしたが。

以前よりそうだと思っ**て**はいたことではあったが……あることを改めて確信できたというだけでも、十分な収穫だ**と思っ**ていた。

だから安心して「手当」という名**の名目**でシズリの素肌を辿るとい**う**悪戯を楽しんでいたヒューバート**にとつて**、その名はまさに、禁**タ**句で。

だが……そのとき思わず取った、衝動的な行動が思わぬ嵐へと導くとは……このときのヒューバートは知る由もなかった。

<閑話>彼の想いは彼女の戸惑い（後書き）

ヒューバート視点の部分を削除した、と後書きで書いたところ、掲載を

ご希望下さる方がちょこちょこいらったので閑話として載せてみました。

ただ・・・元の文章は数百文字だったのに一気に伸びました。

そして、シズリ愛用の仕込みナイフについてといった地味な裏設定を書くこともないまま、代わりにミナト氏に関する記述が出張りましたw

こうして裏設定が追加されていくのかな、と。

そろそろ登場人物設定紹介とかも必要な頃かな、と思ったりもします。

（何よりも私自身が設定を忘れつつあります・・・。）

焦燥と忘却のカタストロフィー

軍人というものは厄介な生き物だ。

シズリは我ながらそう思っている。

平時でも、たとえ休暇中でもいつ何時呼び出しが入るか分からないし、どんな些末なことでも視界に、意識にひっかかれば条件反射で身体が動き、勘ぐってしまう自分がいる。

そして、そんな自分自身は年頃の若い女性らしいとはとても言えないし、お世辞にも可愛いらしいとは言えないだろうと。

それも無理はない、と自分自身へと言い聞かせる。

シズリはまだ軍人とはとても言えない、ひよつこの見習いと言っても過言ではなかった士官候補生時代から、度重なる遠征へと駆り出されてきた。

他国からの協力要請により、勃発した内乱の鎮静やまるで終わりが
ないかのように思えるほど何度も続く戦乱の鎮圧のために。

それこそ何度も、何度も。そんな日々を繰り返し、繰り返して日々
を、年月を重^{としつき}ねてきた。

それが自分の選んだ道、進むべき道なのだから。

今でこそ周辺各国の情勢も落ち着き平和めいてはいるが、年若いうちに数多の苦い経験をしてきたことをこの心が、身体がしかと骨身に沁みて覚えている。

己の身体に染みついた苦い記憶も、焦げるような匂いも、消えていく命の音も・・・失ったものも、守れなかったものも。

早くから戦場での実戦を経験し、死線を潜り抜けてきたゆえに染みついた軍人根性が、意志とは関係なしに身体を機能させる。それは平時でも同じで。

たとえば 人間として必ず取らなければならない睡眠という面でも同じこと。

下手をすれば48時間寝ずのぶっ通しの行軍にも耐えられること、短時間でも濃縮された睡眠を取れることが軍人には基礎中の基礎として求められる。

それが生死の分け目ともなるといって過言ではないのだから。

だから休みの日だろうが、仕事のある日だろうがシズリはいつも必ず決まった時間に起きるよう、体内時計が機能している。

そして・・・それは今日も同じこと。

シズリはゆつくりとその瞼を開き、数度瞬きを繰り返した。黒い瞳の下、蒼い瞳は未だ焦点が定まらず、しばしぼんやりとした色その瞳が映す。

まだ眠りの雲という靄がかったかのような意識の中・・・習慣というものはある意味恐ろしいもので、まず、今が何時なのか自動的に確認しようと頭が動き始める。

今 マルゴサン
・・・目が覚めたことから察するに・・・現在時刻は05:30
過ぎかそのあたりといったところだろうか。

今日もいつも通りに目が覚めた・・・つもりだったが少々・・・いやいや・・・何だかおかしい気がする・・・何となくひっかかるというか。

それはちゃんと目が覚めていない、ということだろうか。ぱちり、ぱちりと数度瞬きを繰り返してみる。

目が覚めた直後、完全に眠気が取れていないという点から、いつもより少々早い時刻の気がする。うん、それはおかしくはない。よくあることだ。

何か気にかかることや大事な任務がある場合、早めに目が醒めることは慎重で几帳面な性格のシズリにはよくあることなのだから。

だが・・・何かがおかしい。

横向きに寝た体勢でいることは分かるし、感触からしてあたたかく寝心地のよいベッドにすることも分かる。

けれども、ちらりと生じた違和感が拭えない。うなじの毛が逆立つような違和感。

むしろそれはどんどん増すばかりで。

ここは・・・自分のいつものベッドじゃない。うん、それも分かる。

しかも、目を開けたはずなのに、何も見えない。例え暗闇だろうと夜目がきくよう訓練してあるから、夜でも平気なはずなのに。

・・・いや、見えてるはずなのに、顔が何かに押し付けられており

ますよ？

さすがに窒息死しそう、というほどではないけれど・・・うーん、動けない。

枕にしては・・・んん？・・・硬い。硬くてあたたかい気がする・

・・・でも何だか気持ちいい・・・。

もう少しこのまま寝ていたいような・・・。

思わず、再び瞼を閉じてしまいたくなってしまいそうになるが・・・もぞり、と身じろぎをしたその硬い何かの動きが何かを、先ほど感じた違和感を呼び醒ます。

再び頭が機能し始め・・・最初に浮かんだ疑問がひとつ。

・・・

・・・

・・・てか！！ここ何処ですか！！？

先程までのふわふわとした浮遊感はあるという間に散り散りに離散していき、急速に意識が覚醒してゆくのを感じる。

いつものように勢いよく、起きようとするが、がっちりとかに押さえつけられているようで起きるところか身動き一つできない。

まるで・・・まるで何かに縛り付けられ、閉じ込められているかのような状態だ。

そして先程感じた違和感はやはり変わらず。

何かに押し付けられた状態の顔が・・・目が覚めた今となっては少々息苦しい。

うう、空気プリーズです。

シズリはしばし、そのままの体勢で想定しうる事態を思い浮かべてみる。

・・・・
嘘！！まさか知らないうちに捕縛されたとか？？

いつの間に、何処の国の誰に！？？
ええっと・・・昨日、私は何処で何をしてましたっけ・・・？

逸る気持ちを押さえつけ、しばし考え込む。思い出せ、お前は昨日何処へ行き、誰と何をしていたのかと自分自身へと自問自答する。相変わらず身体の自由は利かない状態だが、頭の方はフル回転を始め、脳内の処理機能が昨日の出来事に関する帰結へと思考と記憶を導いた。

・・・・
・・・って！！どええええええええええ！！！！

その瞬間、心臓がどっどっどと、平常時ではありえないほど早く脈打ち始める。

逃げろ、早く！と本能が叫びながら警鐘音をガンガンと鳴り響かせ始める。

ぶわわっつと背筋のうぶ毛が、全身の毛が逆立つ感触を感じながらも・・・恐る恐る、なるべくこっそりと自らの頭が押しつけられた

それから離れるべく身をよじれば、頭上からあまい、甘い・・・心蕩かすような声が耳元へ落とされた。

「・・・シノノメ少尉・・・？」

シズリをその腕に抱き込んだまま、少し寝ぼけたような声で、まだ早い、もう少しこのままで・・・と言いながら、再びシズリを抱き込み、その髪へと顔を寄せたその人は・・・言わずもがな。

そう、上官殿、ヒューバート・ヴァン・ラーツイヒ中佐その人だった！

かちん、と硬直したのは一瞬。

ずざざざ　　っと血の気が引く音がしたと思ったら、次の瞬間にはシズリはベッドの足元まで飛び退っていた！！

それこそ泡を食った猫の如く。

あれほどがちりとシズリを抱き込み、閉じ込めていたヒューバートの腕という檻の中から即座に、持てる瞬発力の全てを使って。

今なら反復横跳びで新記録を出せた自信がありますとも！！

こんな状況で、そんなくだらないことが脳裡をよぎるほど、そのときのシズリは混乱していた。

咄嗟にその場で自らの着衣の状態を^{あらた}検める。幸い、膝までの長さの大きなシャツのような前開きタイプの寝衣を着ているようだ。最悪の事態ではなさそうだ、と少しくほっとする。

しかし念のため、と・・・改めて寝衣の下を探ってみる。今着ているこれは、恐らく各部屋備え付けのものなのだろう。軽く、さらさらと指にやわらかい感触のそれが今朝はやけに頼りなく、薄いもののように感じてしまう。

えーっと。（軍の）胸当てよし、下着よし、そして・・・うつ！

ぐぐぐううつ！

（着ていたはずの膝丈の）ショートパンツとニーソックス・・・なし！！！！

そのときフラッシュバックしたのは昨晚の記憶。

途切れ途切れながらも脳裡をよぎったのは・・・昨晚の自分の恥ずかしい、ありえない行動。

その遅い胸板にぐつと近しく引き寄せられた自分の身体、捉えられた右の掌。

だが・・・それに抗ったのは自分自身で。

揺れるシルバーブロンドの前髪の間隙からのぞく、群青の瞳は驚いたように見開かれていた。

そのシャツを、上官殿の襟首をぐつと掴んだ自らの指先が引き寄せたものは・・・。

わたし・・・私・・・もしかして・・・!!!!!!

そのままベッドに突っ伏し、深い・・・深い絶望の淵へと落ちていく。我知らず、涙があふれてきそうになる。

自分で自分を殴りつけたい。いつそのまま燃えてしまいたい。燃えて消し炭になって窓の外へ、風の彼方へ飛んでいきたい。切実に、切に、心から、伏してお願い奉りますとも。

ああ、終わりだ。おしまいだ・・・まさにジ・エンド。しかもハッピーエンドじゃない、まさしくバッドエンドもいいところ！これにて閉幕、幕切れ、さよなら、さよならとなれたらどんなによいことか。

誰か教えて下さい！わたし、シズリ・シノノメ少尉は上官殿を襲ったのでしょうか！？

仮にも上司を、しかもしかも あ の、ヒューバート・ヴァン・ラーツイヒ中佐殿を！！！！

いやいや！！

でも・・・でも・・・！！

ごめんなさい、もしも・・・もしそうならば・・・ やっぱり知りたくない。

知りたくはないのです！！臆病者と呼ぶならそう呼べばいい、^な謗るなら、^{さげす}蔑むならぜひ何なりと。私が自分自身をそう思つのですから・
・・！

ああ、今すぐ穴を掘つて埋まりたい・・・いや、むしろ誰か、ぜひ誰か私を埋めて下さい。そしてこのままひっそりと、埋もれて消えてしまいたい・・・。

広いベッドの足元で、土下座するようにシーツにシズリはつつぷし、顔を埋めて身悶えた。
定かでない自分自身の記憶力の欠如と、ありえない、自分がしたとはとても思えない行動を呪いつつ・・・。

焦燥と忘却のカタストロフィー（後書き）

色々とすみません・・・。

この先まで書くつもりでしたが、長くなるのでとりあえず一旦切ります。

が、あまりにも中途半端なので、なるべく早く続きを上げたいところ です。

でも、この続きはヒューバート視点にするか、シズリ視点にするか・
・
ちょっと迷うところです。

理性と記憶のパラドクス

シズリはシートに突っ伏したまま、心の中でありったけの、知る限りの罵詈雑言と俗語^{スラング}を自分自身に投げつけた。

今すぐ消えたい！何処かへ消えた昨晚の記憶と同時に消えてしまいたかった！！

だが・・・何があったのか、自分が一体何をしでかしたか知りた
い気もする・・・。

でも・・・いや、ごめんなさい！

やっぱり・・・やっぱり知りたくないいい！！！！

そんな気持ち心が思考の海の底でせめぎ合い、塞ぎあう。相反する感情がごた混ぜに入り混じり、自分自身何をどう考えていたのかすら分からなくなる。

まるでバケツに満たされた透明な水に、赤と青のインクを垂らしたときのようだ。それぞれの色がバラバラに波紋を描き、絡まり、入り混じり・・・最後には深く、ほの暗い澱となって水底に沈みこんでいくかのように・・・。

視界を閉じ、耳を塞いでも他の感覚は正確に周囲の空気の流れを辿る。シートにつつぶしたまま身じろぎをすれば、肌から立ち上るうっすらとした香りがほのかに鼻をくすぐった。

既にうっすらとしか、その香も残っていないが、恐らく複数の薬液の入り混じった香り。ハーブのように甘くて、清涼感があり・・・
平時ならばその香に癒されたことだろう。

だが・・・今はそれもシズリにとっては慰めにはならない。

なーぜーなーら!!!

それらを調合し、擦りこんで下さったのはあの人で・・・さすが上官殿、調合の腕まで？ネ申？の腕ですか！・・・てか、どんだけ有能なんですか！

おかげさまですっかり肩も腕もスツキリパツキリとっても楽です。しかも香りまで素晴らしいとは・・・有能っぷりに涙が出ます。

なぜなら以前、私が調合を試みたときは効能はばっちりだったものの・・・異臭騒動になりましたから。（涙）

これだけ有能なら、むしろお荷物になる副官シズリなぞいらないのでは、と思えてきてさらに落ち込む。

しかもしーかも！

改めて自分の駄目さかげん、昨晚の出来事が瞬間的に甦った。薬液を調合し、擦りこんでくれたのはあの指で。

その指が肌を辿ったかと思うと、そして自身がしかしたと思しきこと（？）がおぼろげに甦り・・・ぎゃふん!!

心の中で絶叫。

かああああと音を立てて燃えそうなほど、頬が熱い。再びシート

に突っ伏しながらただひたすら身悶える。

色んな気持ちがせめぎあい、喉の奥からはくうううという呻き声となつて複雑な心持ちが音となつて洩れる。シーツにぐりぐりと押し付けた額が地味に痛い。

だが、そんなこともこの混乱のなかでは些末なことで、今はどうでもいいことだ。

むしろ頭よ醒めろ、記憶よ戻れ！・・・いやいやいや！！むしろ時間よ戻れ！戻ってください、お願いしますから！！！！

もしくは瞬間^{とき}を止めて！このまま永遠に！！！！

だが・・・皮肉にも、ようよう窓から差し込み始めた明け方のまだほの暗く、緩やかで穏やかな光は涙に霞んだ目にはありがたくも優しかった。少しずつ明るくなる光源にひかれて顔を上げ、目を向ければ窓の外はすっきりと雲ひとつない空。まるで昨晚の嵐が嘘みたに思える。

茜色と透明な青にうつすら白い色が入り混じった明け方の色に染まったバニラ・スカイ。まっさらな洗いたての、生まれたての空。シズリは胸に嵐を抱えたまま、呆けたようにしばし見とれた。そう、まさに現実逃避、にすぎなかったわけではあったが。

その瞬間^{とき}、ギシリ、とベッドが軋む感触がシーツごしに掌から伝わった。思わずびくん、と身体が震えれば 背に視線を感じた。

ひやり、と背筋が震える感触に、心の臓が鼓動を大きくひとつ打つ。

その視線の主は・・・暗がりにはんやりと光る白いシーツの波間からゆるりと身を起こした彼の人は。

未だ半ば夢か現か幻か、といった風情の男はぼんやりとした表情のまま、こちらを見つめている。開いたシャツの襟もとから僅かに覗く喉仏と鎖骨が色気を誘う。

少し乱れた銀色の房の下から覗く群青色の双眸は常よりも少しにぶい、ぼんやりと蕩けるような色を浮かべていた。

それはとろり、とろける濃い青さ。

少し黒つぶくも深く溶け込むその色は　心を、感情をその面おもてについぞ映さない彼の心を唯一映すその色は　今は濃い霧に蔽われたかのようにけぶった青だった。

そしてその背に立ち昇るオーラは・・・黒い不機嫌オーラそのもので。

ぎゃおうっうっ！っ、これは・・・間違いなく怒っていらっしやる！！！！

ええっと、（最近知ったのですが）、美男と書いてイケメンイケメンと読むそうです。そして上官殿は今日も美男イケメンですね！

寝ぼけた顔してても、寝癖ついててもイケメンってどういうことですか！？？むしろ隙を作って色気アップ！ル大作戦なんですか？生まれつきDNAにイケメン遺伝子配列済み、とか？？

そもそも何で朝っぱらからそんなに色気だしてるんですか！焦点の合わない視線でのエロビームの乱射は止めて下さい。無駄弾です。資源？の無駄遣いです。誤爆します。

悪霊退散！！・・・じゃなくて。（あわわわわ）

イケメン
美男退散！エロエロえっさいむ！！水平リーベ僕の船・・・じゃなくて！！

眠れるイケメン、じゃない・・・寝起きのぼんやり不機嫌イケメンオーラビッシバシの上司の姿に頬がひきつるのが分かる。

逃げたい・・・切実に逃げたい。我知らず歪む口許が、震える背が本能の叫びを己が理性に訴える。

もしシズリが犬か猫で尻尾があつたなら、その尾は間違いなくぶわっつとタワシ状に膨れ、股の間に尻尾を挟んでキャン！と鳴きながら隠れ場所を探してぐるぐるしていたただろう。

だが、残念ながらシズリは人間。当然ながら上官殿 ヒュー
バートもどんなにチートでレアキャラな設定だろうが、彼もまた（
おそらく・・・たぶん）人間。

そして、この部屋には隠れ場所も、逃げ場所もありはしない！

ここは腹を括ろう！私も女だ、責は取らしていただきますとも！！
シズリは即座にベッドの足元の床に飛び下りた。磨き抜かれた硬

い床木が裸足の足裏の下でぎしり、と軋む。

シズリ・シノノメ少尉、21歳。まずは、やれることからやりましょう！

今できること それは ・ ・ ・

？謝罪と土下座？

「中佐、昨晩は誠に申し訳ありませんでした！！！！！！」

説明しよう！

土下座、それはシズリの出身地、ヒイツルクニに古来より伝わる最大敬意の謝罪のカタチである。

方法としては、

？ 一歩、左足を後方へ下げ、そのまま勢いよく左膝をつき、続いて右膝もつけて立膝になる

？ 立てた膝ごと臀部を床に下しながら、膝を僅かにハの字に開いて座る

？ 親指を開き、手指を真っ直ぐ揃えて床に三角形を形作るようにつける

（肘はくの字に曲げた状態）

？がつつと相手の瞳を強く見つめ、謝意を目で示す

？そのまま勢いよく、心からの謝罪の言葉を相手に告げ、上半身ごと額を床に

つけんばかりの位置までひたすら平伏

？ひたすら相手の許しを請う

シズリは一声叫ぶと、がばつと床に額をこすりつけんばかりに平伏した。姿勢は正しく、背筋は床から平行に伸ばして、だ。

女たる者、軍属たる者は清く、正しく、美しく！謝りましょう、誠意を込めて。

これは一体・・・どういうことか　。

ヒューバートは寝起きの、未だよく働かない頭をひねった。ちなみにヒューバートは早起きが苦手だ。正確に言えば・・・朝に弱い。すごく弱い。

さすがに遠征や任務中には切り替えるだけの気概と軍人根性はあるが、平時と休日はいい気が緩むらしい。我ながら情けないとは思

っていることではあるが。

そして起き抜けはとにかくぼーっとしがちで、機嫌が悪そうに見えるらしい。そのことで下士官時代に同室だったミナトから、散々っぱら文句を言われていた。

起き抜けのお前は本当に怖い、その不機嫌オーラをなんとかしろ、歩く大魔王が！と。もっとも、ヒューバートとしては一切そんな気はないし、単に寝起きゆえ、ぼうつとしてるだけのつもりなのだが。

だが、そんなヒューバートが今朝に限り、普段よりも早い時刻に目が覚めたのには理由があった。

先程まで確かにやわらかであたたかな感触が腕の中にあっただけなのに、その感触が、ぬくもりがなくなったから。先程まで確かにあったはずの胸の中の存在の消失感。

胸の中が急速に熱を失い、冷えていく。ぼつかりと空いたそれが、これまでついぞなかったはずの感情を己に教えた。

？サミシイ？と。

だが 先程まで確かに腕の中にいたはずの彼女が なぜ
か床で土下座。

ヒューバートは再度頭をひねった。ひねったところで解はなく、甲斐もない。

やはり謝られる意味が分からない。下げられる頭の意味が分からない。何よりもそんなところにいたら身体が冷えるだろうに。傷に

も障るだろうに。

ヒューバートは即座にベッドから下り、無言のままシズリの両脇に腕を差し入れ、その身体を腕にすくい上げた。その軽さとたよりなさに改めて庇護欲を覚える。

そういえば、昨夜はあのまま夕食も食べずに寝てしまった。朝食はしっかり取らせねば。

子供のようにシズリを抱え上げたまま、そんなことを考える。

「え　　と・・・中佐・・・殿・・・？」

とまどったようなその声でようやく我に返り、彼女の脇をすくい上げ、まるで子供に高い、高いをするかのように抱き上げたまま、という不安定な状態にいたことに気づく。

ゆっくりと彼女をベッドに下ろし、少し乱れた黒髪の一房を撫でつけてやれば、指先がかすめた頬が赤くそまっていることに目があった。思わずその顔を覗き込んでしまい、不注意な己を今さらながら後悔した。

翠と青の入り混じった碧い瞳で上目使いに見上げられると・・・くるものがある。不安げな、心配そうな瞳が潤んでいて・・・（以下自主規制）。

やばい。反則だろうが、その瞳は！！

思わず心中ながらも呻き声がもれそうになり、一旦ぎゅっと目を瞑った。

これは、健常な男の朝の生理現象を知つての態度だろうか。
朝からどうぞ、召し上がって下さいとでも？

だが都合よくもとつてしまいそうになる己自身を即座に打ち消す。
いや、間違ひなく彼女は何も知らないだろう。なぜなら間違ひな
く彼女は・・・処女おとめだろうから。本当の深い部分は未だ手つかずの
手折られていない花、それが彼女だ。

昨晚の出来事が一息に脳裡に甦る。

あのとき　襟首を掴まれ、ぐいつと引き寄せられた瞬間

沸き起こつた感情、それは愕き、困惑・・・そして湧き上がる
歓喜と期待。

あと少し、もう少し　甘い蜜はすぐそこに。

ヒューバートはそつと甘い睦言を囁くように、その名を囁き・・・
それを受け止めるべく顎の角度を下げた・・・が！

がつつ！

目には目を、齒には齒を・・・そして唇には唇を、といくはずが。
響いた音は空しくも。
重なる期待は甲斐もなく。

次の瞬間

火花が飛び散った。

残念ながら、男と女の熱情の火花ではなく、物理的な火花が。

急遽がくん、と軌道が逸れたシズリの額がヒューバートの下顎にクリーンヒットしたときに。

顎を押さえ、呻きながらも空いた方の手でぐらり、とかしいだシズリを胸に受け止める。どうやら自らの歯で口内を切ったらしい。錆びた鉄のような血の味が口腔内に広がった。

腕の中でくつたりと脱力した彼女。上記した頬、熱く・・・熱を帯びた肢体。先程の頭突き攻撃さえなければ誘っているかのようだが・・・これは・・・。

「・・・にゃおう・・・」

寝てるのか!??

先程までヒューバートに向けていた視線はどこへやら、高みに高められたボルテージも落下傘兵もかくやとばかりに一気に急降下! 全身を一気に脱力させる平和な寝言にがつくり気が抜ける。

猫じゃあるまいし・・・一体どうしたことかと頭を抱えなくなる。・・・俺の理性を試しているのか、とがくがくとゆすぶってやりたく

なる。この高ぶりをどうしてくれるのか、と。

だが・・・寝ている、にしては様子がおかしい。

「いや・・・これは　　酔っている、のか・・・？」

酒の匂いはしない。・・・が、この香りは・・・覚えのある香りに、身に覚えのある自分の行動にがっくりと膝をついた。

ヒューバートは改めて自らの不覚を呪った。それこそ深く、深く、（駄洒落ではない・・・たぶん。）・・・いつだったか、「反省だけならサルでもできるー」とミナトが嗤っていた記憶があるが。

そう、この香りはマタビタの香り。

常人にはその実は単なる滋養強壮剤となるが・・・一部の体質のヒト・猫科の動物に強烈な効果をもたらす植物、それがマタビタ。

そして先程、シズリに塗布すべく調合した薬液にマタビタの薬液を混ぜた記憶があるからだ。

勿論よかれと思って、だったが・・・こんな風に作用する体質だったとは！たいていの毒物に耐性はあるはずだが、マタビタは毒物でないだけに耐性もなかったらしい。

そして・・・滋養強壮以外のマタビタの効果は・・・（もっとも通常は出ない効果だが）　　食欲増加、興奮、催眠、刺激　　そして媚薬効果。

ヒューバートの脳裡におぞましくも忌まわしい、マタビタの悪夢が甦る。

以前、ミナトと飲みに行った際にたまたま出されたマタビタ酒をミナトが飲み、酷い目にあった・・・そして、あれは悪夢としか言いようがなかった。

散々懷かれ、抱きつかれ、耳にかじりつかれ・・・挙句の果てにキスを迫られたときの記憶とおぞましさは鳥肌モノ以外のなにものでもなく!!

懷くミナトをちぎっては投げ、ちぎっては投げ・・・最終的には寝こけた奴を延々とかついで帰ったものだ。

あのときはよほど腹に据えかね、何度途中の路上に放り捨てて帰ってやるうかと思ったことか!!そして・・・酔っぱらいの御多分に洩れず、覚えていないときた。

以来、決してミナトをマタビタには近づけていないというのに・・・妹たるシズリまで同じ体質だったとは!

ヒューバートに抱き止められた状態で、シズリはすびすびと寝息をたてている。まさしく安心しきった、平和そのものな顔で。

ううゝん、と吐息とともに胸元に擦り寄られ、心臓がどくりと音を立てた。

そして・・・はた、と気づく。

先程のシズリの平時　常に理性的で冷静沈着な彼女　で
はありえない様子は・・・まさかのマタビタ効果なのか、と。

そして・・・
図らずも、俺は一服盛った、
ということになるのだ
ろっか・・・

理性と記憶のパラドクス（後書き）

お話自体は書いてあったものの、UPしないで放置してました・・・。
まだローザンヌ編終わらんのか、と自分にツツコミです。
そしてヒューバート、悪気なく一服盛ってた、の巻ww
ここのところ、シズリは不幸が続いております。

甘く、疼かせるもの

うつすらと、やわらかな朝の光が仄かにさしこむ宿の部屋。
部屋の中央に鎮座したベッドの中で見つめ合うは男と女。

こう書くとアレでR18な展開ですか！

「上官殿の」はR15です！（・・・たぶん）。

総員退避、回れ右　　！レッドカードにつき即退場！！

と、なりそうながらも・・・よく見ればそうではなく。

実際、黙する二人の間には言はなく、視線の先は交じらうことな
く膝に落ちるのみで。

だが・・・上官殿はどうやら再び眠りの雲に襲われ始めたらしい。
再びその目の焦点がぼんやり彷徨い始めている　　しかし、ここ
で二度寝されては困る！

ベッドの上にきちんと正座をしたシズリは改めて背筋を伸ばし、
真面目な話を続けるべく、きつ、と表情を引き締めた。

これは彼女自身は勿論、当事者であり、直属の上司たる中佐殿ご
自身にもきちんと事実を明らかにするだけでなく、　互いの認識を
一にすべき大事な事柄なのだから。

こほん、と咳払いをひとつ。

「中佐殿、そこにお座り下さいませ」

「・・・座っているが」

「ぐつつ・・・！ 失礼いたしました。では、改めて再度確認させていただきますが、昨晚は？何も？なかった、ということですよいいんですね？」

「・・・・・・・・・・。では聞くが、？何も？とは何が、だ？」

具体的に、かつ詳しく頼む、とぼんやりと霞んだままの瞳の・・・寝起きでござい、といった風情のまま、答えにくい問いをしれっと投げてる上司に・・・失礼ながらも少々いらつとくる。

？何も？つて・・・？ナニも？に決まっていますでしょうが！そしてそんなこと・・・言えるわけがないでしょうが！！そこはそれ察して下さいよ！！！！

え、もう少し詳しくお話下さい！そんな風にぶつぶつ言われても、よく聞こえません。もそつと大きな声でお願いいたします・・・。
・・・って！ちよ、なにまたまたうつらうつらとしてるんですか！
ちよ、ちよ、ま！！！！

いーやー！！！！人の膝を枕に寝ーなーいーでー！！

シズリに向き合ったまま、腰から下はベッドの上にきちんと正座したままで上体だけだったり、とシズリの膝の上につっぱしてきた上司の背をゆさゆさと揺らせども、揺らせども・・・聞こえてきたのはすすうという平和な寝息のみ。

先程話をしていたときも徐々に再び目の焦点がぶれはじめたな、これはまだ眠いんだろうなとは思ってはいたけれど・・・まさかこんなに急に、糸が切れたかのように突然寝こけるとは思いませんでした！

予想外です。不可避です。突然回避できませんとも！ちゃんと取説に書いておいて下さい！！（涙目）

だが困った。非常に困った状態だ。

うーん、と嘆息しながらシズリはしばし悩み、考える。

シズリに寝衣を誰が着せたのか、ショートパンツと靴下を誰が脱がせたのか　今は考えるまい。

否、考えてはいけない　そう、決して！！

そう自分に言い聞かせながらも、こうしてよくよく自分の、上官殿の着衣の状態を見てみれば、上官殿は昨日の服のままで・・・きちんとベルトもしたままだ。

自分も寝衣の下にはきちんと胸当ても下着もつけている。

（もっとも、胸当てに仕込んでいた仕込みナイフはさすがに抜き取

られていたが・・・)

そう　　昨晚は何もなかった。そうに違いない、うん！

落ち着き、きちんと順を追って考えていけば心が平生の状態に追いついてくる。つい先ほどのパニック状態からは何とか脱せたようだ。

すわ、私ってば上司を襲ったのデスカ！？とついないほど焦り、ぴいぴいと喚いた挙句に土下座まで披露してしまったことを思い出せば・・・思わず頬が羞恥に赤らむ。

もつとも、肝心の上官殿は寝起きの不機嫌ぼんやりオーラのまま、私を子供のように抱き上げたかと思えば、何やらブツブツつぶやくのみで・・・聞いてたんだか、聞いてなかったんだかよく分かりませんでした。

先程まで上官殿が(ぼんやりした瞳のまま、ではあったが)ぼつぼつ、ぶつぶつとつぶやいた限りでは、どうやら私は手当を受けながら、あのまま寝てしまったらしい。

何でまた突然寝てしまったのか、甚だ疑問であるし・・・その直前に何だか色々やらかしたような気がするが・・・上官殿がそう仰るのですから間違いないのだろう！

そう　　何もなかったのだと。そうに違いない、うん！

シズリは問題を、胸に浮かぶいくつかの疑問を他所の棚に上げておくことにした。これ以上考えないほうがよい、身のためだと自らに言い訳しつつ。

そう自分自身に納得させれば、改めて今の状況に戸惑う。相変わらず上官殿は（人の膝の上で）気持ちよさそうにお寝み中だ。

思わずしげしげとその寝顔を見つめてしまう。

睫毛・・・ながつつ。肌もきれい・・・。

そして、ほんの少しだけ、うつすらと顎に浮いた無精髭がどこか・

・普段と違い、より人間味を出しているようで。

確か27歳だと聞いているが、こうして眠っているときの顔は意外なほどに幼く見える。普段は一部の隙もないほど整った、どこか冷たくも遠い存在に思えるほどの美貌だというのに。

？氷の男？だの？無口・無表情・無感情の鉄面皮？だの言われているのが・・・嘘みたいだ。

シズリは知っている。

たった一年、されどこの一年の間、最も傍近くに仕えたことで、この上司が見た目ほど冷たくも超人たる人間でもないことを。

勿論、彼の持つその才は非凡でありえないほど優秀ではあるが・

・その実、努力を怠らない人だ。

あのと握りしめた掌は、日々剣の鍛錬を怠らないために硬い皮で覆われ、消えることのないマメがそこにあることを、部下をけして捨て駒にしたりなどせず、自分の身を盾にしても守ろうとする熱い心がその胸にあることを。

そんな彼が朝に弱く、寝起きも悪いことをシズリは新たに知ってしまった。意外な一面だと思う。

それにしても・・・まさかここまで、とは思ひもなかった。

そして今は子供のようにシズリの膝に頭をもたせかけて眠っている。普段、あれほど近寄りがたい雰囲気醸し出している彼が、だ。

少し乱れて寝癖のついたシルバーブロードにそつと指先を伸ばしてみる。それはさらさらとやわらかく 指の間でするりとほどけた。

その髪感触が指に気持ち良くて、ついついたどってしまふ。普段なら恐れ多くて絶対にできないことだけど。

眠り込んでいることをいいことに、膝を貸しているのを言い訳にこっそり、あくまでもこっそりとその感触を楽しむ。

こうして膝枕をしながら髪を撫でているとむずむずと・・・妙な気持ちさがこみ上げる。

上司が、あのヒューバート・ヴァン・ラーツィヒ中佐がこうして
無防備な姿を晒し、子供のように眠っている。
しかもシズリの膝の上で、だ。

そう思うと

（か・かわいい・・・）

突然、胸の奥にきゅうん、とうづくものを感じた。

ごくたまに、その美貌に見とれたときに感じるどきどきとは異なる・・・胸の奥をぎゅうつと掴まれているかのような　それは
甘く、痺れるような感覚で。

例えるならば、小さな子猫を抱き上げたときに感じた庇護欲に似て非なる・・・どこか甘くも痛く胸を苛む、これまで感じたことのないような感情で。

仮にも6歳も年上の、しかも上司に対して？かわいい？と、そう
思ってしまうのはいさかか失礼かとは思うが・・・慣れぬ感情に戸
惑わされた。

再びその髪に指先を伸ばし、その目にかかる前髪をそつと指で払
う。・・・もう少しこのままでもいいかもしれない。

そう思いながら。

そして、そう思ってしまったのが・・・恐らく疲れているであろう上司を起こさないためなのか、はたまた自分の中に生じたこの甘くうずくような感情のためなのか・・・それはシズリ自身にも分からなかった。

そのままどれほど座っていたのだろうか。

窓からは先ほどより先程よりもより光を増した陽光がさしこみ始め、鳥の鳴き声が耳に届き始めた。

だが、相変わらず胸を締めつけ続ける感情に戸惑いながら、半ば上の空のまま　再びその髪をすくいあげたところ、その群青の双眸がふ、とゆっくりと開かれた。

わわ！！髪触ってたのがバレました！？

思わぬ不意打ちにわたわたと焦るあまり、行き場を失くした手が空を舞う。

とっさに身を離そうとするも、上官殿はぼんやりと視線をさまよわせたまま、相変わらずシズリの膝の間に顔をうつぶせたままで・・・その手はシズリの腰に回された状態のため、離れようにも動けない。

こっそり髪をさわっていたのがバレたのか、そして何よりこの、バクバクと煩いほど鳴り続ける心臓の音に気付かれたのでは、と思えばいたたまれず・・・酷く気まずい。

思わず視線を窓の外にそらし、気まずい沈黙を、この場の空気をやり過ごそうとした。

が、腰に回された手にぎゅっと力が籠められ・・・シズリは思わず、自らの膝の上に顔を寄せたままの上司の後頭部を見つめた。

胸が鳴る。口内が渴く。汗の滲んだ掌をぎゅっと・・・握りしめた。

そのとき、上官殿の顔がふいに上げられ目と目があった。

その群青の瞳が物問いたげな表情を浮かべたまま・・・ゆっくりとシズリの瞳を射抜いた。

「シノノメ少尉・・・君は・・・」

「ごくり、と思わず唾を呑む。次に告げられる言葉は果たして非難の言葉か、それとも謝罪か、はたまた・・・？」

「黒、か・・・」

意外だ、君ならきつと白かと思っていたのだが。だが・・・云々。

（以下の言葉はシズリの耳には入らず。否、寧ろ入ることを拒否されました）

シズリ・シノノメ少尉、21歳。

生まれて初めて思わず上司の顔面に膝蹴りを入れてしまいました。
・
・
・！！

甘く、疼かせるもの（後書き）

こんなはずではなかったのですが・・・。

このままではヒューバート氏がさらに残念な人になってしまいそうです・・・。

普段はちゃんとかっこいい、まともな人（の設定）なのですが、寝ぼけて口がすべったもようです。

いっそ拍手小話にしてしまつか迷いましたが、載せてしまいました・
・・orz

申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0920u/>

上官殿の申すことには。

2011年10月10日02時44分発行